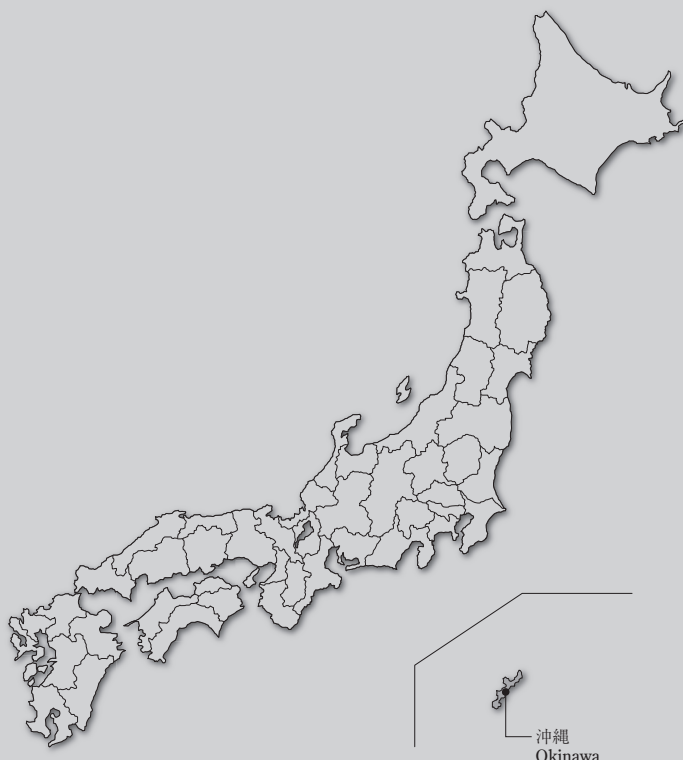


沖縄の民具

Mingu of Okinawa

上江洲均



凡 例

- 1) この表は、上江洲均『沖縄の民具』（慶友社 1973 年）をもとに元表を作成し、著者本人が加筆修正したものである。
- 2) 本表の分類および掲載順は、上記資料に準じている（下記目次参照）。
- 3) 「名称」欄の民具名は、『国際常民文化研究叢書 6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014）に記載の名称に揃うよう心がけたが、[民具名一覧編]に記載のなかったものについては便宜上つけた名称である。
- 4) 「沖縄での主な呼称」欄および「別称」欄は、上江洲均の研究成果にもとづく判断による。
- 5) 「画像ファイル名」欄に記載のあるものは、本叢書 322 ページ以降の画像一覧にまとめて掲載した。著者本人が撮影したもので、当該民具の使用地が明確であることから、「画像ファイル名」の後ろに「画像撮影地」欄を設けた。地名については、撮影当時の地名を記載している。
- 6) 「画像ファイル名」について
画像ファイル名は、出典をたどれるように名づけた。すべて上記資料からのものだが、本文内の画像と口絵画像とを区別している。
例) 沖 1_p013-ヒンブン 1
→「沖 1」は『沖縄の民具』、p13 掲載の「ヒンブン」（当該地の呼称）であることを表す。
例) 沖 1_図 001_イシガンドー
→「沖 1」は『沖縄の民具』、口絵（1）の「イシガンドー」（当該地の呼称）であることを表す。

目 次

生活用具・衣食住 ……………p. 307	団体生活・信仰 ……………p. 321
生業・運搬 ……………p. 313	画像一覧 ……………p. 322

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
生活用具・衣食住					
住居用具					
中垣	カチ(垣)	ヒンブン	家の前にある塀で、門前から家の中を見透かされるのを防ぐためのもの。外部から屋内正面の仏間が見えないよう視界を遮る役目がある。石を立てたものやチニブ(網代)を使ったものがある(『沖縄語辞典』)。名称の由来は屏風の沖縄読み。正しくはフィンブンと発音する。尚、沖縄の場合、衝立は室内ではほとんど使わない。	沖1_p013-ヒンブン 1 沖1_p013-ヒンブン 2	石製：勝連村浜比嘉島、 チニブ製：国頭村安波
網代垣、壁		チニブ	網代編みを指す。チヌブともいう。家の壁に用いることが多いが、垣根にしたり、ヒンブン(中垣)にした例もある。	沖1_p014-チニブ	宮古下地町与那覇
塀・壁		アンヌミ	チニブと同様網代編みであるが、目が大きい。茅壁のおさえにもするが、屋敷囲いにすることが多い。琉球竹の長さがほぼ限られているので、高さも限られる。	沖1_p014-アンヌミ	国頭村安田
障子	ショウジ	ショウジ	琉球竹を碎いて網代編みにしたものの。部屋を区切るのに用いる。長方形で、縁を丸竹で止めたり、木の枠に固定することもあった。		
		アカイ	紙張りの障子。「明り取り」の意。本土の「明かり障子」に相当。		
竹床	ユカ	インマヌユカ	竹や細木を用いた床。イヌマユカともいう。穴屋(掘立小屋)の場合はこれが多く、藁で編んでつくったトゥマを下敷きにその上に藁を敷いた。床下には、砂と土を撒いておいて一定期間を過ぎた後、集めて肥料にすることも広く行なわれた。	沖1_p015-インマヌユカ	石垣市川平
簾	シダイ	スندگان	竹簾。日除け、目かくし、風除け、埃よけの用をなす。雨戸から離れた軒に吊る。長さは2m内外。巻き上げる時は、上に串をおいていて、それを指して止める。	沖1_p016-スندگان	八重山郡竹富町小浜
水槽	ミジタンク	トゥージ	家庭の飲料水や使用水を入れるのにふつうは甕を用いるが、粟国島(アグニ)では石でつくった大きな水槽を用いた。トゥージの語源は「手水(ちょうず)」だが、近年ではミズタンクと呼ばれている。コーシチ(凝灰岩)製。海岸でおおまかな形をつくり、集落へ上げて来て仕上げる。摺鉢状に丸みをつけて作っており、たいていの家にある。	沖1_p017-トゥージ	島尻郡粟国村西
		イチタライ	イチタライとは「石たらい」の意で、与那国島で用いた。庭などに設置され、飲料水入れというよりも、布洗い、物洗いの水溜めとして重宝された。また防火用水溜めとしても欠かせなかった。	沖1_p018-イチタライ	与那国
井戸	カー	カー	宮古や八重山の釣瓶を用いる井戸はツルカー、沖縄本島のチンガーは「積み井戸」の意。クルマガーともいい、深い井戸では井戸車(滑車)を用いるところからか。ウリカー(下り井戸)は、階段を設け、そこを昇降して水を汲む古い方式の井戸を指す。	沖1_図002-カー 沖1_p019-カー	佐敷村小谷
井戸車	クルマ	クルマ	チンガー(アナガー、クルマガーとも)という深井戸で用いる水汲み用の滑車。伊平屋でランバ、宮古保良でナンバという。	沖1_p020-クルマ	島尻郡(久米島)具志川村北原
撥釣瓶(ハネツルベ)	ツリウイ	ツリウキ	二又の木の先に桁をつけ、横竿の先に竹を吊り、その先端に釣瓶をつける。横竿の反対側には石のおもしをつけ、その重みで釣瓶を上げる仕掛け。沖縄には例が少なく、おそらく本土の影響。	沖1_p021-ツリウイ	奄美
釣瓶	チー	ンブル	クバの葉でつくった釣瓶。クバの一枚の葉と根と末とをとりよせて握りのところでまとめたもの。葉が青いうちに作り、水を入れ、直火にかけて湯を沸かすことができるので(紙鍋と同じ原理)、鍋代わりにも使われた。クバジー(クバつるべ)と呼ぶ地方は多い。	沖1_p022-ンブル	八重山郡与那国町祖納
		クバズー	クバの葉釣瓶を用いていたころの呼び名が転用され、クバの葉製でなくてもクバズーと呼ばれた。写真のクバズーは下部を広い円形にした二枚の板を側面にし、それにトタンを貼っている。底が丸いので、水の上におくとすぐさま倒れて水が汲みよい。	沖1_p023-トタン張りのつるべ	宮古郡下地町与那覇
石槽(イシブネ)	イシドーニ	イシドーニー、ンムアレーチブ	石ドーニー。ドーニの語源は「田舟」。イシドーニは井戸端で芋洗いする石の盥をいう。石灰岩で円形に彫ってつくった。底に水はけ用の孔をあけ、使用中は栓をし、使用後栓をぬいて泥水を洗いつける。ンムアレーチブ(芋洗い壺)ともいう。国頭村ではウムアレーヤーとかウムアレーターレー(芋洗いたらい)といい、宮古でクツフ、八重山竹富島ではウンアライトーニという。	沖1_p024-イシドーニー 沖1_p024-イモアライ	玉城村、久米島
水甕	ミジガーミ	ハンドゥー	水甕、半胴。共同井戸から水を運んで溜めておくもの。半銅の字を当てることがある。口が開き、胴部で切れた感じになっている。口縁が外にそってツバがでている。	沖1_p025-ハンドゥー	那覇市壺屋
水取り	カーミ		甕。木の幹を伝ってくる雨水を飲料水にするための甕。	沖1_p026-ミズトリ	八重山郡与那国町祖納
梯子	ハシ	ハシ	ハシ、バシ、パス、パチ、ハチー、ファシなどの呼び方がある。二又の又木を用いて下部は刻みを入れ、上部では横木(踏板)を釘止めしたもの、一本の木に刻みを入れたもの、二本の大きな竹に穴を彫ってそこへ踏板をさしてつくったもの、二本の木に踏木を釘づけしたものがある。	沖1_p027-ハシ 1 沖1_p027-ハシ 2 沖1_p028-ハシ 1 沖1_p028-ハシ 2	与那国、久米島
踏み台	アシンマ	キーンマ	木馬。キーンマ、キンマ、アシンマ(足馬)ともいい、踏み台のこと。三又木を利用したもの、一本の棟木に四方から足を寄せ合わせてつくったものなどがある。	沖1_p029-キーンマ 1 沖1_p029-キーンマ 2	石垣市、座間味村
猫蓆	ニクブク	ニクブク	敷物または干物用の代表的存在。ネコ編み。藁でつくるが職人を要するもので、注文で買ったり、雇って作らせたりした。機は蓆機と似ていて、それより大きい。縁を編みであるほうが表となる。三畳敷きが一般的。ニクブー、ニンプー、ヌフフ、ニク、ニープ、ニヌブグ、ミナブの呼び方がある。	沖1_p030-ニクブク	中頭郡与那城村照間

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
筵	ムシル	クファミシル	ムシルは筵。クファミシルは粗く固い筵をいう。	沖1_p031-クファミシル	島尻郡(久米島)具志川村西銘
		シチムシル	敷き筵。クファミシルに対して、細かく柔らかい筵をいう。		
		アダン葉ムシル	アダンの葉の棘を除いて織った筵。全琉的なものであるが、織り方に二通りある(筵機にかける方法、コモを編む又木のヤーマにかけて縄で綴る方法)。	沖1_p032-アダンバムシル	石垣市川平
苫	トゥマ	トゥマ	苫の意で、敷物にしたり、屋根にかけて日陰を作ったりする。藁を又木のヤーマにかけ、俵と同じ要領で編む。拝殿で拝むときに敷く。伊平屋ではハムジと呼び、以前は家庭用によく用いた。下敷きにし、上から筵を敷いた。藁だけでなく、ススキや葦などで編むこともあった。	沖1_p033-トゥマ	石垣市川平
円座	インザ	シータ	円座のこと。板床や土間へ置いて坐するためのもので、藁でつくり、中心から外へ向けてカタツムリ状に巻く。シートまたはシクタ(国頭村)、シキクタまたはシキナタ(大宜味村)、シキナまたはエンザー(名護市)、インザー(八重山)とシキナ系、エンザ系の語がある。	沖1_p034-シータ	国頭郡国頭村奥間
内簾	ホーチ	ブバナボーツ	尾花で作った簾で、室内用。尾花が咲き揃って、そろそろ花が枯れるころ採って作る。藁簾のつくりを思わせる。沖縄本島の標準的名称はバランボーチ。宮古ではブバナボーツ、あるいは単にボーツ、ボーキと呼ぶ。	沖1_p035-ブバナボーツ	宮古島平良市
		バラフタボーチ	藁の芯で作った室内用の簾。ワラシンプーボーチともいう。藁の芯を抜いて、穂先を揃えて小束を五つ六つつくる。それを巻く小繩は、藁の芯の穂先の部分を除いたところで綯う。	沖1_p036-バラフタボーチ	石垣市川平
		ボッチ	沖縄本島では簾をボーチ、ボーキというが、宮古ではハウツまたはパウツ、ボーツ、八重山ではボーキ、ボーチ、ボージ、ボッチ、フッティーなどの呼び方がある。写真は黒皮(黒つぐ)の繊維の簾で室内用。	沖1_p037-ボッチ	八重山郡竹富町波照間
		竹の葉ボーチ	山竹(琉球竹)を十本ばかり束にして作った簾。室内用。	沖1_p037-タケノハボーチ	島尻郡伊平屋村島尻
		クバの葉ボーキ	クバの葉でつくった内簾。クバの若葉を干し、それを裂いて藁芯簾と同様小さく分けて段違いに巻いていって、先のほうがやや斜めになるようにして作る。沖縄本島ではあまり見られない。	沖1_p037-クバノハボーキ	鹿児島県大島郡徳之島町母間
土間簾		スティチボーチ、ワラボーチ	ソテツ簾、藁簾。ソテツ簾は蘇鉄の葉を四枚重ねて一か所結んだだけ、藁簾は藁を途中で二つ折りにし、多少ねじって合わせ、一か所を結んだだけの、もっとも簡単な簾。台所の土間用。柄は邪魔なのでつけない。	沖1_p039-スティチボーチ 沖1_p039-ワラボーチ	今帰仁村(蘇鉄の土間簾)、石垣市(藁の土間簾)
外簾(竹簾)		ヤンメーボーチ	庭簾。山竹(ヤンバル竹)を十数本合わせたもの、二本の枝を合わせて結び、先端の細枝を利用するものもある。	沖1_p038-ヤンメーボーチ1 沖1_p038-ヤンメーボーチ2	国頭村(山竹の庭簾)、伊平屋村(木の簾)
団扇	オージ	クバオージ	クバの葉で作った団扇。乾かしたクバの葉を中央で二つに裂き、裂いたところを背にして半円形の団扇にする。	沖1_p040-クバオージ	島尻郡伊平屋村田名
蝇叩き	ヘークルサー	ヘークルサー	蝇殺し、すなわち「蝇叩き」のこと。一般的なのは、チグ(棕櫚)の葉を用いてつくったもので、チグの葉柄の根の方から切り、柄とする。葉は裂いて糸で一か所ないし二か所を結んで密にする。	沖1_p041-ヘークルサー	伊平屋村島尻
		バイクッスボーチ	蝇殺し簾。クバの葉に数十本ある細い芯を取り出してつくる。平たい箒状。与那国の比川ではハイウティムヌ(蝇打つもの)という。	沖1_p041-バイクッスボーチ	石垣市
吊り鉤	カキジャー	カキザー	ものを吊っておく鉤。カギダー(与那国)、ギャッキヤ(竹富)、ガーチ(伊平屋)、ガス(宮古)、カキジャー(沖縄本島)という。曲がった木の枝を利用し、台所では鍋の蓋を吊っておいたり、アンダガーミ(油壺)や柄つき鍋を吊るのに用いる。軒や物置小屋、畜舎では糞笠やオーダー(もっこ)を吊る。	沖1_p042-カキザー	島尻郡仲里村上阿嘉
自在鉤		ガキジャー、カキズ	自在鉤。竹筒を用いたタイプと、竹筒を使わない古いタイプがある。北の奄美大島北端の赤木名ではズゼ、徳之島伊仙町でジゼといい、いずれも「ジザイ」系の語。沖縄本島以南は「カギ」系の語が多い。ガキジャーは首里語。ガス(硫黄島)、ガフ、ガフザー(国頭村、大宜味村、今帰仁村、名護市など)、ガーケー(恩納村)、カック(美里村)、ガーチ(伊平屋島)、カキズ(久米島)、ガスまたはガグ(宮古)。	沖1_p043-ガキジャー1 沖1_p043-ガキジャー2	久米島具志村のカキズ(竹筒を用いるタイプ)、国頭村安波のガフ(竹筒を用いないタイプ)
火切り具	ピーウス、ピーナイキ	ピーウス	ピーウス(火臼)は、デイゴの板に三つの窪みを彫り、側面に溝をつけ、点火しやすいものを差しておき、杵を摩擦して点火させた。ピーイナイキ(火杵)と対で使用。	沖1_p044-ピーウス	竹富島の収集館での復原。
		ピーイナイキ	ピーイナイキ(火杵)は竹の先にデイゴをつけたもの。ピーウス(火臼)と対で使用。	沖1_p044-ピーウス	竹富島の収集館での復原。
			一段と進んだ火おこしの錐。下の木の輪の重みと上に張った縄で反動をつけて回転させる。舟大工用錐のクルマイリと同原理。八重山では大正時代ごろまで生活用具として使用していた。	沖1_p044-火おこしの錐	与那国町祖納
火吹き竹	ヒーフチ	ヒーフチ	沖縄では「井の中の蛙、大海を知らず」と同じ意味で、「火吹竹ぬ穴から天道見い(火吹き竹の穴から天を見る)」ということわざが使われる。	沖1_p044-ヒフキダケ	
カンテラ	ランプ	シジチ	シジチの語源は中国語。明治以降に作られたトタンやブリキの小さなランプ。石油を入れ、蓋の中央に芯を通す穴をつくり、木綿の糸か布をねじ込んで点火した。	沖1_p045-シジチ	中頭郡与那城村屋慶名
ランタン		カクランプ	ブリキで枠を作り、四面ガラス張りした明かり入れ。中にシジチ(石油ランプ)の小型のものをに入れて使う。上部に傘のついた空気抜きがあり、取っ手となる針金の弦をつける。室内用というより外出用のいわゆるカンテラ。	沖1_p045-カクランプ	国頭村
石油ランプ		ホヤランプ	シジチやカクランプから一段進んだもの。ガラス製のホヤと笠のついた石油ランプ。ガラスのホヤの内側には子どもの手しか入らなかったため、ホヤ磨きは子どもの仕事だった。	沖1_p045-ホヤランプ	久米島

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
かがり	アマラ	ピーモーシレーミ	「火燃やし網」の意。「アマラ」ともいう。松脂のついた木を細く割って燃やすための金網。同じ国頭でも安田や安波ではアハシモーサー、アカシイリヤーという。漁火を焚く道具としてテールランプの出現まで用いられた。もとはテール火(松明)といって枯ススキや枯竹を束にして燃やしたり、トuppシ(松の木)の長いもの、二、三本をかざらや草の葉で手元で巻き合わせたものを用いた。	沖1_p046-ピーモーシレーミ	国頭郡国頭村奥
集魚灯	テールランプ	テールランプ	もっぱら漁業用のランプとして用いる。鳥賊釣りに用いるところから、イチヤランプあるいはイチヤウミランプともいう。トタンをハンダ付けして作っている。胴の上部に石油の注入口を設け、灯心は布切れや麻袋をつめてつくる。	沖1_p047-テールランプ	島尻郡仲里村真泊
仏壇	タンシ	グリーンジタンシ	仏壇つきの古い形式の草笥。中央よりやや上部に棚をつくり、仏壇にする。下部は戸棚で戸の中は段を区切らず、物入れにする。こ霊前(グリーンジ)タンシまたはトッダナと呼ぶ。	沖1_p048-グリーンジタンシ	中頭郡勝連村南風原
櫃	ケー	ヒチ	櫃の意。昔、地方では嫁入り道具でわりあいよい家に限られていた。漆塗りのものをケー(笥)という。漆塗りや黒塗りの地の螺鈿、箔絵などを施したものもある。	沖1_p049-ヒチ	島尻郡(久米島)具志川村西銘
茅籠	マージ	マダ	茅籠。蓋付の円筒形の籠。底の中心から円形に編み、適当なところで上に編みあげる。先島ではほとんど雑穀入れに用いるが、沖縄本島のものは女性の嫁入道具で、下着類や袈入れに用い、マダやマージという。	沖1_p050-マージ	島尻郡大里村真境名
おまる(女性用)	ミジクブサー	ミジクブサー	水こぼしの意。壺屋製の荒焼きで、主に女性のおまるとして使用。下着やおしめを洗うのにも使われた。口縁が内向きになった大鉢で、水がこぼれにくい構造。	沖1_p051-ミジクブサー	那覇市
熊手	クサカチ	クサカチ	草掻きの意。草や塵埃を掻き集めることから。薪の焚きつけにする枯松葉を掻き集めるのが主用途。板に何本も横並びに釘を打ち付け、T字形に長い柄をつけた。	沖1_p052-クサカチ	国頭郡本部町備瀬
調理用具					
鉦付鍋	ナービ	フーナービー	鉦のついた鍋。口(フー、フィー)つき。前部の口の両脇と後部に柄をかけるミミがついている。鉦(ティー、チル、イー)があるので、ティーナービ、イーナービ、チルナービという地方もある。少し浅くつくって油鍋に用いるものを、アンダナービという地方もある。蓋には、茅で編んだものや板蓋などを使う。	沖1_p053-フーナービー1 沖1_p053-フーナービー2	久米島、宮古島
大鍋		シンメーナービ	円錐形状の鍋で、三(サン)メーや四(シン)メーは家庭用鍋の最大のものを指す。主な用途は芋炊き。蓋はカマンタとよばれる茅製のもの。セーマーという竹籠をおいて餅を蒸したり、甑をおいて強飯や味噌の原料を蒸すときにも使った。	沖1_p054-シンメーナービ	国頭郡本部町備瀬
薬缶	ヤックワン	ブラヤクン	法螺貝製の薬缶。ブラとは法螺貝のこと。ブラヤクンまたはブラヤックワンという。法螺貝の口に近い中間の胴部に孔をあけ、そこへ鉤状の木の枝をさしこんで柄とする。または孔を二つ三つあけ、縄を通したものもある。	沖1_p055-ブラヤクン	宮古島平良市
		ヤックワン	金属製の薬缶。		
鍋の蓋	ナビスフタ	カマンタ	釜の蓋の意だが、一般に大鍋の蓋を指す。呼び名はカマンタ(ハマンタ)、シタ、ナビスフタ(鍋の蓋)の三つの系統に大別される。ススキ、クバ、茅、藁などを材料に円錐形に作った。	沖1_p056-カマンタ1 沖1_p056-カマンタ2 沖1_p057-カマンタ1 沖1_p057-カマンタ2 沖1_p058-カマンタ1 沖1_p058-カマンタ2	久米島(カヤ製、クバ製)、 宮古島(カヤ製)、石垣島 (ワラ製)
		ナビスフタ	茅製と板製がある。		
鍋つかみ	ナビトゥイ	ナビトルフツ	鍋取りの意で、ナビトゥイという呼び方が多い。八重山でも竹富でナビビキ、与那国でナビウティムヌという。ナビトルフツは「鍋取り杓」のことで、職用の草鞋に似ているところからついた名か。	沖1_p059-ナビトルフツ	石垣市川平
鍋敷き	ナビシキ	ナビスク	鍋をおく時に敷く輪。伊平屋あたりではナービウチュキヤーという。底の丸みのある鍋や釜の坐りをよくするために用いる。	沖1_p060-ナビスク1 沖1_p060-ナビスク2	宮古島(ワラ製)、与那国島(縄巻き)
俎板	マルチャ	マンツァー	沖縄本島では一般にマルチャという。その他マノーンタ(竹富島)、ンマスタ(与那国)、マナタ(宮古島保良)、マナチャまたはマナツァ(久米島、宮古池間島)、マニンチャ(石垣市川平)など。写真は波照間でマンツァーと呼ばれる俎板で、四本足のついた古いタイプ。井戸端に置いて魚類の調理に主に使用している。野菜用は足のつけ方が異なり、高下駄の足(または羽釜の蓋)のような付け方をしている。	沖1_p061-マンツァー	八重山郡竹富町波照間
		イヤチダー	俎板の大型のもの。竹富島で旧暦九、十月ころの種子取祭の行事の時にだけ用いられる。種子取の行事になくはならぬ餅(イバツ=飯初)を置く板、すなわちイバツイタが転じた名称。	沖1_p062-イヤチダー	八重山郡竹富町竹富
汁杓子	ナビゲー	シルゲー	沖縄本島ではナビゲー、サラゲー(サナゲー)、シルゲーの呼び方がある。石垣市ではアッカイ、与那国ヒャーニ、竹富でシェーベンナー、波照間でスプエー、宮古ではキナという。飯用と汁用を区別して、飯キナ、汁キナと呼んでいる。横広にやや楕円形状に作るのは、日本全国、また沖縄にも共通しているが、沖縄製はやや円形か四角に近く、外部をやや三面にして削っている点も異なる。	沖1_p063-ナビゲー	中頭郡読谷村喜名
汁杓子(貝杓子)		アッカイ	ギガジョウという二枚貝の片方の殻を利用して作った汁杓子。竹を二つに割り、貝を挟んで糸でしばる。	沖1_p063-アッカイ	石垣市
飯杓子	イビラ	イーゼー	飯(イイ)カイ。飯用で、表は扁平であるが、裏はやや盛りあがっている。ミンゲー、イビラともいう。	沖1_p064-イーゼー	
飯笥		イビラ	飯(イイ)ヘラ。芋練り用で、長さ40から80 cm位まであり、舟漕ぎ用の櫂を思わせる形をしている。	沖1_p064-イビラ	竹富島で種子取祭のイバツ(飯初)を作るもの。

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
柄杓	ニーブ	ペーラ	水汲みの柄杓。瓢箪を二つに縦割りにしたもの。方言でチブルというのは、人の頭に似ているから。水汲みにしたり、畑仕事で汁杓子にしたり、自然の風を利用して穀を精選する際にも用いた。沖縄本島ではニーブ、与那国でサイ、竹富ではヒシャフデイラ、波照間でカマサー、石垣市でペーラという。	沖1_p065-ペーラ	石垣市
		サシ	柄杓のこと。宮古でサシとかサッシという。宮古北端の島尻や狩俣などでよく見られるもの。アダン表皮を削り、中を両方から剥って貫通し、後で底を板で張る。柄は細木。	沖1_p066-サシ	宮古島平良市島尻
		クバヌフダイ	八重山地方で、一枚のクバの葉を丸めて柄杓にしたもの。葉の先をそろえてまとめ、そこへ葉柄を曲げていっしょにひとまとめにし、くぼみを作り、柄をつける。		
摺鉢	シルハチ	デーファー	摺鉢のこと。首里形方言ではシルハチであるが、旧那覇ではデーファとよんだ。	沖1_p067-シルハチ	島尻郡大里村
蒸し籠	ムチンプサー	ムチアガラサー	サンメー鍋、シンメー鍋という大鍋の上において餅を蒸すための平籠。ムチンプサーは「餅蒸し器」の意。他にウブサーユイ(国頭村、大宜味村)、ウンブシアマダー(竹富)、ムチアガラサー(糸満町照屋)などの呼び名がある。先島地方には単にンブサー、ウブシャーというところが多い。ちなみに沖縄の餅は蒸した米を搗くのではない。米を水に浸した後、木臼とたて杵で搗くか、あるいは石臼に水を加えながら米を挽き、それをだんご状に整えてムチンプサーで蒸すのである。	沖1_p068-ムチンプサー 沖1_p069-ムチンプサー	大里村真境名、大宜味村謝名城
甑	クシチ	クシンキ	甑のことで、筒状の胴の底部に竹を通し、簀子を置いて使用する。沖縄本島ではクシチ、クシチーというが、与那国ではクシンキ、波照間や石垣でクスキ、宮古城辺町でクスツという。クバやデイゴの胴をくり抜いたり、カヤを鍋蓋と同じ要領で円筒形に編んだもの、板で椀状につくったもの、板で箱型につくったものなど、素材によっていくつかに分類できる。	沖1_p070-クシンキ 1 沖1_p070-クシンキ 2 沖1_p071-クシチー	八重山郡与那国町比川、石垣市大浜
甑の簀子	ハジ	アマダー	甑のをせるための、竹で編んだ敷物。大鍋の上部に敷く。ハジヤ(伊計島)、シライ(安波)、アミジャー(波照間)、アマダー(竹富島)、ハズまたはハジ(奄美徳之島)、アガラサー(八重山)などとよぶ。	沖1_p072-ハジ 1 沖1_p072-ハジ 2	久米島
箆	ソーキ	ソーキ	大きめに割った幾条かの竹ヒゴに、細く削った竹ヒゴを横に通し、縁をしばって円くした箆。琉球全域で用いられている。一般にソーキというが、宮古ではサウキ、竹富でソーギヤー、与那国でティースギなどと詠る。一般に洗った野菜や米をあげるのに用いられる。	沖1_p073-ソーキ	国頭郡大宜味村田嘉里
箆(片口箆)		マドゥヒ	野菜洗いなどに用いる片口の箆。形は本土の箕に似ているが穀類とは無縁。分布も国頭村だけできわめて狭い。苦竹(ほうらいちく)で作り、一本の竹ひごを編んで両側で折り返し、ワタが内側に向くようにつくる。マドゥヒは「真ソーキ」の意。	沖1_p074-マドゥヒ	国頭郡国頭村安田
籠	バーキ	マグ	籠のこと。マグは本来運搬具で、芋を入れて川へ運び、足を入れて洗うための用具。両側の取っ手を持ち、腰に乘せて運んだ。	沖1_p075-マグ	名護市振慶名
包丁	ホーチャー	ホーチャー、カタナ	家庭用は「ホーチャー」または「カタナ」ともいう。		
		ワーサーボーチャー	屠殺包丁。ワーサーは屠殺の意。	沖1_p076-ワーサーボーチャー	宮古市平良市
鱗取り	イリチウクサー	イーキトゥイムヌ	魚の鱗を取る道具。板の先に釘を何本も打ったもの。	沖1_p076-イーキトゥイムヌ	宮古池間島
石の小白	イシウーシ	ガイスツジャー	石の小白。薬をつぶすのにも使用した。ガイスツジャーとは「蟹つつき」の意。岸辺にいる蟹を獲り、生のまま搗き、殻を除いて煮立てる。杵は適当な石を用いる。	沖1_p077-ガイスツジャー	島尻郡栗国村
卸し器	ンムシリー	ンムクジシリー	芋の澱粉を採るための道具。ンムシリーともいい、クジシームン(国頭村奥)、アッコンスーカニ(石垣市川平)、ノースイタ(竹富島)、ントゥズカナ(宮古池間島)、ンムクジガナ(宮古城辺町保良)などの呼び名がある。トタンやブリキ製ができる前は、板に多数の竹釘を植えこみ函にした。	沖1_p078-ンムクジシリー	中頭郡勝連村南風原
挽き臼	ヒチウーシ	トーフウーシイシウース	豆腐づくりに用いる石の挽き臼。ヒチウーシ(ヒキウース)が多いが、材質からイシウース(イシウス)、トーフウーシ(トーフウス)と三通りの呼び方がある。	沖1_p079-ヒチウーシ	久米島具志川村
石臼のせ	アジマー	アジマー	桶の上におき、石臼のをせる十字型の木。アジマーのアジは交差することをいう。	沖1_p080-アジマー	与那城村屋慶名
桶	ウーキ	トーフウーキ	豆腐桶。豆腐づくりはもちろん芋の澱粉採りにも用いられた。	沖1_p080-トーフウーキ	与那城村屋慶名
豆腐箱	トーフバク	トゥフバク	豆腐箱。木綿布を敷いて豆腐を固めるのに用いる。	沖1_p081-トーフバク 沖1_p082-トーフバク 1 沖1_p082-トーフバク 2	粟国島、宮古平良市
掻き混ぜ棒	スタティキニ	スタティキニ	甕に仕込んだ醤油の原料をときどきかき混ぜる用具。スタティとは醤油、キニは杵の意。	沖1_p083-スタティキニ	八重山郡竹富町竹富
醤油濾し	スタティヌファー	スタティヌファー	スタティとは醤油の意。醤油を汲む際に用いる。この籠を甕の中に入れてその中から柄杓で汲むと雑物が入らない。沖縄本来のものではなく外来のもの。	沖1_p083-スタティヌファー	八重山郡竹富町竹富
醤油汲み、柄杓	ニーブ	ニーブ	波照間島で醤油汲みのこと。竹富島ではスブルナービナー、与那国でヒヤーニ、小浜でニーボーマという。瓢箪製で、穴を開けた胴部で汲み、首から注いだ。	沖1_p084-ニーブ	八重山郡竹富町波照間
菓子型	クワシガタ	ビシンコ板	久米島ではクワシガタ(菓子型)という。米の粉や麦粉をこねてコー菓子(らくがん)をつくる際にこれで型をとる。	沖1_p084-ビシンコイタ	八重山郡竹富町竹富
抜き型	チチヌジ	チチヌジ	赤飯を型取りする用具。最初は竹筒を用いたが四角い榍形もある。	沖1_p085-チチヌジ	島尻郡具志川村山里
搗き臼	カマブクウーシ	カマブクウーシ	かまぼこ臼のこと。主に赤木で作る。杵はアジンといい、松材で作る。	沖1_p086-カマブクウーシ	糸満市
かまぼこ型	カマブクイタ	カマブクイタ	かまぼこの型をつくる道具。	沖1_p086-カマブクイタ	与那国町

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
臼台	タネー	デーフウ	タネーは盥の意で、ここでは挽き臼の台に使う盥を指している。豆腐づくりやもち米・麦粉を挽く際に用いた。沖永良部島ではデーフウという。写真のものは割り物だが、普通は結び桶形式の盥を使用する。	沖1_p087-タネー	八重山郡竹富町波照間
盥	ターレー、ハンジリ	ターレー、ハンジリ	盥は一般にターレーとよぶ地域(那覇系)とハンジリ(半切り)と呼ぶ地域(首里系)に分けられる。		
油壺	アングガーミ	ミミチブ	日常の食事につかう豚脂を保存するための壺。蓋をかぶせ、四つの耳に紐を通すようになっている。蟻がつかないように、台所の梁につけた鉤に吊る。	沖1_p088-ミミチブ	国頭郡国頭村安田
箸立て	ハシタティ	ウメーシタティ	「お箸立て」の意。たいていは一節ものの竹を使い、下に水切りの孔をあけ、柱に釘止めして使った。複数の節を残してそれぞれの節に孔をあけ、箸だけでなくしゃもじなども立てて使うこともあった。	沖1_p089-ウメーシタティ	徳之島、美里村
膳	ウジン	ウジン	「御膳」の意。脚の短い膳。会席膳も。		
		タカウジン	「高膳」。家庭では良家の主人(おじいさん)が用いたほか、仏壇に供物を供したり、慶弔時に料理を回したりした。写真のように引き出しがあるタイプは珍しい。	沖1_p090-タカウジン	宮古島平良市
盃台	サカズキダイ	サカヅキダイ	盃台に用いる小型の高膳。挽き物製、金属製、漆塗りなど形態はいろいろ。	沖1_p090-サカズキダイ	宮古島平良市
平箆	ヒラパーキー	セーマグ	平箆のこと。底をアジロに編み、四隅で折って周囲を細く削ったヒゴで巻き、口縁部は他の箆と同様に竹の輪を中にして巻きこんで止める。煮芋を盛るお膳代用の箆で、芋を常食していた頃はなくてはならぬ用具だった。北部でセーマグという。	沖1_p091-ヒラパーキー 沖1_p092-ヒラパーキー	久米島
蓋付き籠	フタパーキ	イーディル	イーは飯を指す。煮芋を一時たくわえるイトウ(とうづるもどき)製の蓋付籠。	沖1_p093-イーディル	八重山郡与那国町租納
		フタディル	ティルは元來手籠を意味するが、沖縄や奄美では運搬用の大籠もティル、ティール、テルなどと呼ぶ。フタディルは台所用の食料保存籠。蓋付きなのでフタディルといい、フタパーキーとよぶこともある。	沖1_p094-フタディル	国頭郡本部町具志堅
弁当籠	フタディル、ピラフ	ピラフ	弁当籠。芋弁当を入れた。ピラフは宮古で籠の意。カッジャ(葛)を用いて作る。	沖1_p095-ピラフ	宮古平良市
吊り籠	サギゾーキ	サギゾーキ	口縁から反対側に渡した取っ手があり、吊れることからサギゾーキ(下げゾーキ)という。煮物など調理した食物を入れ、涼しい木陰に吊るして保存した。いうなれば昔の冷蔵庫。丸籠(ソーキ)と形態的に似ている。サギゾーヒ(国頭村安田、安波)、サギゾーギヤ(竹富)、ティーパヒ(国頭村奥)、サギディル(与那国)、ティーゾーキ(伊平屋村野甫)等と多少の変化があり、宮古城辺町保良でユザウキというのは、ユル(穴のあるユイ・ふるい)に似ているため。明治以降に入ったもの。	沖1_p096-サギゾーキ	島尻郡具志川村大原
汁桶、食缶	ウーキ	アシーウーキ	汁や雑炊を入れて運んだ桶。アシーはアサバン、即ち昼食を指す。蓋をしてから取っ手をはめる形式で、後にはバケツに似た蓋つきの金属製(食缶)に変わったが、以前は木桶だった。	沖1_p097-アシーオケ	島尻郡仲里村真謝
弁当箱	ビントージュウ	ビントー	弁当箱。四角の箱型になっており、その中に小型重箱を三個入れるようになってい。下にはごはん、上におかずを入れる。蓋は上部から側面の溝を伝って下ろすつくり。	沖1_p098-ビントー	国頭郡大宜味村田嘉里
重箱入れ	ジュウバクのシー	ジュウバクのシー	重箱入れの意で、大型の弁当箱。中間の仕切り板を中心に上下に二つずつ重箱を入れる。	沖1_p099-ジュウバクノシー	島尻郡具志川村山里
水筒	カナバイ(チプル)	カナバイ	水筒として作られた瓢箪製の容器。畑仕事へ行く時、中に水を入れ、黒ツグ縄で編んだ長い紐つきの網袋に入れて持ち歩く。瓢箪は沖縄本島ではチプル(人の頭)というが、竹富島でカナバイ、西表祖納・波照間島でカナバリ、久米島でタナバルーという。	沖1_p100-カナバイ	八重山郡竹富島竹富
茶入れ・種物入れ		茶入れ・サニムン入れ	瓢箪製の容器。中の種子やクズをきれいに取り去り、茶入れ、または種子物入れに使う。	沖1_p101_サニムンイレ 沖1_p101_チャイレ	島尻郡具志川村具志川
酒入れ・酒德利・酒壺	ヤーシグワー	ヤーシグワー	ヤシの実で作った酒入れ。上部に錫でつくった口をつけ、胴を藤蓑で巻いて置けるようにつくる。	沖1_p102-ヤーシグワー	
茶せん	チャシン	チャシン	ブクブク茶用の茶せん。茶道の茶せんとは比較にならぬほど大きい。	沖1_p103-ブクブクチャセン	那覇市
喫煙用具					
煙草入れ	フゾー	フゾウ	たばこ入れ。木製のものはキーフゾー、キープゾウなどというが、単にフゾウとだけ言う場合が多い。漁師がよく用いるものにイスカブドゥ(磯フゾウ)、ウミフゾウ(海フゾウ)などがある。	沖1_p106-キーフゾー 沖1_p106-ウミフゾウ	粟国村
		マーランブゾー、ウミフゾウ	刻みたばこ入れ。漁師が使う。身と蓋に分かれる。身は四角につくり、中も四角にくりぬいて、底は別の板を竹釘づけする。蓋の上部が彎曲しており、枕に使えるものもある。形が前後部反り上りのマーラン船に似ていることからマーランフゾーという。糸満ではカタツパフゾウ、糸満漁夫の間で発達した形になったためイチマンフゾウとよぶこともある。蓋の内側にはカクグという物入れをつくり、火打ち入れであり、小銭入れであった。	沖1_p104-マーランブゾー	八重山郡竹富村竹富
		フジャウ	宮古郡伊良部村佐良浜のツカサ(女神職)が、神願の際、御嶽ごもりをして用いるもの。布製。	沖1_p105-フジャウ	宮古郡伊良部村佐良浜
		シノーブッゾー	牛の角を利用した煙草入れ。波照間でシノーブッゾー、沖縄本島ではチヌフゾーという。フゾウに結んだ煙管入れはスーという。	沖1_p105-シノーブッゾー	竹富町波照間
煙管	チシリ	チシリ	煙管。石製や素焼き製の雁首に、竹管を差して用いた。	沖1_p107-チシリ	宮古島

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
煙管入れ	スツブン	スー、スツブン	煙管入れ。大小二本の竹でつくり、両端に節をつけている。写真のスーには牛の角の煙草入れ(シノーブツソー)がついている。	沖1_p105-シノーブツソー	竹富町波照間
		スツブン	もともとは二本差しこみの煙管入れのことで、擬音による呼び名。煙管の雁首と吸い口を竹筒の外側に開けた孔に差して固定する構造で、フゾウ(煙草入れ)の緒を通して用いる。	沖1_p108-スツブン	島尻郡具志川村具志川、与那城村の竹製煙管入れ
煙草盆	タバクブン	タバクブン	煙草盆。直方体または枡型の器の中に、火受け(ヒートウイ、ビートゥル)と吸い殻入れ(ヘーフチ、パイフキ：灰吹き)を入れたものが一般的。輪切りの木の幹を彫ってつくったものもある。	沖1_p108-タバクブン 沖1_p109-タバクブン	宮古島平良市狩俣(枡型)、与那国町久部良(割り物)
		タカタバクブン	引き出しと取っ手が付いた上等な煙草盆。箱の下部に引出しがあり、上部に火受けと竹筒(ヘーフチ)の吸い殻入れがついている。表面に春慶塗りを施すなど、さまざまなデザインのものがあり、地方ではよい家の持ちもの。お供えの意味で仏壇に置いておくこともあった。	沖1_p109-タカタバクブン	与那城村
火縄	ヒーナー	ピッナー	火縄の意。火種として用いた。マッチのない頃の農漁民のたばこ火。フィーナー、ヒーナー、ピーナー、ピナーなどの発音がある。国頭村安波ではギーニー、与那国町ではチントゥー、宮古池間島ではヒータニとよぶ。薬の中に木の芯を入れて作るが、木の芯にはデイゴ、ガジマル、イヌマキ、棕櫚縄等が火持ちがよいといわれる。	沖1_p110-ピッナー	石垣市川平
切板、まな板	チリバン	チリバン	チリバンは切板で、葉煙草を丸めて板と板の間に挟んで刻むのに用いる。	沖1_p111-チリバン	島尻郡仲里村真謝
たばこ刻み包丁	ホーチャー	チリバンボーチャー	たばこきざみ専用の包丁。八重山一帯ではキザンボーチャーという。	沖1_p111-チリバンボーチャー	島尻郡中里村真謝
食品貯蔵具					
米桶	ウーキ	ジーウーキ	ウーキは桶。精白した米を入れておく容器。一本の木を上下から彫って貫通し、その後で底に板をはめた。材質はタブの木。削り抜きの桶。	沖1_p112-ジーウーキ	国頭郡大宜味村喜如嘉
米籠	バーキ	ユナバーキ	米入れ籠。運搬具のバーキの一種。米を精白する際、あるいはといて蒸す時に用いたり、餅をつくる前に浸したもち米の水切りにしたりした。	沖1_p113-ユナバーキ	国頭郡本部町備瀬
雑穀入れ		ツツカサ	壺型のカヤ製籠。徳利状に首をしぼったもので、蓋は一般に落としぶた。用途は雑穀入れで、特に麦・粟の種子入れとして用いられた。	沖1_p114-ツツカサ	宮古島平良市
籠(茅籠)	マージ	マゲ	口の大きいザル状や、口をもう少しすばめて蓋をつけたカヤ籠。用途や大小によって、蓋マゲ、プーイリマゲ(芋麻糸入れ)、ムノダニイリマゲ(種子入れ)、ウブマゲ(大型の穀物入れ)などよぶ。		
		ガイズ	ガイは茅の意。マカヤ、ススキを枯らして用い、クーズ(とうづるもどき)、マーニ(黒つぐ)の葉柄の皮、アダナシ縄、使君子という蔓草などで編む。竹ひごはほとんど見られない。粟・豆・麦、時には米などの穀類を入れて一時貯蔵したり、運搬具になる。	沖1_p115-ガイズ	八重山郡竹富町波照間
壺	カーミ、チブ	ズーワードウツクイ	一斗壺。味噌入れにしたり、豆類や麦などを入れるのに用いる。口が小さく、やっ手が入るくらいで、蓋にヒロセ貝やタカセ貝などの巻貝を用いることもある。一升を「一沸し」といい、「ズーワー」は「十沸し」の意。	沖1_p116-ズーワードウツクイ	島尻郡具志川村山里
棚、水切り	タナ	タナ	二段につくり、上に椀や皿類、下に鍋釜類を置く。台所の近く、あるいは井戸端に設置。可動式につくったのが多い。	沖1_p117-ショッキグナ	八重山郡与那国町祖納
干しもの台		タナ	物干し用の台にはきまった名称がない。	沖1_p118-モノホシ1 沖1_p118-モノホシ2	粟国村西
干し籠	ダキファーザ(ハジ)	ダキファーザ	たて竹に横竹をさした竹編みの干しもの敷き。魚干しなどに使う。50 cm×80 cm程度。	沖1_p119-ダキファーザー 沖1_p119-ハズ	伊平屋村島尻
着用具					
防寒着	フクター	クーイリツン	畑仕事や海へ行くときに着る防寒着。檻褌の意と、継ぎはぎの意味がある。各地で同じくフクターと呼ぶ。久米島では主に海で着るため、ウミブクター、厚めにできているからアチブクターともいう。国頭村典・安田・安波でバサブクターというのは芭蕉布を重ねたもの。下地になる着物があって、それに他の布をくっつける。寝具としても重宝した。	沖1_p120-フクター 沖1_p121-フクター	久米島、宮古島
裂き織り、仕事着	ウンジョウ	ウンジョウ	裂き織りの着物。冬の仕事着にした。本島ではウンジョウといわず、伊平屋ブクターといって珍重した。	沖1_p122-ウンジョウ	国頭郡伊江村
普段着	ドゥタティ	ドゥタティ	八重山でよくみる庶民的な着物。黒襟が特徴。かつては外出着・晴着としても用いた。与那国が主産地で織り方の種類も多い。イチチハナ、カタンカーヤー、バーヤ、ゴバン、クワージアヤは模様の特徴をよくとらえた呼び名。	沖1_p123-ドゥタティ	八重山郡与那国町祖納
芭蕉衣	バサー(デン)	バサー	糸芭蕉の繊維で織った着物。	沖1_p124-バサー	島尻郡伊平屋村田名
手拭い	ティサージ	ティサージ	汗拭きもあれば、特別な意味を持つものもある。花織りや花染めは実用というよりもアクセサリー、愛のしるしにもお守りにもなった。サージは頭に巻いて結ぶ布をいう。	沖1_p125-ティサージ	与那国、読谷
笠	カサ	クバガサ	クバの葉製の笠。竹ひごを芯にする。琉球全域で使用。日笠と雨用の二様につくることがあり、日笠は薄く張り、雨笠は厚く張った。	沖1_p126-クバガサ 沖1_p127-クバガサ1 沖1_p127-クバガサ2	久米島、沖縄本島、徳之島、糸満、与那国
		ムンジュル笠	ムンジュル、ムンズル、ムンジャラは麦わらのこと。竹ヒゴを芯にする。麦藁製の笠。日笠として使用。雨笠には向かない。	沖1_p128-ムンジュルガサ	島尻郡伊是名村内花

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
蓑	ンス	スルンス	棕櫚蓑。蓑はンス、ンスー、ンスーなど沖縄本島でも多少の変化がある。八重山波照間ではメンサ、竹富ではミノーサ、奄美の徳之島でニヨー、沖永良部でニヨーサという。棕櫚の繊維、クバの葉、菅草、藁を素材にし、棕櫚製が最も高級。上下二枚からできており、上ンスの襟首を通した縄がそのまま下ンスの腰の部分へ連なっている。	沖1_p129-スルンス	国頭郡本部町備瀬
		クバンヌー	クバの葉製の蓑。上下二つからなる例も、八重山の他の地方では見られるが、川平では上だけで使用する場合が多い。	沖1_p130-クバンヌー	石垣市川平
		シジンヌ	菅草でつくった蓑。棕櫚製は明治以後が多く、それ以前はクバかワラが多かった。シジンヌは特に北部の国頭地方でよく用いた。上下二枚からなり、形は棕櫚蓑と似ている。	沖1_p131-シジンヌ	久米島
布団	ウードゥ	フクターウードゥ	「ウードゥ」はふとんのこと。布切れを縫い合わせて厚くした布団。フクターウールともいう。	沖1_p132-フクターウードゥ	宮古島平良市
枕	マックワ	ナーファ	枕のことは一般にマックワというが、竹富島ではナーファ、宮古保良・八重山波照間島ではマッフアという。		
		アジマックワ	アジは「アジマー」(十字型)、「アジケー」(シャコ貝)のアジで、交差することをいう。一枚の板を二枚に分け、噛み合わせて作る。使用しないときは量める。	沖1_p133-マックワ	八重山郡竹富町竹富
ゆりかご	アミナグ	アミナグ	赤子の揺り籠。竹の輪をつくり、藁縄を巻いて縁とし、縁に漁網の結び方で黒縄を貼り、縁四か所を二本の丈夫な縄で結んで紐としたもの。家の天井の真中に横桁をおいてそれに吊るのがふつつ。※アイヌと使用法が似ている	沖1_p134-アミナグ 沖1_p134-ヨイサー	与那国町、竹富島(ヨイサー)
下駄	アシジャ	アシジャ	足駄からの転訛で、アシジャ、アシザ、アッチャ、アッタ、アツァザ、アチダ、アシタなどという。下部が広がっている事、前歯が斜め(のめり)になっているのが特徴。	沖1_p135-ワカサマチアシジャ	那覇市若狭町(若狭町アシジャ)
		ジタ	表つきの下駄はジタ、駒ジタと「下駄」の転訛で呼んだ。		
草履	サバ	アダン葉サバ	アダン葉でつくった草履。	沖1_p136-アダンハサバ	宮古島平良市
		ウジャレー	お草履の意。首里の歴々の家で用いた竹程で作った草履。		
わらじ	ワラグチ	ワラグチ	藁沓の訛りで沖縄本島では周辺の島々までこの呼び名。宮古ではフダミ、八重山石垣市内でフツ、竹富島でプツ、与那国でチーという。藁のほか、アダンの繊維で作ることもあった。サンゴで足を切るの海では必ずこれをはいたが、海に限らず山でも使用された。	沖1_p137-フダミ 沖1_p137-フツ	石垣市、多良間村
生業・運搬					
農具					
馬鍬	マーガ	マーガ	馬鍬。マガ、マーガと呼ぶ地方が多い。水田の砕土の目的で用いられ、大まかな地ならしにもなる。古くは全木製だが、取手以外すべて鉄になった。	沖1_p141-マーガ	糸満市兼城
土かけ具	クルバサー	クルバシー、フツァーシ	麦を蒔く時に使用する農具。鍬で溝を掘り、そこへ麦を蒔き入れ、両側に縄をかけ、牛馬に引かせる。台湾から引いて土をかぶせた。きれいに種子が埋められる。	沖1_p142-クルバシー 沖1_p142-フツァーシ	粟国島、波照間島
砕土用		クルバシャー	牛に引かせて田の上を転がす。材木の側面に縦溝を幾条か彫り、両側に縄をかけ、牛馬に引かせる。台湾から入ったといわれ、沖縄固有の農具ではない。	沖1_p143-クルバシャー	石垣市、西表島
土均し具	ピキイシ		水田の土均し具で引石の意。手ごろな石を三、四個棒にくくりつけて牛に引かせる。石灰石の突起の多いものを用いる。	沖1_p144-ピキイシ	沖永良部島
田均し	マーカ	マーカ	田の土を高所から低所へ引いて均すもの。弓形の板の中心に柄を差し込んでつくる。牛馬が引くが昔は六人で協力して引いたという。	沖1_p145-マーカ	石垣市平久保
柄振	ターノーサー	スルイタ	田ならし板。本土のエブリ、エグリに相当。苗代づくりに使うことからナーシルノーサーの呼び名もある。またスルイタ、スーイタともいい、伊平屋でスーチャー、奄美の徳之島ではシューチャと言っている。T字型をしており、古い形の農具。田を打ち、砕土をしてのちこの板で地面を均す。	沖1_p146-ターノーサー	国頭郡大宜味村喜如嘉
均しゴテ	スルイタ	ティースーチャ	ターノーサーの後にできたもので、苗代づくりにのみ用いる。一枚の田を等間隔に溝で分け、その上をなでる。播種の後にさらに穀の上をなでて土の中へ埋める。	沖1_p147-スルイタ	久米島
犁	イザイ	ヤマ	シマ(島)イザイ。牛耕用の犁。外来の犁と区別するという。奄美や沖縄諸島ではイザリ系の名称、宮古・八重山地方ではヤマ(仕掛け・機械)系の名称と呼ぶ。	沖1_p148-シマイザイ 沖1_p149-ウシヌヤマ	伊平屋島、石垣市
		タースキヤマ	水田用牛耕犁。	沖1_p150-タースキヤマ	石垣市川平
田舟	フニ	フモーリ	雨で流れ込んだ土砂の排除や田の面の高低をならす際に土を運ぶ舟。トーニと呼ぶ地方が多い。材質は主に赤木やタブ、椎の木など。	沖1_p151-フモーリ	八重山郡竹富町星立
平鍬	クエー、パイ	ファージェー	平鍬。ファージェーは「刃鍬」の意か。畑ばかりでなく田でも用いた。	沖1_p152-ファージェー	国頭郡大宜味村謝名城
		スマベー	在来鍬。「島鍬」の意。幅の大きい平鍬を「沖縄鍬」というのに対する呼び名。島々は土が固く石が多いので、ヘラや巾の狭い鍬が活躍する。開墾用にも用いた。	沖1_p153-スマベー	八重山郡竹富村波照間
ミマター		三又鍬。ミチバーともいう。平鍬と共に最も広く用いている鍬。	沖1_p154-ミマター	島尻郡伊平屋村前泊	
タマター		二又鍬。タマター、フタマタ、ターチマター、タチバーともいう。新しい農具で芋掘り等にむいている。三又鍬と似た用途だが、田には向かない。	沖1_p155-タマター	国頭郡大宜味村謝名城	
窓鍬		ミーフガー	粘土質の畑のために作り出された改良平鍬。平鍬に四角い穴をあけたような形で、用途は平鍬同様。粘土の付着を避けた。	沖1_p156-ミーフガー	久米島仲里村真謝、大里村真境名
風呂鍬		ミングエー、マングエー	田打ち鍬。風呂鍬の系統で、刃先は鉄製で、中世日本の時代まで用いていたU字形をしている。久米島だけで作り用いた。	沖1_p157-ミングエー	島尻郡志具川村兼城

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
木鋏	キュー、パイ	キーパイ	木製鋏。古くは水田全般に用いたが、深田用となった。深田用のため柄が長く、刃の木は共通して内側をV字型に窪ませ、柄穴の部分を少し盛り上げている。	沖1_p158-キーパイ	石垣市
スコップ鋏		スコップグエー	スコップを改良した田打ち鋏。戦後普及した。スコップの柄を切り落とし、丸い柄ミミをつけた。ふだんはターウチグエー(田打ち鋏)という。	沖1_p159-スコップグエー	島尻郡具志川村仲地
株起こし	ウズンピーラ	ウズンピーラ	水田で株起こしをするのに使うヘラ。一本作り。とうの昔に実用ではなくなり、芸能としてのみ伝わっている古い農具。	沖1_p160-ウズンピーラ	那覇市識名
へら	ヒーラ	フィーラ ピラ	畑の除草、芋苗の植え付けなどが主目的。へらはかつてフィーラと呼ぶのが標準的で、他にヒラ、ヒーラ、ヘーラ、ピラ、フィラなどの呼び方がある。柄を差し込むところはミゾをつくり、底はやや広く、上をせばめて柄が抜けないようにしている。柄にV字型の又木をさしたのが多い。沖縄には農作業にヘラを使い、しゃがんで作業をする文化があり、「金」へんに「平」と書いてヘラと読む独自の漢字がある。	沖1_p161-フィーラ 沖1_p162-カニピラ 沖1_p162-ヒーラ 沖1_p162-ピラ 沖1_p162-ヒラ1 沖1_p162-ヒラ2 沖1_p162-フィーラ 沖1_p162-マーピラ	宮古島下地町
掘串(フグシ)	ゲーシ	ティブク	首里周辺ではティビクといい、他ではティブクまたはトゥビクと読む。「手鉾」の意であるといわれ、主に芋苗植えつけとその除草に用いた。	沖1_p163-ティブク	久米島
		アサンザニ	アサンザニは「あさり金」の意であり、アサンガニともいう。柄は前方を太めに削った木で、細く尖った刃が柄から一段折れて伸びている。左官ゴテを真横から見たような形。主たる用途は芋掘りで、段畑地帯や山奥の焼畑で使用した。土中から芋をさぐり(あさり)掘りする。	沖1_p164-アサンザニ	国頭村奥
		ゲーシ	串、竹串の意で、柄の付け方はアサンザニと似ているが、刃の部分はまっすぐという違いがある。芋あさりや野菜畑等での除草に用いる。	沖1_p164-ゲーシ	伊是名島
		カノーシ	金串の意。握る部分まで鉄製で、持つところは曲げて平たくし、握りやすくしている。先島だけで用いられる農具で沖縄本島には見られない。主たる用途は芋あさりだが、女性の磯漁に用いることもある。長さはふつう30 cm。	沖1_p165-カノーシ	石垣島
		ンブピラ	T字型に柄をつけた金串で、宮古だけで用いる農具。ンブピラ、ンブピラとは「いもほり」の意であるが、漁具として用いることも多い。	沖1_p165-ンブピラ	宮古島
穂摘具	イラナ(カマ)	イララ	粟刈り専用鎌。粟の穂先を刈るだけに用いる。長さ14.5 cmの柄に27 cmの刃をつけているだけの簡単な鎌。柄を握って刃を親指と人差し指で上下から挟み、親指で粟の茎を押えてもぎ取るように刈り取る。	沖1_p166-イララ	八重山郡竹富町波照間
		イラナ	ふつうの鎌。イラナ、イレナという。国頭地方ではハマ、ハマーと呼ぶところが多い。ガシ(竹富島)、ズザラまたはイザラ(宮古)と読む。波照間島ではガッキヤ。		
扱箸、管	クーダ	クダ	稲の脱穀用管(くだ)。箸ぐらいの竹を用いた。クダ、クーダ、クダー、クーラ、フーラ、クラグー、クラグシ、フドースなどの呼び名がある。約20 cmの二本の細竹を下三分の一のところを藁で結んでねじり、パネの効果をもたせた。	沖1_p167-クーダ	沖縄本島
		フドース	稲の脱穀用管。手のひらに入るサイズの小さい竹を用いた。長さ5～6 cmの二本の竹管のそれぞれの尻に当たる部分に藁しべをねじこんで連続させ、藁しべをねじることで反動をもたせた。人差し指と親指の間に挟んでしごく。	沖1_p167-フドース	石垣島
千歯扱き	シンバ	ンニシジャーマ、カナクダ	千歯こき。手の甲を上にして稲束を持ち、上から押さえてしごく。明治末期あるいは大正期に入り、昭和に入って普及したといわれる。台木に歯を一本一本打ちつけたものは古いタイプで、改良されて彎曲した歯に変わり、歯の数も十七本から二十二、三本になった。足を前後二本ずつ差して立て、台木の端から端へ繩をかけ、そこへ板をおき、その板を踏んでぐらつくのを防いだ。足は手前二本を裏よりやや長めにする。奄美諸島ではそれが極端に長かった。稲束の穂先を握る手は甲を上にして上からしごく。千歯こきが入ったのは、明治末期あるいは大正期。昭和に入って蓬莱米の二期作をするようになってから普及したという。シンバも「千歯」のこと。ンニシザー、ンニシジャーマ、ティーヤーマ等とも。国頭村安田ではヒスグヤー。八重山の竹富や小浜ではアーバー、アーファ、奄美諸島ではカナクダ(金管)という。	沖1_p169-シンバ	島尻郡知念村久手堅
篩	ユイ	アラドゥラチ	粗目の篩の意。沖縄諸島ではアラユイと呼ぶ地方が多いが、穀をよることから西表島ではムユラシという。メーユイ、イニユヤー、ニニフカサーと呼ぶ地方もある。苦竹を細く割って、中のワタを削り、皮の部分を上(内)にして縦横に編む。円形ではなく四角ばった作り方をすることもある。稲の脱穀の際に葉や穂切れの混じったものを除く。沖縄諸島ではユイと呼ぶことが多い。	沖1_p170-アラドゥラチ	八重山郡与那国町比川
		ユラス	篩の意。よることからついた名称。宮古上野村一帯ではユズ、城辺町一帯ではユリ、八重山ではユラシ、ユラス、与那国ではドゥラチ。目の細かいものは米をよる。精白した米を入れ、碎米やぬかを除く。少し目の大きいのは、豆類の選別に用いる。	沖1_p184-ユイ	名護市呉我、久米島仲里村真謝
		ンニユイ	竹の皮を外にして縦横に編んだもの。口縁は筧と同じように底部から編みあげた竹で縁の輪を巻いて作る。	沖1_図004-ンニユイ	久米島仲里村比嘉
唐竿	クルマボウ(車棒)	フーマボウ	豆や麦の脱穀用具。クルマボウ(車棒)、クルマンボウと一般によぶ。マミウチボウ(豆打ち棒)ともいい、宮古でフーマボウ、波照間でヤマボウ(ヤマは仕掛け、道具の意)という。短い棒の長さ94 cm、長い棒の長さ125 cmで、短い棒に穴をあけ、そこに軸木を差し込み、長い棒に連結。短い方を持って長い棒で豆や麦をたたく。	沖1_p171-フーマボウ	
麦摺り石	ムジシリイシ	ムジシリイシ	麦摺り石。小麦の脱穀用の石。海の菊目石でたくさんのアバタがある。小麦をこすって実を落す。	沖1_p172-ムジシリイシ	島尻郡栗国村西
蘇鉄の実割り台	ステイチワヤー	タンナーワヤー	蘇鉄の実を割る際に用いる台。角材の切端で作った台の真中に穴を彫り、実を逆さに立て、包丁で二つに割る。蘇鉄の実をタンナー、アカミーといい、奄美諸島では味噌の原料にする。	沖1_p173-タンナーワヤー 沖1_p174-ヤンブイキリ	栗国島

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
横槌	サンジチャー	ユクティ	横手の意。蘇鉄の幹から澱粉をとるため叩く槌。ほかにティーブイ、サンジチャーまた、八重山竹富島でアイッシ、宮古城辺町でアイトゥという。	沖1_p175-ユクティ	鳥尻郡粟国村西
搗き臼	ウーシ	ウス	搗き臼。ウス、ウース、ウーシ、ウッチ等の呼び方がある。すべて木製で大小さまざま、形も幾種類かに分類される。新しいタイプのものでは、臼の縁を削って返しをつくったものもある。一つの臼で米つきから稲のノギ折り、製粉までやったが、用途に応じて二種類の臼を常備したところもある。大きいのを稲のノギ折り、少し小さいのは米の精白用、製粉用にした。	沖1_p176-ウーシ 沖1_p177-ウーシ	形の違いの図
竖杵	アジン	イナツク	沖縄ではアジンと呼ぶ地方が多い。国領地方や久米島でアジム、慶良間列島ではアージュンという。粟杵の転訛であるといわれる。先島地方では、イナツク、イナヒキなど稲搗き系統の呼び名。両端のつくりが異なり、一方は平らにして米の精白を、他方は円みをつけて製粉をする。	沖1_p179-アージュン	鳥尻郡座間味村慶留間
横杵	カキジチ	ガーゲー	横杵。与那国ではカバという。小浜島や波照間島、竹富島でアイチンツ、アイツ、アイシ(相槌)、沖縄本島では、カキジチ、ハキジチ、カキジチャーという呼び方が多い。	沖1_p180-ガーゲー	石垣島川平
		メーハキジチ	ニクブクを敷いてその上で稲のノギ折りに用いた。国頭村安田ではハッチ。	沖1_p181-メーハキジチ	大宜味村喜如嘉
		カティカバ	中間に柄をつけた槌状のもの。材はデイゴで軽い。穀を打つ時重いと砕けるから。カティはカチ、カキに相当し、ノギを折ることをいう。	沖1_p181-カティカバ	与那国
釈摺臼(木摺臼)	シリウーシ	メービキウス、シルシ	摺り臼の名称は「ひき臼」系と「摺り臼」系に大別できる。作り方はほとんど同じで、下臼には軸を立て、上臼の真中にはその軸を通す穴をあけ、上部には軸がぶれないように腕木を貫通する。使い方は、P182写真の竹富島の摺り臼は、両手に縄を持ち、足を伸ばして臼の根を支えて坐ってひく。取っ手はつけず縄で引く。両側の胴部に孔を通し、そこへ縄を結び、縄を交差して両側から引く。P183写真のものは、両側に腕木や取っ手をつけたタイプ。腕木をつけ、さらに縄をつける孔も開け、一人のときは取っ手を握り、二人の場合は縄を持つタイプもある。※なお、沖縄には、全回転系の臼はない。	沖1_p182-シリウーシ 沖1_p183-シリウーシ	竹富島
円形箕	ミーゾーキ	ムイバーラー	平たい籠のこと。大方ミーゾーキとよぶが、国頭村の安田、安波や大宜味村の謝名城でムイバーラー、ムイバラという。ソーキは野菜洗いに用いる丸籠で、ハラ(ハーラ)は九州本土のバラが語源だが、奄美以南の沖縄地方ではバラといっても通用しない。ユイと同様に穀類をふるうのに用い、干物にも利用。	沖1_p185-ミーゾーキ	那覇市内
		ウブスギ	大きなソーキの意。	沖1_p186-ウブスギ	与那国町祖納
籾入れ籠	バーキ	ムミゾーキ	籾ソーキの意。米入れ用の普通のソーキと区別した名称で、籾を干し、一時保管用として使用したり、モッコと棒を使って二人で運んだりするのにも用いた。	沖1_p187-ムミゾーキ	鳥尻郡仲里村宇江城
籾均し、均し棒	ンニカチャーサー	ムミカチャーサー	「稲掻き」の意。昭和になり稲種が変わり、稲を脱穀してから干すようになったため登場した道具。エブリに似た柄付きの掻き棒で、脱穀した籾を掻き寄せたり、均したりするのに用いた。	沖1_p187-ンニカチャーサー	鳥尻郡仲里村宇江城
俵	ターラ	ターラ	俵。写真は籾俵。沖縄では上納品は玄米で取めたが、通常は籾のまま保存した。又木のヤーマで編み、一般に三斗入れが多かった。	沖1_p188-ターラ	鹿児島県沖永良部島
斗掻き	トーカチ	トーカチ	斗掻。計量俵の上を均すのに使う道具。竹を斜めに削いであり、差して俵の中味を検査する道具としても使われた。その日暮らしの人を例えて「口とトーカチ」(口に入れるともう残らない。食べるだけ)という。また、八十八歳(米寿)のお祝いを「トーカチ祝」といい、引き出物としてこれを配る風習もあった。		
樽	タル	サーターダル	砂糖樽。製糖工場や砂糖小屋で用いた樽。たきあげた黒糖が固まらないうちにこれに流し込んで詰める。樽の高さ48センチ、後掲8 cm。正味120斤、樽の重さ15斤、計135斤。古くは椎などの木を割って作った「くれ板」を用いたが、その後製材所の松材や椎材に。竹帯は唐竹(まだけ)で結う。	沖1_p189-サーターダル	与那城村照間
砂糖搾り機	サーターグルマ	サーターグルマ	砂糖車。サトウキビ圧搾機。二本の石柱に上盤、下盤の厚板をおき、その中へ三つの車輪を入れる。真中の車には十字型のものをかませ、それはひかせ木と連結する。ひかせ木をひかせば真中の車がまわり、それに歯車のかみ合っている両側の車もめぐる仕組み。両側の車は回転方向が違う。	沖1_p190-サーターグルマ	名護市為又(びいまた)
稲積(にお)	マジン	シラ	稲むら。四隅に石をおき、その上へ四本の木を横たえ、雑木や竹で床をつくる。その上へ稲束の穂を中にして積み上げる。上部は交互に積んで屋根のこう配をつくり、屋根にあたるところは藁で覆い、縄をかけて風雨に耐えるようにする。沖縄諸島ではンニマジン、マジン、久米島ではイブシという。	沖1_図006-シラ 沖1_p191-シラ	八重山郡竹富町鳩間(p191)、小浜島(口絵⑥)
漁具					
小舟	サバニ	サバニ	小舟をいう。船(舟)のことをフニといい、大きな船はウフブニ、マギブニなどと呼ばれる。		
割り舟(丸木舟)		マルキンニ(丸木サバニ)	立木を伐り倒し、その木の大きさに従って割り抜いて作った原始的なもの。松、椎が主体。国頭地方ではマーキーサバニ(丸木サバニ)と呼ぶ。主に漁業用だが、竹富島や鳩間島では西表へ渡っての農耕のための運搬用にも使用。	沖1_p192-サバニ	今帰仁村制作のもの
はぎ舟		ハギンニ(はぎサバニ)	杉材を合わせてつくる。合わせてつくることからアーシブニともいう。安い順に「南洋ハギ」「中間ハギ」「糸満ハギ」がある。	沖1_p193-ハギンニ	久米島
帆	フー	フー	サバニの帆。	沖1_p194-フー	国頭村辺土名
櫂	カイ	ウェーク	沖縄本島の呼び方。宮古ではイザク、ズザク、ザァク、ヤクといい、八重山ではヤクー、イヤグ、ダグー、ヨー等という。大小あり、大は艫で舵に用いる。	沖1_p195-ウェーク	名護市名護
あか取り	ユートゥイ(アカトゥイ)	ユートゥイ	舟底に溜った水や塗(あか)を汲み取る道具。奄美群島を含め全琉的な呼称。アカトゥイということもある。		
		島ユートゥイ	丸木舟で用いたあか汲み。細長く、後部に柄を真直ぐつけた扁平な感じで、原初的な形。		

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
あか取り	ユートゥイ(アカトゥイ)	伝馬ユートゥイ	伝馬船やはぎ舟で用いたあか汲み。	沖1_p196-デンマユートゥイ	宮古平良市内
		糸満ユートゥイ	糸満で改良されたあか汲み。松の根元の組織の密になったところを削ってつくる。	沖1_p196-イトマンユートゥイ	本部町備瀬
木の枝のイカリ	ンブシ	アンカナ	舟の錨。松の枝に鉄を結んで重みをつける。小さい魚用のハエナワを仕掛けるのに向いている。	沖1_p197-アンカナ	伊平屋村島尻
石を結んだイカリ		イチャビ	舟の錨。小石を縄で結んだもの。鰻などのハエナワを仕掛ける際のオモリにも使用。	沖1_p197-イチャビ	国頭村安田
三本銚	トゥジャ	トゥジャ	魚突用の三本銚。「研いだ矢」の意。潜り漁や夜の漁りに向く。トゥザ、トゥガ、トゥダ、トゥンダ(与那国)、トゥンギヤ(波照間)などともいう。「トゥギヤ(三本銚)はイオ(魚)突く、イギョ(一本銚)もタコ(蛸)突く」という古い言葉がある。	沖1_p198-トゥジャ	島尻郡仲里村真謝
さわら銚		サーラトゥジャ	サワラを船上から突く銚。トゥジャと似て三本銚だが、真中の刃が両カエシになっており、投げて命中すると木の柄から抜けるようにできている。	沖1_p199-サーラトゥジャ	中頭郡与那城村伊計
疑似餌	ウージ	サーラウージ	サワラ漁で使う疑似餌。銚とセットで使用。	沖1_p199-サーラウージ	中頭郡与那城村伊計
投げ銚	ウジン(イグン)	モリ	投げ銚。両カエシの一本銚。	沖1_p200-モリ	糸満市糸満
一本銚		ウジム	たこ突き用の一本銚。名称はイグン系とウジム(ウギン)系に分かれ、広く分布。自然の岩穴に銚を刺して蛸を獲るため、沖縄には蛸壺がない。	沖1_p201-ウジム	島尻郡伊平村島尻
手鉤	カキジャー	カキジャー	鉤のこと。カキジー、カキヤー、カキザーなどのほか、ガズ(宮古)、イユカギダー(与那国)、カキズ(波照間)。大魚を釣ったとき、エラをかけてカタナで殺し、舟へ引き上げるのに用いる。	沖1_p202-カキジャー	糸満市糸満
		カキバリ	船端におびきよせたマールイカや白イカを引き上げるのに使う。	沖1_p203-カキバリ	国頭村
疑似鉤	イカイユ	イカビジュ	イカ釣り用の疑似鉤。イカイユともいい、イカジー(糸満)、イカユー、イチャユー(国頭地方や与勝半島の離島)ともいう。	沖1_p204-イカビジュ	宮古平良市池間
		ウーチバイ	疑似餌と似た用途。鉤針に餌をつけ、海底へ下し、餌をめがけて集まったところを引き上げる。	沖1_p203-ウーチバイ	粟国島
釣針用の錘	ンブシ	タカヤーマ	釣針用の錘。ヤーマは仕掛けとか道具の意。1 キロほどの石の上部に孔をあけ、糸を通し、曲げたつる草に結び付ける。	沖1_p205-タカヤーマ	島尻郡粟国村西
網	アミ	アミ	アミジケーアミ(張網)ともいうが、獲る魚の名称を冠してクスク網、イラブチ網などとも。	沖1_p206-クスクアミ	島尻郡座間味村慶留間
		ワリジケ網	追込みあみ。ワリは割れ目のことで、サンゴ礁の割れ目で使う網の意。貝殻の錘をつけている。	沖1_p207-ワリジケ	伊平屋
		パイアミ	四角錐状の張り網。船上からスクというアイゴの稚魚を掬いとる。柄木の根元に三本の細木を差し込み、網の四隅を細木と柄木に結び、頂点に当たる場所を根に結ぶと巨大な杓子状の網になる。	沖1_p208-パイアミ	国頭郡国頭村奥
		ウチャーン網	投網のこと。先島地方では「打ち網」の意でフッチャン、ウチャーンという。	沖1_p209-チチョウアミ	与那城村
		サディ	又手網。二本の竹に網を張って袋状にしたもの。袋の底は筒抜けになっていて、すくった獲物はそこから籠へ移す。伊平屋ではティーサリという。	沖1_p210-サディ	島尻郡仲里村真謝
		ヤンダー	小魚をすくう網。175 cmの二本の木に、たて135 cm、よこ150 cmの網を張る。網の前部には150 cmの間に30個ばかりのスビ貝(寶貝)をつけ、後部の網の縁には板浮子をつける。網目は6 mmで細かい。	沖1_p211-ヤンダー	国頭郡国頭村奥
籠	ティール	ウミディール	ティールグワーともいう。海で使う籠。海への弁当(主食の芋が主)を数人分入れて、帰りに獲物を入れるのにも使った。もとは大きくて運搬用に使うティルを小型化したもの。首のあたりをしぼる技法は比較的新しい。	沖1_p213-ウミディール	島尻郡仲里村真謝
餌籠		ムンダニディール	ムンダニとは餌の意。ヤドカリや魚などの餌を入れ、海ディールに結びつけて持つ。	沖1_p212-ムンダニディール	島尻郡仲里村真謝
魚籠(びく)		トックイディール	釣り用籠、びくのこと。首のあたりをしぼった形状が酒徳利に似ているので伊平屋島あたりでこう呼ぶ。ウミディール、ティールグワーと呼ぶことが多い。	沖1_p213-ティールグワー	与那城村
計量籠	バーキ	キンパーキ	魚類の計量用籠。六角編みのものや底を四角に編み、胴部はたてヒゴによこヒゴをくるくる巻いて口縁をとめた箆編みのものもある。	沖1_p214-キンパーキ 1 沖1_p214-キンパーキ 2	久米島仲里村真泊、糸満
延縄籠		ウミバーキ	ハエナワ用の釣針と糸を入れる容器。口の開いた籠や箱で、口縁部に釣針をとめ、中に糸を入れておく。	沖1_p215-ウミバーキ 沖1_p215-ヘーナーカグ	勝連村津堅島、糸満
水中眼鏡	ミーカガン	ミーカガン	潜水用の水中眼鏡。一枚ガラスを通して見るタイプではなく、両目別々の眼鏡仕様。国頭地方ではミーハガン、ミーハガミ、宮古でミーガンという。与那国ではイスミーカガン、奄美大島ではイショメガネといい、磯眼鏡の意。	沖1_p216-ミーカガン	糸満市糸満
箱眼鏡	タマウーキ	タマウーキ	タマはガラスのこと。小型の桶をつくり、広い底にガラスを張った。海底での潜り仕事に使う。ウミウーキカガン(知念村久手堅)、ウキハガン(国頭地方)、タル(宮古)、タグカガミ(城辺町保良)。	沖1_p217-タマウーキ	糸満市糸満
釣具箱	ウミバク	ウミバク	海箱。中に落ととし蓋の入った二重構造。どこの漁民も用いる道具入れ。落ととし蓋の仕切りに、釣針、小刀、錘、餌や煙草入れ等を入れる。内部に水漏れしない工夫がこらされている。「チーバク」という地方もある。「チー」とは釣針のこと。	沖1_p219-ウミバク	島尻郡仲里村真泊
		ウミビツ	海櫃。大型の海箱。船員の物入れにしたのがはじまり。衣類やたばこ等の身の回りのものを入れた。		
縄巻き	ナーマチ	ナーマチ	縄巻き。木製や竹製があり、一本釣り用の釣り糸を巻いておく。軒に吊るしておけば、風通しがよいので糸が弱らない。宮古池間島ではカウといい、竹製。	沖1_p220-ナーマチ 沖1_p220-カウ	粟国村、平良市

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
包丁(海包丁)	ホーチャー	ウミボーチャー	海包丁。サバガタナ、サバボーチャーともいう。鰯をとった際に使う包丁。逆手に持って急所をつくため、滑らないよう柄に刻みを入れた。	沖1_p221-ウミボーチャー	久米島仲里村真泊
魚叩き	ティーブイ	ティーブイ	鰯獲りに用いる。引き寄せた鰯の頭をたたいて即死させる。	沖1_p221-ティーブイ	糸満市
釜	アニク(チズカ)	アイクパーキ	川ではカニやフナ、海ではメバル、アイゴ、タイなどをとる円形の籠。真中上方に入口をつくり、出られないようにカエシをつくる。国頭一帯でアニクといい、タマンパーキともいう。	沖1_図009-アニク 沖1_p222-ティール 沖1_p222-タマンパーキ 沖1_p223-アニク1 沖1_p223-アニク2	糸満市 国頭村 々々
磯籠		チズカ	女性が磯での漁撈に用いる籠。口縁を大きくし、腹部をしぼった竹籠。	沖1_p224-ウルワイチズカ 沖1_p224-チズカ 沖1_p224-ティルルー	伊平屋村島尻(上)、下(糸満(下))
山樵用具					
山刀	ヤマナジ	ヤマカタナ	山で使うナタ。ヤマナジ(山鈍)ともいう。刃はほとんど鍛冶屋で作った。背は水平、刃は曲線を描いた型が多いが、竹の葉型や刃先の垂直に切れた鈍(ゲンノウハツタナ・大宜味村一帯)もある。	沖1_p225-ヤマカタナとシイー	石垣市川平
鞘	シイー	シイー	ヤマカタナの鞘。二枚の木を削って合わせて作る。	沖1_p225-ヤマカタナとシイー	石垣市川平
斧	ウース	ウース	ウース、ウヌ、ウーン、ブヌ、ブース、ブーナ、ブイスなど呼び名は多々あるが、すべて斧からの転訛。ハー(刃)とハブ(カブ・台木)とニリ(柄)からなる。	沖1_p226-ウース	国頭郡大宜味村謝名城
わき鋸	ヌクジリ	タイビキ	二人挽きのわき鋸のこと。大きいことから沖縄本島では、ウフヌクジリ、マギヌクジリと呼び三人で挽いた。	沖1_p227-タイビキ	八重山郡与那国町祖納(そない)
狩猟用具					
槍	ヤイ	ヤマシシヤイ	猪を突く鉾。八重山でフク(鉾)またはブク、国頭地方でヤイ(槍)ともいう。	沖1_p228-ヤマシシヤイ	国頭郡大宜味村謝名城
		サギヤイ	一本の槍の両脇に切り込みをつくり、二本の槍を継ぎ足して三又にする。木の上に仕掛け、落下する力で突く。	沖1_p229-サギヤイ	国頭郡国頭村比地
加工用具					
薬すぐり	シビトウイ	フランシビトゥヤー	薬のシビ(ハカマ)を除く道具。フランシビスグヤー(薬のシビすぐり)とも。T字型につくって横木に七～本の釘を打った手持ちのもの、地面に立てた二本の杭に横木を打ちつけて十数本の釘を上向きに打ちこみセンバコキのように使うタイプもある。	沖1_p230-フランシビトゥヤー 沖1_p231-フランシビトゥヤー	大宜味村
		ムンジャラサバチ	麦薬をすぐってきれいにする道具。粟国では麦薬で縄、俵、笠づくりをした。ムンジャラは麦薬、サバチは櫛の意。一本の棒に数本の釘を打ちつけたもの。	沖1_p231-ムギワラサバチ	粟国村
椿油搾り	アンドシブヤー	トゥイグチ	椿油搾りに用いる道具。鳥の嘴に似ていることからついた名称。中間が彎曲し、先が尖った嘴状。	沖1_p232-トゥイグチ	島尻郡仲里村儀間
油搾り器		アンドシブヤー	搗いて砕いた実を蒸し、棕櫚皮に包んでこれに挟み、力いっぱい上から圧して油を搾る。	沖1_p233-アンドシブヤー	島尻郡具志川村山里
蕙機	ハタ、ヤーマ	ムッスウチヤーマ	蕙打機。ムシルヤーマ、ムシルバタ、ムシルハタムン等の呼び名も多い。台木に柱を立て、台木に二本の横木、柱にも二本の横木を差し込む。	沖1_p234-ムッスウチヤーマ 沖1_p235-ムッスウチヤーマ	大宜郡村謝名城(p234)、伊是名村役所資料室(p235)
蕙機の蔑	フドッチ	フドッチ	一つおきに円形と長方形でできている。		
蘭草差し	イーサシ	イーサシ	竹を平らに削り、先端に切り込みをつくったもの。蕙の幅の大小によって使い分けた。		
蘭草裂き	イーワヤー	イーワヤー	蘭草を裂くための用具。一枚の板の片端に箱型に台をつくり、端近い所に三味線のカラクリ(範(のり))のようなものをつくり、針金をびんと張る。	沖1_p236-イーワヤー	糸満市兼城
もっこ編み	ヤーマ	オーダーツクヤー	オーダー(もっこ)を編む道具。オーダーアミヤーマも同義。高さ50 cmほどの又木二本を柱とし、120 cmほどの横板を差しただけの簡単な仕掛け。横板には等間隔に数条のミゾがある。そのミゾに、先端に細長い石を結んだ縄をあてがい、右に左に縄を往復させて締めていく。	沖1_p237-オーダーアミヤーマ 沖1_p238-オーダーツクヤー1 沖1_p238-オーダーツクヤー2	粟国
俵編み		タンブーヤーマ	炭俵を編む道具。オーダーヤーマと形も用い方も類似。タンブーダイともいう。鍾は木でつくるほか石も用いる。	沖1_p239-タンブーヤーマ	
鉾	フク	フコーン	蕙づくりや草履づくりに使うアダン葉を採取するための道具。	沖1_p240-フコーン	八重山郡竹富町波照間
竹べら	ヒラ	竹ベラ	アダン葉の刺を除く道具。竹の外皮の部分の削り残してつくる。	沖1_p240-タケベラ	
網針	アグイ	アグイ	網を繕う道具。網目の大きさによって大小の変化がある。先はなだらかなとんがりをなし、後部は凹部をつくる。真中は削って針を一本立て、糸を巻く際の中心部とする。	沖1_p241-アグイ	糸満市
目板	アギタ	アギタ	網の目の大きさを固定する板。アグイと一緒に用いる。アイダ(八重山川平)、アウギタイ(宮古保良)ともいう。	沖1_p241-アギタ	糸満市
投網編み		アンスキヤマ	投網をつくる道具。胴部に四角の穴をあけた竹筒を台に差し込んだもの。	沖1_p242-アンスキヤマ	石垣市川平
屋根葺き用具					
屋根葺き道具			屋根葺き道具いろいろ。	沖1_p243-ヤネフキドウグ	
屋根針	ハーイ	ヤーサシパーイ	屋根葺き用の縄を通す針。「家差し針」の意。ヤーフチパーイ(家葺き針)とも。与那国ではダークイハイ(家づくり針)。針は竹で作ることが多い。節を先端につけ、油を塗って火に少し焙って作り、斜めにそぎおとしたところに穴をあける。九尺か六尺物が多く(屋根葺き用)、短いものは三尺程度(壁用)。	沖1_p243-ヤーサシパーイ	イラスト
木槌		ユングキー	木槌。屋根葺き道具の一つ。		イラスト
茅締め		カヤシミヤー	屋根葺き道具の一つ。茅を締めるもの。30 cmばかりの小さな棒の真中に穴をあけ、それへ縄を通して締めつける。	沖1_p243-カヤシミヤー	イラスト。カヤぶき風景はp244

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
鍛冶屋道具					
鍛冶道具			鍛冶屋道具一式。	沖1_p246-カジドウグ	
鞆	フーチ	フーチ	鍛冶用具。鞆(ふいご)。	沖1_p246-フーチ	イラスト。
金床	カナカ	カナカ	鍛冶用具。四角形。	沖1_p246-カナカ	イラスト。
金槌		チーチーグワー	鍛冶用具。槌状で、後ろより前の部分が二倍ほど長い。大槌で打って後にこれで形を整える。	沖1_p246-チーチーグワー	イラスト。
		ミーチ	鍛冶用具。槌のミーチーグワーとも。チーチーグワーに似ていて、いっそう先が尖っている。	沖1_p246-ミーチーグワー	イラスト。
大槌		ウフジチ	鍛冶用具。メーウチの持つ大槌。戦後は米国製のハンマーも多くなった。	沖1_p246-ウフジチ	イラスト。
鑿(たがね)	タガニ	タガニ	鍛冶用具。槌の一種。打突部が直方体の一辺が三角に合わさった形になっている。	沖1_p246-タガニ	イラスト。
火かき棒	シミカキ	スミカキ	鍛冶用具。火かき棒。シミカチとも。	沖1_p246-シミカチ	イラスト。
水入れ	トーニ	トーニ	鍛冶用具。石製のたらい。	沖1_p246-ターレー	イラスト。
銚		シン	鍛冶用具。せん。両端に柄があり、中間の両側が半円形になっており、そこで歯立てをした。旋盤の登場で用いなくなった。	沖1_p246-シン	イラスト。
火箸	ヒバシ	ヒバーシ	鍛冶用具。S字に曲げた二本の棒を交差させ、挟み状にした道具。熱いものを掴むのに使用。	沖1_p246-ヒバーシ	イラスト。
その他職人用具					
錐	イリ	クルマイリ	車イリ。舟大工道具。竹釘を打ち込む前に使う。火きり用具に似た形状で、軸の下の方に丸い輪をつけ、先端にキリを差す。軸の上端近くに孔をあけて紐を通し、その両端を軸に差した弓に結びつける。弓を廻して綱を巻き、弓を上下に動かすと、その回転で穴をあけることができる。	沖1_p248-クルマイリ	糸満市
		トーイリ	唐イリ。舟大工・家大工が使用。左手で軸を握り、右手に弓を持って使う。縄の両端を弓の両端に結び、軸に2回巻きにして回転させる。簡単に抜けず、しかも回転する握りの作り方がミツ。	沖1_p248-トーイリ	与那城村
轆轤(ろくろ)	カーラグルマ	ミーガーラグルマ	雌瓦車。瓦づくり用具。台座に軸を差し、上に円盤をのせた形状。	沖1_p250-ミーガーラグルマ	イラスト。
		ウーガーラグルマ	雄瓦車。瓦づくり用具。台座に筒状の軸を差した形状。	沖1_p250-ウーガーラグルマ	イラスト。
瓦型		カーラバク	瓦箱。瓦づくり用具。雌瓦車で使用。雌瓦の型。樽状。雌瓦車の上に伏せて用いる。	沖1_p250-ミーガーラグルマ	イラスト。
瓦布		カーラチン	瓦衣。瓦づくり用具。雌瓦車で使用。カーラバクの上に張る布。	沖1_p251-ミーガーラグルマ	イラスト。
土切り弓		クワーヒン	瓦づくり用具。土を切る道具。	沖1_p250-クワーヒン	イラスト。
なで板		ナディ	瓦づくり用具。切った土をこする道具。	沖1_p250-ナディ	イラスト。
瓦定規		ジョウジ	定規。瓦づくり用具。瓦の長さを決める道具。	沖1_p250-ジョウジ	イラスト。
口切り鎌	イラナ	クチチャーイラナ	口切り鎌。瓦づくり用具。口を切り整える道具。		イラスト。
砂撒き		サシ	製塩用具。砂撒き。33 cm×31 cmの板に1 mほどの柄をつけたもの。	沖1_p252-サシ	イラスト。
潮うち		サラ	製塩用具。潮をうつ器。以前は挽物だったが、金属製の器に変わった。	沖1_p252-サラ	イラスト。
寄せ板		ユシ	製塩用具。ユシは寄せの意。116 cm×25 cmの板に290 cmの柄をつけたもの。	沖1_図008-ユシ 沖1_p253-ユシ	イラスト。
鋤簾		ゾーリン、ジョレン	製塩用具。ユシで集めた砂をかき入れて手押し車に乗せる道具。	沖1_図008-ゾーリン 沖1_p252-ゾーリン	イラスト。
砂かき		クルバシー	製塩用具。撒いた砂がよく陽にあたるように砂をかく道具。台木に小さな板で歯をつけた。農耕具のクルバシーに形も呼び名も共通している。	沖1_p252-クルバシー	イラスト。
塩釜		ナービ	鍋。塩水を炊く。	沖1_p253-ナービ	
鑿		ヌミ	鑿。石工用具。穴を彫り、彫刻する道具。	沖1_p254-ヌミ	宮古島平良市
石矢		石イヤ	石工用具。石を割るのに用いる。	沖1_p254-石イヤ	宮古島平良市
石よき		石ユーチャー	石工用具。仕上げの刻みに用いる。		
製糸用具					
蚕籠・籠	ハジ	ハージャ	製糸用具。養蚕用の竹籠で、敷くために平らに編んだ。この上に紙をしいて蚕を飼う。ワクの中に空間をおいて重ねる。板作りの蚕箱が入る前に用いていた。ハージャ(伊計島)、バジャ(国頭村安田)、ファジャ(国頭村安波)、バダ(宮古城辺町保良)、ファザ(大宜味村謝名城)、ハージャ(久米島、伊平屋)	沖1_p255-ハージャ 沖1_p255-ムシグワのハジ	久米島仲里村比屋定(上):アシの網代編み、奄美沖永良部知名町余多(下):ムシグワのハジ
真綿かけ(旧式)	ティーシー	チーシー	製糸用具。真綿から糸を績む道具。台に柱を立て、その頂部に十字型に板を差したもの。この十字型へ真綿をかけ、糸を生み出す。久米島ではマスカキ(蔦掛け)。一反分を績むのに一カ月くらいかかった。	沖1_p256-チーシー	
真綿かけ(改良型)		メーディーシー	製糸用具。チーシーの進化型。木の台に竹の柱を立て、円形の板をのせぐるぐる回転できるようにになっている。盤状には上に向けて十本ほどの竹釘を立て、ここに真綿をかける。	沖1_p256-メーディーシー	久米島志川村山里
巻き取り		カジマヤー	製糸用具。糸をワクに巻き取るのに用いる。メーディーシーの台を利用し、円盤の代りに十字に組んだ棒に四本の柱を立てたものをつける。ピーマ(国頭村安波)、カナクイ(伊平屋や伊是名)とも。	沖1_p257-カジマヤー	島尻郡仲里村比屋定

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
カセ木	カシギー	カシ	製糸用具。カセ糸を巻いて長さを決める道具。宮古平良市松原ではカシギー。約1mの2本の木の間に約60cmの木を入れて止めたH型。これにカセ糸を巻いて長さを決めた。ビナーシ(八重山竹富島)とも。	沖1_p258-カシギー	平良市
揚杵		クイメー	製糸用具。カシギーの後継となるカセ糸整経器具。四本の横木の中心軸にハンドルをつけて回し、糸を巻く。	沖1_p258-クイメー	大宜味村
苧桶	サスキ	ティーツカサ	製糸用具。苧麻糸を紡いで入れておく容器。縁が内側に嵌る形の落とし蓋がついている。カヤ籠なので波照間島ではガイジペーラ。宮古平良市ではブー(苧麻)イリ(入り)マグ(籠)という。	沖1_p259-ティーツカサ	竹富島
		サスキ	製糸用具。苧麻糸を紡いで入れておく容器。縁が内側に嵌る形の落とし蓋がついている。木製の四角い容器。サッス(宮古池真島)、サックイ(八重山竹富島)、キーペーラ(波照間島)とも。	沖1_p259-サスキ	平良市
	ウーバーラ	ウンゾーキ	製糸用具。紡いだ糸芭蕉を入れておく籠。ウーバーラーとも。ウーは苧芭蕉(糸芭蕉)、ソーキ、ハーラは竹籠の形態を表す語。	沖1_p260-ウンゾーキ	国頭郡大宜味村喜如嘉
芭蕉糸すぐり	イエービ	クーダゲーシ	製糸用具。芭蕉糸をすぐって肉質部を除く器具。農機具の稲の脱穀用管に似た形状。竹を二つに割り、ピンセット状にして用いる。	沖1_p261-イエービ	国頭郡大宜味村喜如嘉
紡ぎ車	ヤーマ	ツンツヤマ	製糸用具。紡ぎ機の意。ヤーマの呼び名が標準的。糸によりをかけるのが主用途。右に車とそれを廻すハンドルがあり、左に紡錘がある。	沖1_p262-ツンツヤマ	宮古島平良市松原
糸杵	ワク	ワク	製糸用具。糸巻き。宮古ではバフ、八重山竹富島ではティバフ。	沖1_p263-バフ	宮古島平良市
座繰り	ワタハナシ	綿繰りヤーマ	製糸用具。沖縄本島中頭地方ではハナシという。綿花の種子と綿を分離するための器具。	沖1_p264-ハナシ	石垣市川平
畜産用具					
おもがい	ンムゲー	ムーゲー	畜産用具。「おもがい」の意。二本の木片で馬の面を挟んで制御するもの。	沖1_p266-ムーゲー	国頭村安波
鼻木	ハナ		畜産用具。牛の鼻に通す木。	沖1_p265-ハナ	島尻郡具志川上江洲
山羊の首輪			畜産用具。山羊の首輪。10cm余の板の両端に穴をあけ、首から回した縄を通して結び、真中にも穴をあけて別の縄を通し、柱につなぐ。	沖1_p267-ヤギノクビワ	勝連村浜比嘉島(上)、徳之島上面縄(下)
口籠		クチククイ	畜産用具。馬の口を縛る編み袋。クチシカイ(伊平屋)、編み袋を意味するフチアンク(竹富島)やアンディラ(平良市久貝)とも。	沖1_p268-クチククイ	島尻郡志川村西銘
豚の餌箱	トーニ	トーニ	畜産用具。豚の餌箱。タウニ(宮古)、ワースタイ(与那国)、ワタアカイ(小浜島)、オースアザイ(竹富島)とも。アカイ、アザイはしゃこ貝のこと。	沖1_p269-トーニ	石垣市川平
豚舎	フル	フル	畜産用具。豚舎。フルとも。	沖1_p270-フル	島尻郡座間味村阿嘉
鳥籠		ミーバーラー	畜産用具。養鶏用籠。主にタウチー(軍鶏)用。六角目に編まれ、ロウカクミーと呼ぶ地方も。ミーは目が大きくあいている意。	沖1_p271-ミーバーラー	島尻郡具志川村仲泊
耳判		ハン	耳判。放牧する牛、馬、山羊の耳につける持ち主のしるし。耳につけた刻印によって判別する。(耳判台帳)	沖1_p272-ハン	
馬杵木		馬のヤーマ	馬の蹄鉄をつくる小屋とその仕掛け。小屋は鍛冶屋になっていて、ふだんは注文に応じて農漁具や刃物類をつくる。	沖1_p273-ウマのヤーマ	
交易用具					
桝	チョーバン	マーシ	交易用具。京判すなわち京榎のこと。大小に呼び方の違いがあり、一合榎をナカムイ、五合と一升榎をチョウバンまたはマーシ、一斗用はトーという。	沖1_p274-チョウバン	島尻郡栗国村西
斗掻き	トーカチ	トーカチ	交易用具。桝に盛った穀類を平らにならす短い棒。	沖1_p275-トーカチ	八重山郡竹富町竹富
竿秤	ハカイ	ハカイ	交易用具。小は苧麻はかりから、大は三人がかりのものまである。前部に鉤をつけ、竿には錘をつける。手に持つ下げ輪は裏表にあり、鉤に近いもので重い物を、錘に近い方で軽いものを量る。	沖1_図012-ハカイ 沖1_p276-ハカイ	本部町渡久地(大秤)、久米島具志川村島島(小秤)
		チンドー	竿秤。大秤。所によりテットーとも。水揚げの鰹を笊に入れて計っている。二人で担ぎ、他の一人が錘を見る。これは重量のあるものをはかるのに用いる。	沖1_p276-チンドー	本部町渡久地
銭籠		ジンディール	交易用具。売上金を入れる籠。口がすばみ、胴が張った小籠。紙幣にも硬貨にも使いやすい。	沖1_p277-ジンディール	糸満
銭箱		ジンバク	銭箱。交易用具。昔商家で用いた銭箱。上の一部に蓋をはめ、鍵がかけられる。寛永通宝を用いた時代のもの。	沖1_p277-ジンバク	国頭村安波
運搬具					
馬車	バシヤ	バサ	運搬具。二輪の荷馬車。車輪は元来、木に金輪だったが、戦後は自動車のタイヤに変わった。人力の荷車から荷馬車に移ったのは、大正末期以降昭和期に入ってからのところが多い。最初の伝来は明治40年前後。	沖1_図006-バシヤ 沖1_p278-バサ	宮古郡下地町来間
牛轎		マータ	運搬具。牛に引かせるソリ。もともとは又木を用いていた。二本の台木の上へ箱を乗せたようなつくり方で、水牛に引かせる。水田の中まで乗り入れ可能。	沖1_図016-マータ 沖1_p279-マータ	八重山郡竹富町小浜
		ヒキャシギー	運搬具。ソリ。長さ350cmの二本の木を幅80cmに固定し、後方を地面につけ、前方を鞍に直接つなぐ。砂糖樽を主に運んだ。		
山原船	ヤンバルブニ	マーラン	山原船。運搬具。馬籠船(マーラン)ともいう。二枚帆で、真横から船体を見ると曲線をなしている。舳先が二つある。	沖1_p280-ヤンバラフニ	糸満市糸満
荷下げ船		ニーサギブネ	荷下げ舟。運搬具。荷を積むだけでなく、下に吊って筏状にして建築用材運搬をした。伊計島ではニーハギヤーという。	沖1_p281-ニーサギブニ	中頭郡与那城村平安座

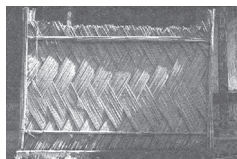
名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
荷鞍、乗鞍	クラ	フラ、ヌイグラ	与那国町祖納では、フラというが、沖縄本島ではクラといい、乗鞍と区別するため、ウーサーグラ(久米島真謝)、ウーシグラ(与那城村伊計)、ウマンクラ(国頭村安波)と呼ぶ。二本の曲木を用い、前後の曲木には孔があけてあり、それぞれ前掛、尾掛をつけるようになっている。	沖1_p283-フラ	与那国島
島鞍		シマグラ	島鞍。前鞍骨が直立しているのに対し、後の鞍骨は反っている。		
沖縄鞍		ウチナーグラ	沖縄鞍。新しく入ったもの。二本の鞍骨とも直立し、荷を積載するに向いている。	沖1_p283-ウチナーグラ	久米島
下鞍	ツケ		運搬具。鞍当てのこと。シチャンタ、シタンバと訛ることもあるが、先島ではシキ、キツギ、スツキ、ツケなど「敷き」系の呼び名が多い。	沖1_p284-シチャンラ 1 沖1_p284-シチャンラ 2	久米島仲里村真謝
馬車引き鞍	クラ	バジャグラ	運搬具。明治中期以降、馬車とともに鹿児島から入ったといわれる。	沖1_p285-バジャグラ	島尻郡伊平屋村田名
宮古鞍	クラ	フラ、ロップフラ	運搬具。宮古独特の馬車鞍で、他地域では宮古鞍というが、宮古内ではフラまたはロップフラという。昭和初年に改良された。	沖1_p286-フラ	宮古島平良市
引かせ鞍	クラ	ヤマグラ	運搬具。牛に山の木をひかせるヒカセグラ。	沖1_p287-ヤマグラ	石垣市川平
鑑		カン	運搬具。木に打ち付けて縄をかけるための金具。	沖1_p287-カン	石垣市内
牛鞍	クラ	ウシグラ	運搬具。田畑でのヒカセグラ。牛の荷積み用としても、スキひかせ用としても用いる。	沖1_p288-ウシグラ	石垣市川平
天秤棒	ボウ	ボウ	先島でバウ、宮古でアウク、波照間でアグ、竹富でアーフ、与那国でスー。		
尖り棒		ハイボウ	棒に刻みを入れてひっきりかりをつけたもの。水汲み桶やモッコなど紐付きのものを担ぐのに用いる。	沖1_p289-ハイボウ	国頭郡大宜味村
		トゥガイボウ	両端を鋭くそいで、草の束や稲束、モッコに入れた草などを刺して担ぐ。	沖1_p289-トゥガイボウ	国頭郡大宜味村
頭上運搬籠	バーキ	バーキ	目の粗い笊。頭上運搬用具として使用することが多い。主にイモを入れて運び、あるいは洗うのに用いる。アラバーキ(座間味島)、ンムアレーバーキ(久米島)、密に編んだものをユナバーキ(米入れ)。	沖1_p290-バーキ	島尻郡豊見城村与根
土砂籠		工事バーキ	河川工事で用いており、ふつうのバーキより小さく、道普請で砂利や石入れに使用される。人足バーキとも。沖永良部では同形のものをヒャーギという。	沖1_図013-工事バーキ	那覇市首里
頭当	ガンシナ	ガンシナ	運搬具。頭に物をのせて運ぶ際に用いる輪。荷を安定させ、頭が痛くならない。	沖1_p291-ガンシナ	粟国島
耳籠	バーキ	ミミューチャー	運搬具。芋掘り、野菜入れにする笊。バーキより縁の部分が未発達。二つ耳と区別して、四つ耳の意でミミューチャーというが、用途からウムフィバーキ(芋掘りバーキ)、棒で担ぐので羽地ではハタミビャーキとも。男性用。	沖1_p293-ミミューチャー	金武村屋嘉
		ミミフタバーキ	運搬具。耳二つで女性用の芋掘り、野菜入れの笊。紐をつけ、軽い場合は肩にかけ、重いものは頭上にのせる。	沖1_p293-ミミフタバーキ	恩納村名嘉真
背負籠	ティール	バーキ、ビャーギ	運搬用具。ガンシナを用いた頭上運搬に対し、カサギンナを用いての背負い(頭背負い)運搬具。一般にティル(ティール)というが、バーキ(バキ)、シル(シール)、イビラフ、ビャーキなどの呼称も。	沖1_p295-ティール 1 沖1_p295-ティール 2 沖1_p295-ティール 3 沖1_p297-ティール 沖1_p298-ティール	国頭型、羽地型、奄美型(p294)、島尻郡伊平屋村
背負縄		カサギンナ	背負い縄。		
腰籠	ティール	クイジキ、フィジキ、タジク	運搬具。ティール(運搬用籠)の小型で、中南部ではティールグワーという。腰につける。豆入れ、山桃入れ。国頭地方ではクイジキ、フィジキ、タジクと呼ぶが、一段と小さい。	沖1_p298-ティール	中頭郡読谷村親志
編袋	アミディール	アンツク	運搬具。「編袋」を意味する語。	沖1_p299-アンツク	川平部落
		アンディル	運搬具。「編手籠」。海道具入れ。海へ出る時はイモ弁当入れのフタディルその他の釣道具を入れ、帰りは獲物入れにする。	沖1_p300-アンディル	島尻郡粟国村西
		アンディラ	運搬具。編手籠。	沖1_p301-アンディラ	平良市狩俣
		ピラザヤ	運搬具。「ヘラ鞘」。編み方はアンディラに類似。ヘラや鎌を入れ、畑へ行く。厚みがない。	沖1_p302-ピラザヤ	狩俣
		ティーアン	運搬具。編袋。手綱の意で漁網と似た編み方。	沖1_p302-ティーアン	池間島
俵籠	ターラ	ターラ	俵。米俵の編み方を応用した運搬用具。竹のない粟国にはバーキが少なく、ターラを堆肥やイモの運搬に使用。ガンシナを用いて頭上運搬する。女性用。	沖1_p303-ターラ	島尻郡粟国村西
担ぎ俵		ターラゲー	俵袋。「俵」の意。ヤーマを使って編む。保良では、ワラで作ったものは穀入れ、クバ製は弁当入れや海での魚介類入れと使い分けていたようだ。上野村ではクバターラ。	沖1_p304-ターラゲー	宮古郡城辺町保良
編み俵		ツンダーラ	「編俵」の意。底部はしばって結び、口縁は折り上げ、縄を通す。イモを入れたり、草を入れて運ぶ。	沖1_p304-ツンダーラ	平良市久貝
もっこ	オーダー	オーダー	代表的な運搬具で、人力畜力いずれも使用。オーダー、オーラー、アウダ、アオダ、アプタ、オンダー、ウダとも。用途も幅広く、堆肥運び、芋掘り、草刈り、緑肥や土砂運び。	沖1_p305-オーダー	国頭郡国頭村奥
もっこ	シーブ	シーブ	草刈りに用いるもっこ。目の大きい編み状の袋。浮子入れ、漁網の編み方に類似。	沖1_p306-シーブ	中頭郡与那城村伊計
たればかま		シーブ	牛馬で堆肥や土砂を運ぶ時に用いる運搬具。本来は四角に枠をつくり、鞍にはめる。久米島ではシーブオーラー、沖永良部島ではクェムチオーダー。	沖1_p307-シーブ	八重山郡与那国町祖納
旅行用具					
旅行箱	ヒチグワー	ブンタイ	旅行時に衣類その他を入れる箱。松舟が遭難した際には箱が浮き、救助箱の役目もした。	沖1_p308-ブンタイ	八重山郡竹富町竹富

名 称	沖縄での主な呼称	別 称	説 明	画像ファイル名	画像撮影地
旗	カジバタ	カジバタ	「風旗」の意。旅行中の安全を祈願するためのもの。旅用の信仰用具。身分により船型や魚型などがあった。	沖1_p309-カジバタ	八重山郡竹富町竹富
報知用具					
法螺貝	ブラ	ブラ	ホラ貝を使った報知具。綱引きなどの景気づけにも用いる。	沖1_p310-ブラ	国頭郡国頭村安波
鍾		カニ	道路脇の福木に吊った鐘。火災等の非常時用のほか、葬式や作業などの合図にも用いた。酸素ボンベや不発弾などを利用することもあった。	沖1_p311-カニ	国頭郡本部町備瀬
団体生活・信仰					
団体生活用具					
川札	フダ	ハーマイフダ	川廻り札。川で遊ぶ子どもたちの安全を守るために巡視人が持つフダ。カーフダともいう。	沖1_p315-ハーマイフダ	国頭郡国頭村安波
札		フダ	風紀取り締まりの目的でつくられたもの。表には違約札の文字と部落会長印、裏には注意事項を記載。	沖1_p316-フダ	八重山郡竹富町竹富
ワラザン	サン	サイ	部落の御嶽へ人口報告をし、繁栄を祈願するもの。薬一本で一人とし、一戸づつひとまとめにして束ねた。	沖1_p317-サイ	国頭郡本部町浦崎
徴収板		ヌキ	壁と柱と柱の間に差す横板(ヌキ)に似た、長さ1メートルほどの板。裏表に部落中の屋号と人口がびっしり書き込まれている。集会等の出欠や、神事に使う米などの徴収の確認に用いた。	沖1_p318-ヌキ	国頭郡国頭村安波
信仰用具					
火の神	ヒヌカン(ウカマ)	フィヌカン、ヒヌカン	竈の神。ウミチムン(お三物)、ウカマガナシ(お竈がなし)ともいう。煮炊きをする3個の石が小型化し、象徴化するようになったという。	沖1_p319-ヒノカミ	国頭郡国頭村安波
御嶽		ウタキ	御嶽。部落の聖地。八重山ではオン、オーン、ウンという	沖1_p320-ウタキ	石垣市川平
石占		ビジル	ビジュル、ピンジルなどともいう。願掛けをし、その石を持って軽いか重いかで吉凶を判断する。	沖1_p321-ビジル	国頭郡大宣味村謝名城
石敢當	イシガントー	イシガントー	「石敢当」。辻やT字型の道路の突き当りに立て、悪風を払い除ける。	沖1_図001-イシガントー 沖1_p322-イシガントー	国頭郡国頭村安波
注連縄		ムーチーの魔除け	陰暦12月8日の鬼餅(ムーチー)行事に用いるしめ縄。左縄に餅を包んだ月桃の葉や白紙、クワズイモの葉をさし、ムーチーの日の朝立てる。	沖1_p323-ムーチーノマヨケ1 沖1_p323-ムーチーノマヨケ2	上(久米島具志川村)、下(糸満市兼城)
魔除け	ムンスキ	ムンヌキムン	魔除けの意。シャコ貝の普通大のものを道のつき当りの石垣に二枚(一個体)を外へ口を向けて置く。	沖1_p324-ムンヌキムン	中頭郡勝連村津堅
		アクゲージ	悪風返し、魔除け。水字貝の角を縄で結んで吊る。	沖1_p325-アクゲージ	島尻郡伊平屋村島尻
	ゲーン(サン)	サン	魔除け。サニと呼ぶ地方もある。煮た食物を外へ運ぶ際、食物の精を邪気にとられないようにさす。芭蕉の葉またはワラを結ってつくる。	沖1_p326-サン	国頭郡国頭村安波
		ゲーン	魔除け。ススキを輪むすびに結ったもので、サンの大きいもの。ゲーン、ゲース、ゲーナともいう。畑や薪などに立て、立入禁止、占有の意味を持たせることもある。	沖1_p327-ゲーン	具志川市具志川
		グシチサン	ススキを結った目印。四辻または三差路の中央に立てた。蛇を埋めたという表示。	沖1_p328-グシチサン	中頭郡美里村知花
屋根獅子	シーサー	シーシ	集落の魔除けとする石獅子。	沖1_p329-シーシ	島尻郡大里村南風原
		シーサー	魔除けの屋根獅子。	沖1_p330-シーサー	糸満市兼城
御神酒徳利		バタス	先島地方でミシャグ(神酒)を入れ、ユノーシヤツノザラという椀へ注ぐ容器。	沖1_p331-バタス1 沖1_p331-バタス2	宮古平良市狩俣
御神酒木椀	ユノーシ	ユヌシ	神人に捧げる神酒を入れる容器。沖縄本島ではユノーシという。	沖1_p332-ユヌシ	伊平屋村田名
	ツヌザラ	ツヌザラ	ツヌジャラ、スヌガラとも。神へ神酒を捧げるときに用いる。中国古代の爵に似た形で、下に四つの足、翼のついたところが牛の角に似ている。	沖1_p332-ツヌザラ	竹富島
黒線香	ヒテウコウ	クルウコウ	仏事・神事に用いる線香。	沖1_p333-クルウコウ	糸満市糸満
酒入れ箱	ビンシー	ビンシー	瓶子。神への祈願に必要な、酒入れの対瓶・盃・線香・白紙などを入れる携帯用の道具箱。ふたをとればそのまま祈願できる。(『ふるさと沖縄の民具』より)	沖1_p334-ビンシー	島尻郡知念村久手堅
豊作の神		マユンガナシ	真世神＝豊作の神。頬かむりをし、クバガサを被り、前後にクバミノを着用し、長い杖を持った扮装で、各戸をまわる。	沖1_図008-マユンガナシ 沖1_p335-マユンガナシ	石垣市川平
木面		バーントゥ面	目のつりあがった木彫りの面。仮装の来訪神がかぶる。	沖1_p336-バーントゥメン	宮古平良市島尻
大綱		チナ	綱引きの綱。陰暦6月15日以後8月15日までの間に行う。豊作の感謝、来期の豊作祈願と子孫繁栄などを祈る。	沖1_p337-カナチオーラセー	宜野湾市大山
龕	ガン	ガン	龕。遺体を納めた棺を墓まで運ぶ道具。全体に朱塗りを施し、戸板には仏像や蓮華が金箔で描かれる。前後各二名、計四人の若者で担いだ。(『ふるさと沖縄の民具』より)	沖1_p338-ガン	中頭郡勝連村浜
厨子甕	ジーシ	ジーシガーマ	厨子甕。使者を葬送して数年後に洗骨する際に用いる骨壺。	沖1_p339-ジーシガーマ 沖1_p340-ジーシガーマ 沖1_p341-ジーシガーマ	

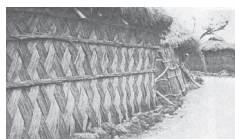
生活用具・衣食住【住居用具】



沖1_p013-ヒンブン1



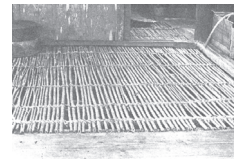
沖1_p013-ヒンブン2



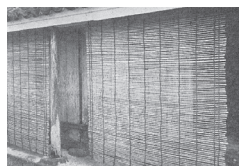
沖1_p014-チニブ



沖1_p014-アンヌミ



沖1_p015-インマヌユカ



沖1_p016-スندگان



沖1_p017-トゥージ



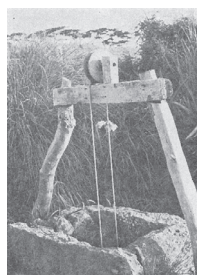
沖1_p018-イチタライ



沖1_図002-カー



沖1_p019-カー



沖1_p020-クルマ



沖1_p021-ツリウイ



沖1_p022-ンブル



沖1_p023-トタン張りのつるべ



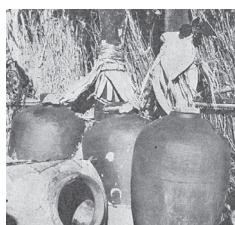
沖1_p024-イシドーニー



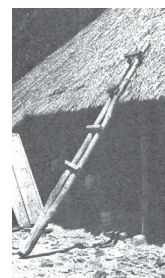
沖1_p024-イモアライ



沖1_p025-ハンドゥー



沖1_p026-ミズトリ



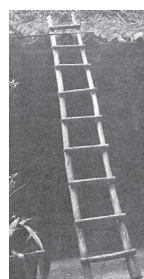
沖1_p027-ハシ1



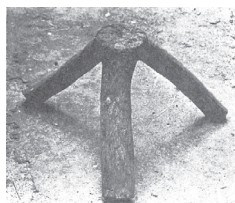
沖1_p027-ハシ2



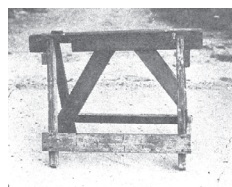
沖1_p028-ハシ1



沖1_p028-ハシ2



沖1_p029-キーンマ1



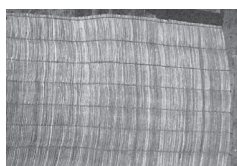
沖1_p029-キーンマ2



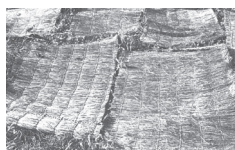
沖1_p030-ニクブク



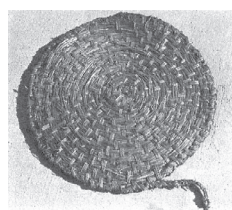
沖1_p031-クファミシル



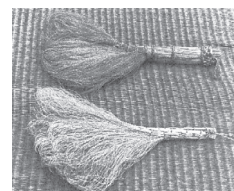
沖1_p032-アダンバムシル



沖1_p033-トゥマ



沖1_p034-シート



沖1_p035-ブバナボーツ



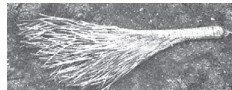
沖1_p036-バラフタボーチ



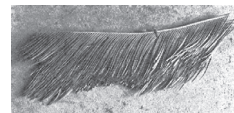
沖1_p037-ポッチ



沖1_p037-タケノハボーチ



沖1_p037-クバノハボーキ



沖1_p039-スティチボーチ



沖1_p039-ワラボーチ



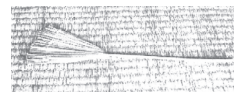
沖1_p038-ヤンメーボーチ1



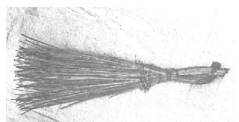
沖1_p038-ヤンメーボーチ2



沖1_p040-クバジョジ



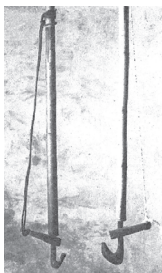
沖1_p041-ヘークルサー



沖1_p041-バイクッスボーチ



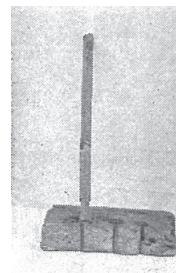
沖1_p042-カキザー



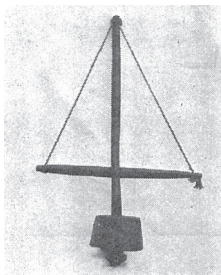
沖1_p043-ガキジャー1



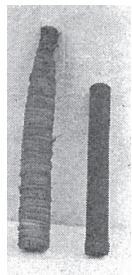
沖1_p043-ガキジャー2



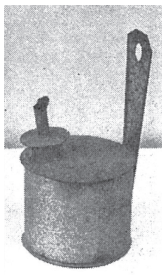
沖1_p044-ビーウス



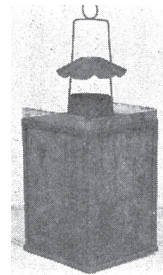
沖1_p044-火おこしの錐



沖1_p044-ヒフキダケ(右)と火縄



沖1_p045-シジチ



沖1_p045-カクランプ



沖1_p045-ホヤランプ



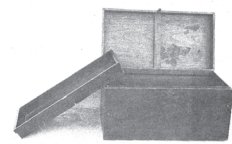
沖1_p046-ビーモーシレーミ



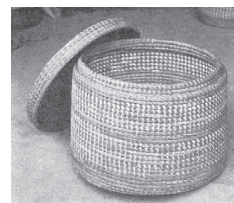
沖1_p047-テーランプ



沖1_p048-グリーンタンシ



沖1_p049-ヒチ



沖1_p050-マーグ

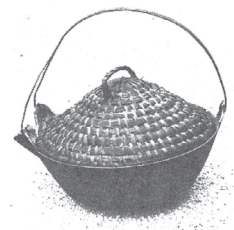
生活用具・衣食住【調理用具】



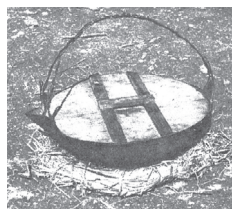
沖1_p051-ミジクブサー



沖1_p052-クサカチ



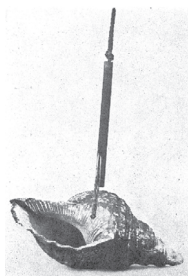
沖1_p053-フナービー1



沖1_p053-フナービー2



沖1_p054-シンメーナービ



沖1_p055-ブラヤクン



沖1_p056-カマンタ1



沖1_p056-カマンタ2



沖1_p057-カマンタ1



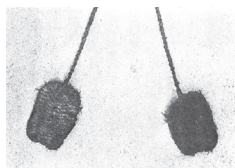
沖1_p057-カマンタ2



沖1_p058-カマンタ1



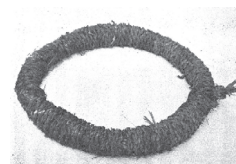
沖1_p058-カマンタ2



沖1_p059-ナビトルフツ



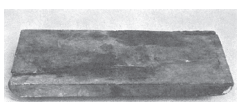
沖1_p060-ナビスク1



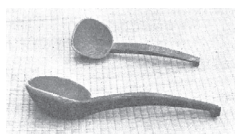
沖1_p060-ナビスク2



沖1_p061-マンツァー



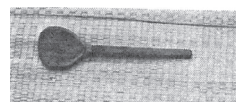
沖1_p062-イヤチダー



沖1_p063-ナビゲー



沖1_p063-アッカイ



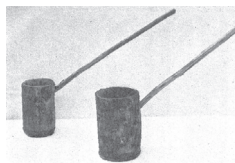
沖1_p064-イーゼー



沖1_p064-イビラ



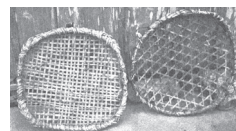
沖1_p065-ペーラ



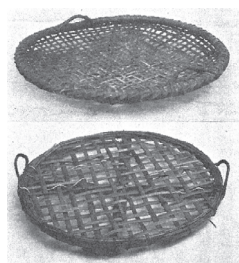
沖1_p066-サシ



沖1_p067-シルハチ



沖1_p068-ムチンプサー



沖1_p069-ムチンプサー



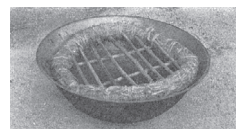
沖1_p070-クシンキ1



沖1_p070-クシンキ2



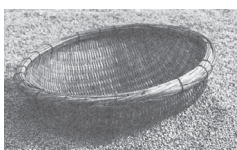
沖1_p071-クシチー



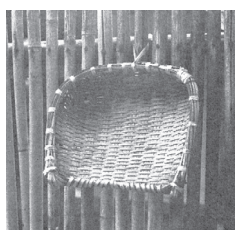
沖1_p072-ハジ1



沖1_p072-ハジ2



沖1_p073-ソーキ



沖1_p074-マドッピ



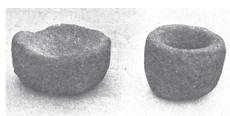
沖1_p075-マグ



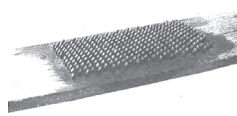
沖1_p076-ワサーボーチャー



沖1_p076-イーキトゥイムヌ



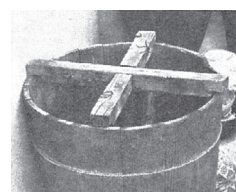
沖1_p077-ガイスツジャー



沖1_p078-シムクジシリ



沖1_p079-ヒチウーシ



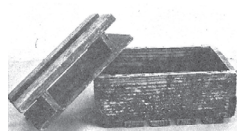
沖1_p080-アジマー



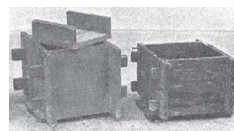
沖1_p080-トーフウーキ



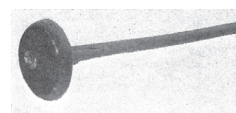
沖1_p081-トーフバク



沖1_p082-トーフバク1



沖1_p082-トーフバク2



沖1_p083-スタティキニ



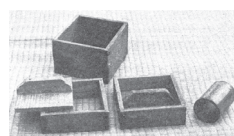
沖1_p083-スタティヌファー



沖1_p084-ニープ



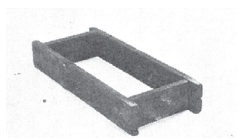
沖1_p084-ビシンコイタ



沖1_p085-チチヌジ



沖1_p086-カマブクウーシ



沖1_p086-カマブクイタ



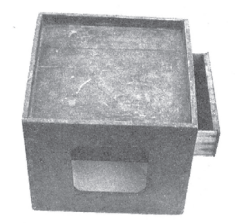
沖1_p087-タネー



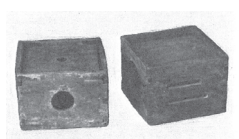
沖1_p088-ミミナブ



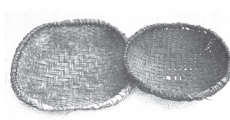
沖1_p089-ウメーシタティ



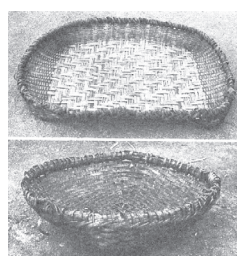
沖1_p090-タカウジン



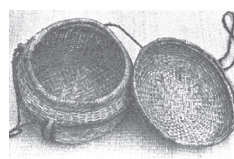
沖1_p090-サカズキダイ



沖1_p091-ヒラバーキー



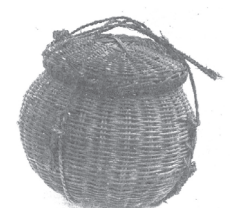
沖1_p092-ヒラバーキー



沖1_p093-イーディル



沖1_p094-フタディル



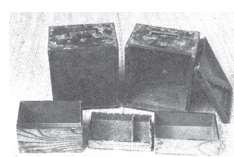
沖1_p095-ピラフ



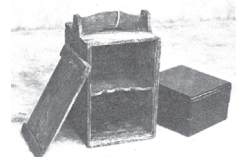
沖1_p096-サギゾーキー



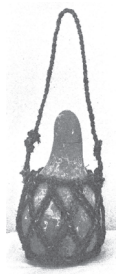
沖1_p097-アシーオケ



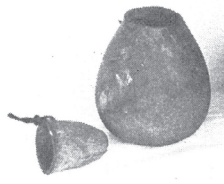
沖1_p098-ビントー



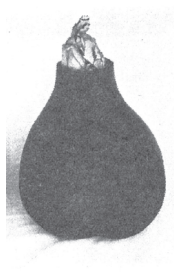
沖1_p099-ジュウバクノシー



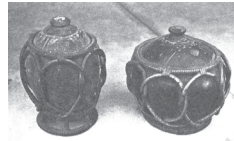
沖1_p100-カナバイ



沖1_p101-サニムンイレ



沖1_p101_チャイレ

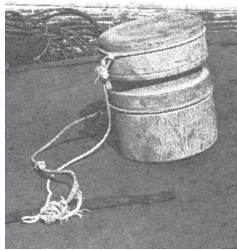


沖1_p102-ヤーシグワー

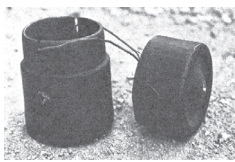


沖1_p103-ブクブクチャセン

生活用具・衣食住【喫煙用具】



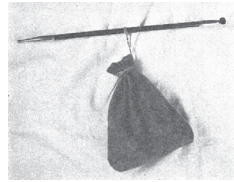
沖1_p106-キーフゾー



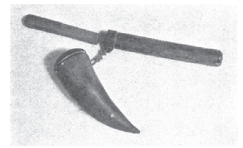
沖1_p106-ウミフゾウ



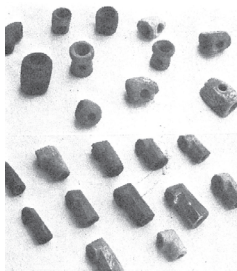
沖1_p104-マーランブゾー



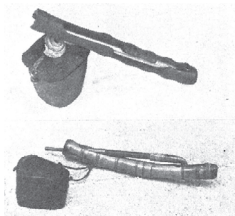
沖1_p105-フジャウ



沖1_p105-シノーブツゾー



沖1_p107-チシリ



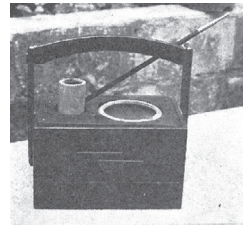
沖1_p108-スツブン



沖1_p108-タバクブン



沖1_p109-タバクブン

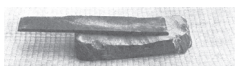


沖1_p109-タカタバクブン

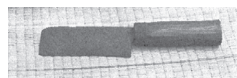
生活用具・衣食住【食品貯蔵具】



沖1_p110-ビツナー



沖1_p111-チリバン



沖1_p111-チリバンボーチャー



沖1_p112-ジューキ



沖1_p113-ユナバーキー



沖1_p114-ツツカサ



沖1_p115-ガイズ



沖1_p116-ズーワードウツクイ



沖1_p117-ショツキダナ

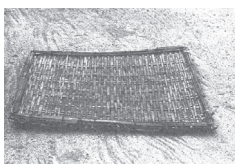


沖1_p118-モノホシ1

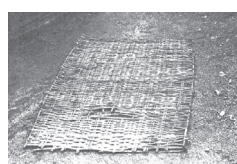
生活用具・衣食住【着用具】



沖1_p118-モノホシ2



沖1_p119-ダキファーザー



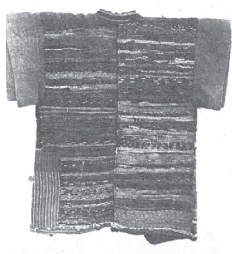
沖1_p119-ハズ



沖1_p120-フクター



沖1_p121-フクター



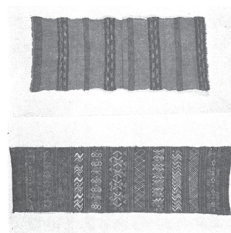
沖1_p122-ウンジョウ



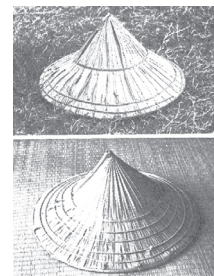
沖1_p123-ドッタティ



沖1_p124-バサー



沖1_p125-ティサージ



沖1_p126-クバガサ



沖1_p127-クバガサ1



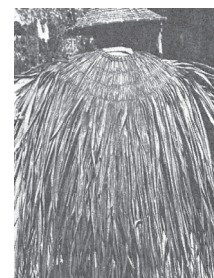
沖1_p127-クバガサ2



沖1_p128-ムンジュルガサ



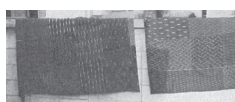
沖1_p129-スルヌ



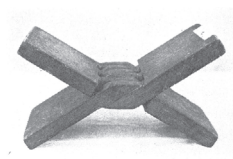
沖1_p130-クバンヌー



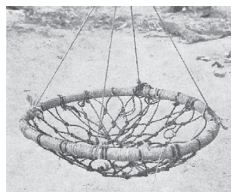
沖1_p131-シジンヌ



沖1_p132-フクターウードゥ



沖1_p133-マックウ



沖1_p134-アミナゲ

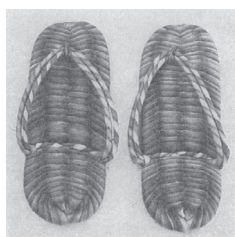


沖1_p134-ヨイサー

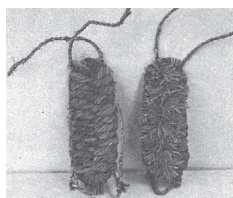
生業・運搬【農具】



沖1_p135-ワカサマチアシヤ



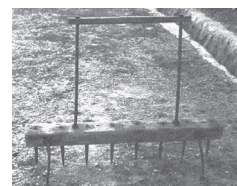
沖1_p136-アダンハサバ



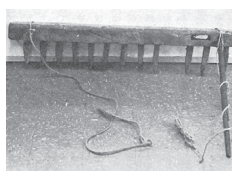
沖1_p137-フダミ



沖1_p137-フツ



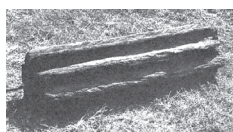
沖1_p141-マーガ



沖1_p142-クルバシー



沖1_p142-フツァーシ



沖1_p143-クルバシヤー



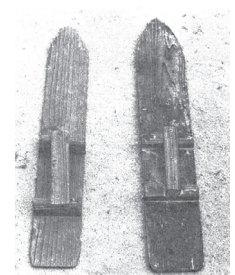
沖1_p144-ビキイシ



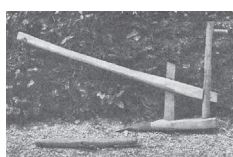
沖1_p145-マーカ



沖1_p146-ターノーサー



沖1_p147-スライタ



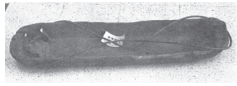
沖1_p148-シマイザイ



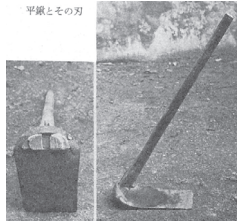
沖1_p149-ウシヌヤマ



沖1_p150-タースキヤマ



沖1_p151-フモーリ



沖1_p152-ファグエー



沖1_p153-スマベー



沖1_p154-ミマター



沖1_p155-タマター



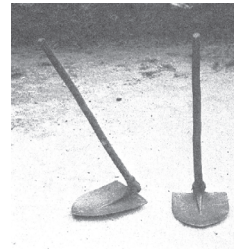
沖1_p156-ミーフガー



沖1_p157-ミングエー



沖1_p158-キーバイー



沖1_p159-スコップグエー



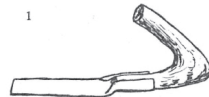
沖1_p160-ウズンピーラ



沖1_p161-フィーラ



沖1_p162-カニピラ



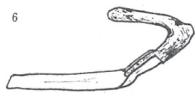
沖1_p162-ヒーラ



沖1_p162-ピラ



沖1_p162-ヒラ1



沖1_p162-ヒラ2



沖1_p162-フィーラ



沖1_p162-マーピラ



沖1_p163-ティブク



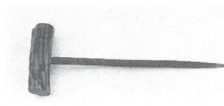
沖1_p164-アサンザニ



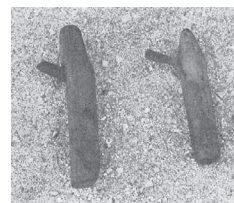
沖1_p164-グーシ



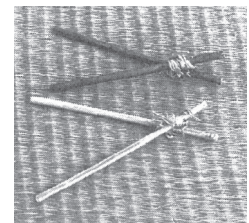
沖1_p165-カノーシ



沖1_p165-シーピラ



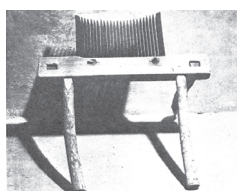
沖1_p166-イララ



沖1_p167-クーダ



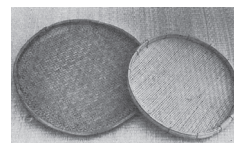
沖1_p167-フドース



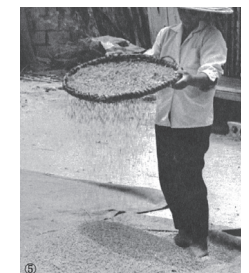
沖1_p169-シンバ



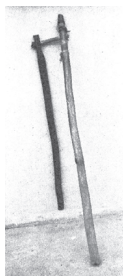
沖1_p170-アラドゥラチ



沖1_p184-ユイ



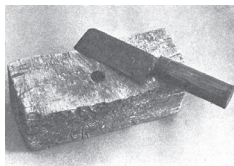
沖1_図004-ンニユイ



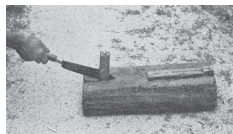
沖1_p171-フーマボウ



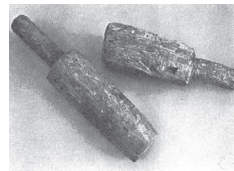
沖1_p172-ムジシリイシ



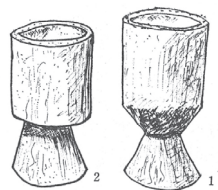
沖1_p173-タンナーワヤー



沖1_p174-ヤンブイキリ



沖1_p175-ユクティ



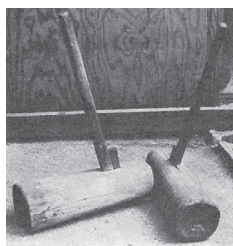
沖1_p176-ウーシ



沖1_p177-ウーシ



沖1_p179-アージュン



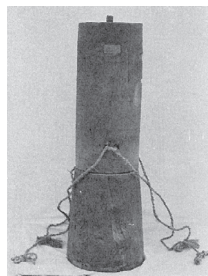
沖1_p180-ガークー



沖1_p181-メーハキジチ



沖1_p181-カティカバ



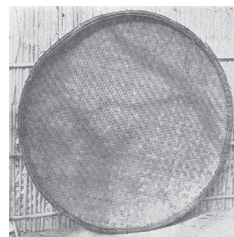
沖1_p182-シリウーシ



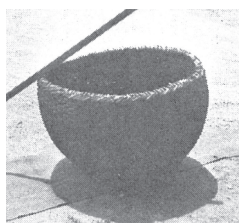
沖1_p183-シリウーシ



沖1_p185-ミーゾーキ



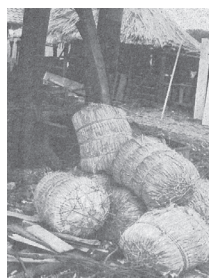
沖1_p186-ウブスギ



沖1_p187-ムミゾーキ



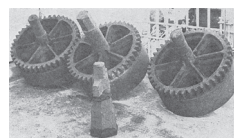
沖1_p187-ンニカチャーサー



沖1_p188-ターラ



沖1_p189-サーターダル



沖1_p190-サーターグルマ



沖1_図006-シラ



沖1_p191-シラ



沖1_p192-サバニ



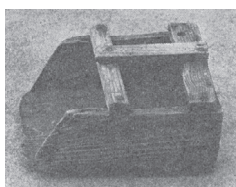
沖1_p193-ハギンニ



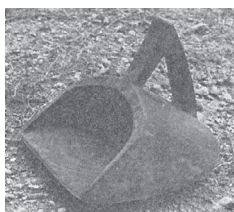
沖1_p194-フー



沖1_p195-ウェーク



沖1_p196-デンマユートゥイ



沖1_p196-イトマンユートゥイ



沖1_p197-アンカナ

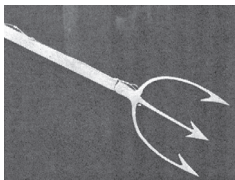


沖1_p197-イチャビ

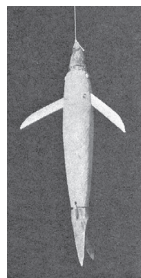
生業・運搬【漁具】



沖1_p198-トゥジャ



沖1_p199-サーラトゥジャ



沖1_p199-サーラウジ



沖1_p200-モリ



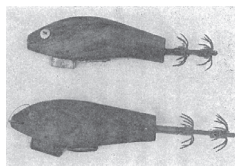
沖1_p201-ウジム



沖1_p202-カシジャー



沖1_p203-カキバリ



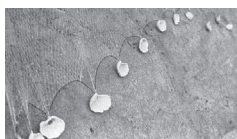
沖1_p204-イカビジュ



沖1_p203-ウーチバイ



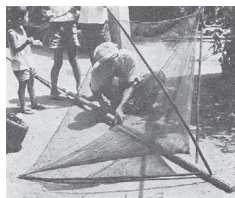
沖1_p205-タカヤーマ



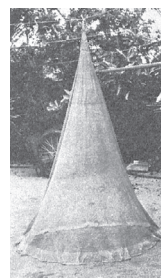
沖1_p206-クスクアミ



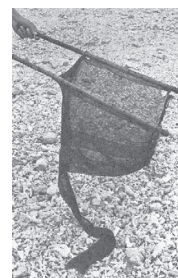
沖1_p207-ワリジケ



沖1_p208-バイアミ



沖1_p209-チチョウアミ



沖1_p210-サディ



沖1_p211-ヤンダー



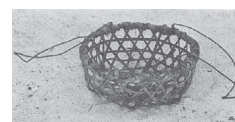
沖1_p213-ウミディール



沖1_p212-ムンダニディール



沖1_p213-テイルグワ



沖1_p214-キンパーキ1



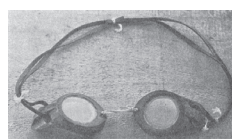
沖1_p214-キンパーキ2



沖1_p215-ウミバーキ



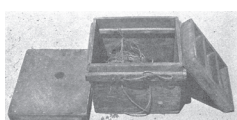
沖1_p215-ヘーナーカグ



沖1_p216-ミーカガン



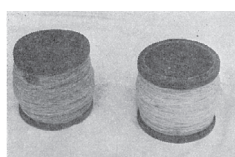
沖1_p217-タマワーキ



沖1_p219-ウミバク



沖1_p220-ナーマチ



沖1_p220-カウ



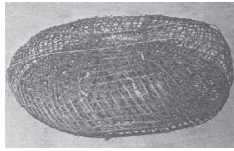
沖1_p221-ウミボーチャー



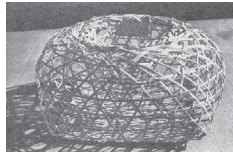
沖1_p221-ティーブイ



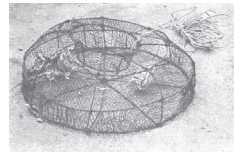
沖1_図009-アニク



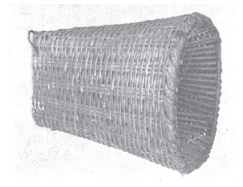
沖1_p222-ティール



沖1_p222-タマンパーキ

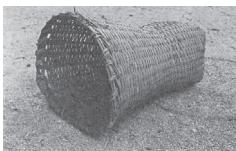


沖1_p223-アニク1

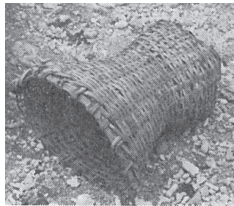


沖1_p223-アニク2

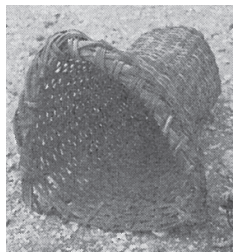
生業・運搬【山樵用具】



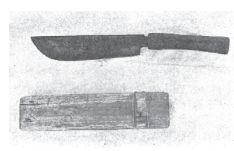
沖1_p224-ウルワイチズカ



沖1_p224-チズカ



沖1_p224-ティルルー



沖1_p225-ヤマカタナ



沖1_p226-ウース

生業・運搬【狩猟用具】



沖1_p227-タイビキ



沖1_p228-ヤマシシヤイ



沖1_p229-サギヤイ

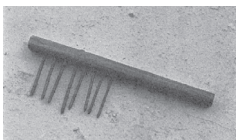
生業・運搬【加工用具】



沖1_p230-ワランシビトゥヤー



沖1_p231-ワランシビトゥヤー



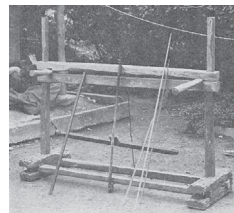
沖1_p231-ムギワラサバチ



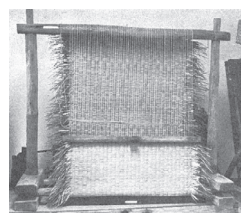
沖1_p232-トゥイグチ



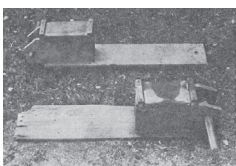
沖1_p233-アンダシブヤー



沖1_p234-ムッスウチヤーマ



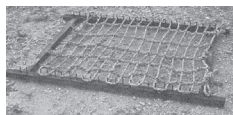
沖1_p235-ムッスウチヤーマ



沖1_p236-イーワヤー



沖1_p237-オーダーアミヤーマ



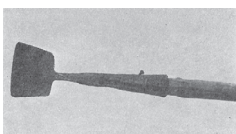
沖1_p238-オーダーツクヤー1



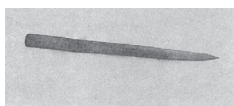
沖1_p238-オーダーツクヤー2



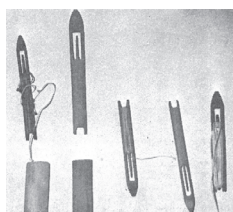
沖1_p239-タンブーヤーマ



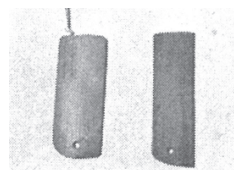
沖1_p240-フコーン



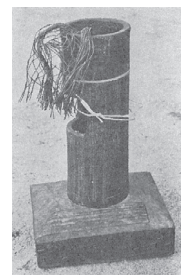
沖1_p240-タケベラ



沖1_p241-アグイ

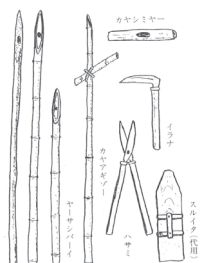


沖1_p241-アギタ



沖1_p242-アンスキヤマ

生業・運搬【屋根葺き用具】



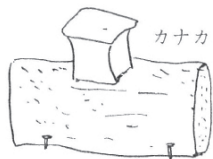
沖1_p243-ヤネフキドウ



沖1_p243-ヤーサンバーイ



沖1_p243-カヤシミヤー



沖1_p246-カナカ

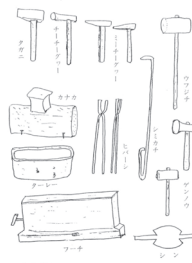


沖1_p246-チーチーグワー



沖1_p246-ミーチーグワー

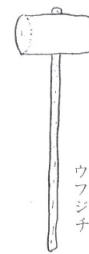
生業・運搬【鍛冶屋用具】



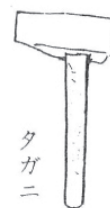
沖1_p246-カジドウ



沖1_p246-フーチ



沖1_p246-ウフジチ



沖1_p246-タガニ



沖1_p246-シミカチ



沖1_p246-ターレー



沖1_p246-シン

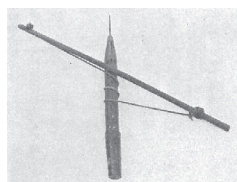


沖1_p246-ヒバーシ

生業・運搬【その他職人用具】



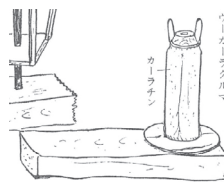
沖1_p248-クルマイリ



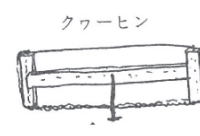
沖1_p248-トイリ



沖1_p250 - ミーガーラグルマ



沖1_p250 - ウーガーラグルマ



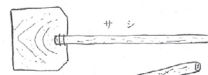
沖1_p250 - クワーヒン



沖1_p250 - ナディ



沖1_p250 - ジョウジ



沖1_p252 - サシ



沖1_p252 - サラ



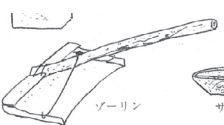
沖1_図008-ユシ



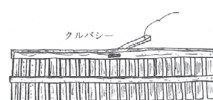
沖1_p253 - ユシ



沖1_図008-ゾーリン



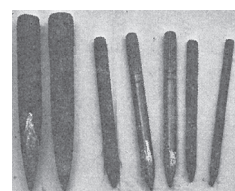
沖1_p252 - ゾーリン



沖1_p252 - クルバシー

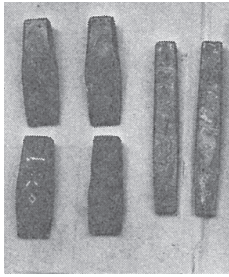


沖1_p253 - ナービ

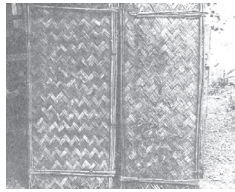


沖1_p254 - スミ

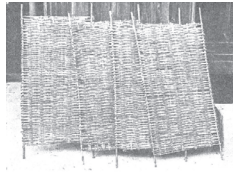
生業・運搬【製糸用具】



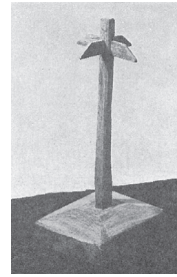
沖1_p254 - 石イヤ



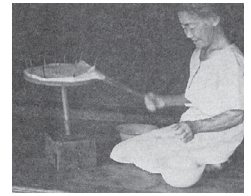
沖1_p255 - ハージヤ



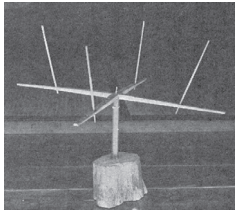
沖1_p255 - ムシグワのハジ



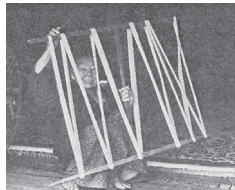
沖1_p256 - チーシー



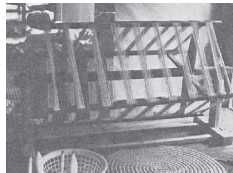
沖1_p256 - メーディーシー



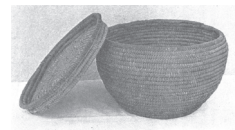
沖1_p257 - カジマヤー



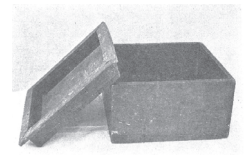
沖1_p258 - カシギー



沖1_p258 - クイメー



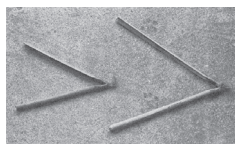
沖1_p259 - ティーツカサ



沖1_p259 - サスキ



沖1_p260 - ウンゾーキ



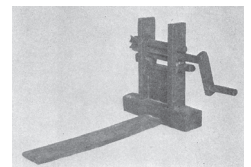
沖1_p261 - イエービ



沖1_p262 - ツンツヤマ

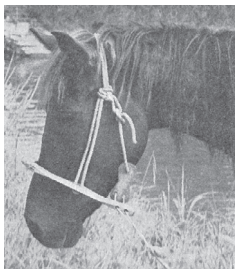


沖1_p263 - バフ



沖1_p264 - ハナシ

生業・運搬【畜産用具】



沖1_p266 - ムーゲー



沖1_p265 - ハナ



沖1_p267 - ヤギノクビワ



沖1_p268 - クチクイ

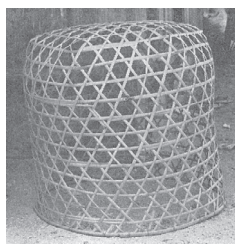


沖1_p269 - トーニ

生業・運搬【交易用具】



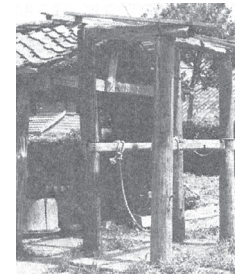
沖1_p270 - フール



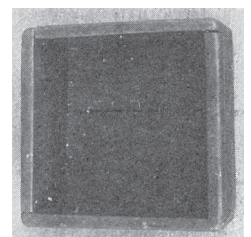
沖1_p271 - ミーバーラー



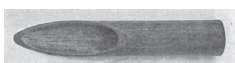
沖1_p272 - ハン



沖1_p273 - ウマのヤーマ



沖1_p274 - チョウバン



沖1_p275 - トーカチ



沖1_図012-ハカイ



沖1_p276 - ハカイ

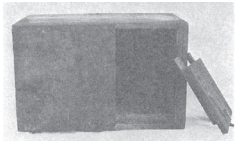


沖1_p276 - チンドー



沖1_p277 - ジンディール

生業・運搬【運搬具】



沖1_p277 - ジンバク



沖1_図006-バシヤ



沖1_p278 - ノサ



沖1_図016-マータ



沖1_p279 - マータ



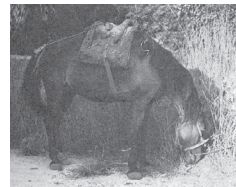
沖1_p280 - ヤンバラーフニ



沖1_p281 - ニーサギブニ(模型)



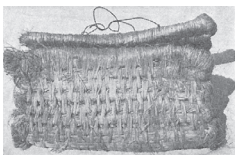
沖1_p283 - フラ



沖1_p283 - ウチナグラ



沖1_p284 - シチャンラ1



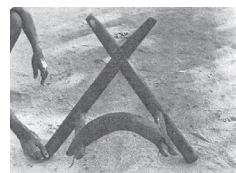
沖1_p284 - シチャンラ2



沖1_p285 - バジャグラ



沖1_p286 - フラ



沖1_p287 - ヤマグラ



沖1_p287 - カン



沖1_p288 - ウシグラ



沖1_p289 - ハイボウ



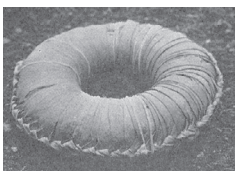
沖1_p289 - トウガイボウ



沖1_p290 - バーキ



沖1_図013-工事バーキ



沖1_p291 - ガンシナ



沖1_p293 - ミミューチャー



沖1_p293 - ミミフタバキ



沖1_p295 - ティール1



沖1_p295 - ティール2



沖1_p295 - ティール3



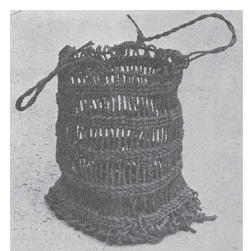
沖1_p297 - ティール



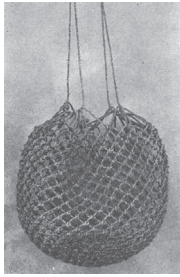
沖1_p298 - ティール



沖1_p299 - アンツク



沖1_p300 - アンディル



沖1_p301 - アンディラ



沖1_p302 - ビラザヤ



沖1_p302 - ティーアン

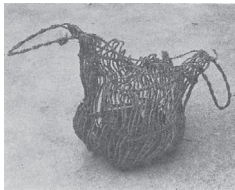


沖1_p303 - ターラ

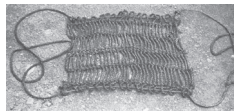


沖1_p304 - ターラゲー

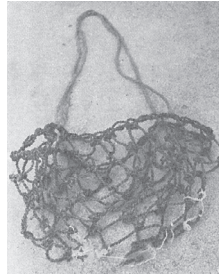
生業・運搬【旅行用具】



沖1_p304 - ツンダーラ



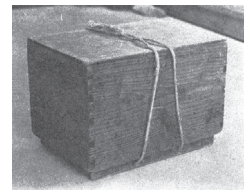
沖1_p305 - オーダ



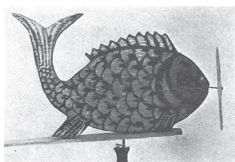
沖1_p306 - シープ



沖1_p307 - シープ



沖1_p308 - ブンダイ



沖1_p309 - カジバタ



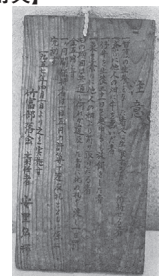
沖1_p310 - プラ



沖1_p311 - カニ



沖1_p315 - ハーマイフダ



沖1_p316 - フダ

団体生活・信仰【団体生活用具】

団体生活・信仰【信仰用具】



沖1_p317 - サイ



沖1_p318 - スキ



沖1_p319 - ヒノカミ



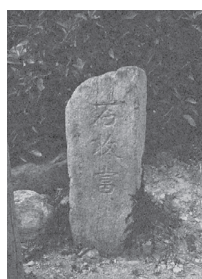
沖1_p320 - ウタキ



沖1_p321 - ビジル



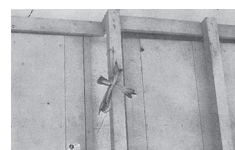
沖1_図001-イシガントー



沖1_p322 - イシガントー



沖1_p323 - ムーチーノマヨケ1



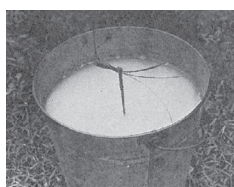
沖1_p323 - ムーチーノマヨケ2



沖1_p324 - ムンヌキムン



沖1_p325 - アクゲシ



沖1_p326 - サン



沖1_p327 - ゲーン



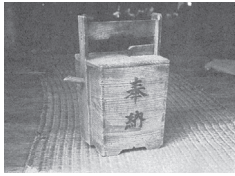
沖1_p328 - グシチサン



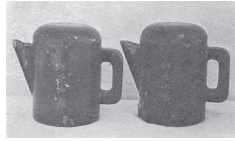
沖1_p329 - シーシ



沖1_p330 - シーサー



沖1_p331-バタス1



沖1_p331-バタス2



沖1_p332-ユヌシ



沖1_p332-ツヌザラ



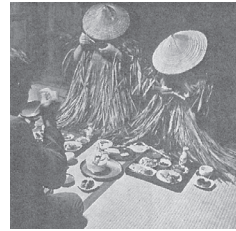
沖1_p333-クルウコウ



沖1_p334-ビンシー



沖1_図008-マユンガナシ



沖1_p335-マユンガナシ



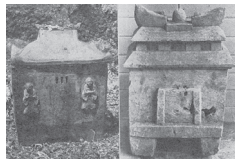
沖1_p336-パントウメン



沖1_p337-カナチオーラセー



沖1_p338-ガン



沖1_p339-ジーシガミ



沖1_p340-ジーシガミ



沖1_p341-ジーシガミ

沖縄地域の特色・民具の特徴

上江洲均

琉球列島は九州の南西に位置し、薩南諸島と台湾との間に弧状をえがいて点在する島々からなる。古くは南島なんとうといい、琉球諸島りゅうきゅうしよとう、あるいは琉球弧りゅうきゅうことも呼ばれる。1609 年の薩摩侵攻後、王国の北部に属する奄美諸島を割譲し、以来奄美は鹿児島に属している。沖縄県は、県庁所在地の那覇市を中心とする沖縄諸島、南西に位置する宮古諸島、さらに南西に延びる八重山諸島からなる。しかしながら奄美諸島は、行政上鹿児島県に属するとはいえ、島々の民俗文化は沖縄県と共通する点が多い。民具の共通性は当然であり、名称についても共通するものが多くを占める。したがって、ここではたえず奄美・沖縄県を比較しながら進めることにする。「奄美・沖縄県」という対置ではなく、「奄美・沖縄・宮古・八重山」という四諸島を並列にし、民具の傾向や名称の特徴を押さえたうえで進めることにしたい。

1609 年の薩摩侵攻以後の沖縄（当時は琉球国）は、「日中両属」の時代を迎えるわけであるが、制度的にも文化的にも両国の影響を受ける結果となった。奄美の島々では沖縄以上に鹿児島の文化が流入し、今日にいたっている。

言語学では、アイヌ語を除く日本方言は二大別でき、その一つが琉球語であるとしている。それによると、琉球語は四つの諸島、すなわち奄美・沖縄・宮古・八重山に分かれる。民具名称においてもその特徴が如実に表れる。この四つの諸島は、それぞれに小さな文化圏を形成している。それらをまとめる形での南島圏の標準名があるとすれば、それはどの諸島の言葉か、ということがまず問題になる。歴史的にみて王都である首里、港湾都市である那覇が数百年の間、琉球の政治・経済・文化の中心であった。したがって、現在の那覇市を一応の中心として、地方名の標準とすることが考えられる。

ただし、那覇市になく地方にのみ存在する民具もある。そのような場合は地方名が当然標準となることを確認して進める必要がある。

ただ、現在の沖縄県は、本土復帰して 40 年以上が過ぎたが、ここにきて「沖縄ことば」の再生運動に見られるように、みずからのアイデンティティーを求める動きが大きくなりつつある。「沖縄ことば」をそれぞれの地方の「シマことば」あるいは「シマぐち」継承運動のなかに、民具が一役買われている部分がある。それはテキストのなかで民具を図示し、それぞれの地方名を付して子どもにも分かりやすい解説を加えたもので、今後の民具名称の存続や若い人たちが民具研究を続けていくため、一つの示唆を与えている

ように思う。

1. 衣食住

1) 住まい

沖縄・奄美の屋敷は、台風とそなえて石垣や生垣、屋敷木で囲われている。屋敷木は地方により違いが認められるが、島によってはガジュマル（榕樹ようじゆ）が好まれ、17、8 世紀ごろからはフクギ（福木）が植栽されるようになった。これらは台風にも強く、潮風にもよく耐える性質がある。その他に、用途の大きい竹（ホウライチク（蓬萊竹））や仏桑華・ユウナの木・ゲッキツなどを植えた地方もあった。

カチ（垣）

屋敷の門を入ると正面に石積み、またはチニブ（網代）垣、生垣による中垣（目隠し垣）がある。これをヒンプンという。中国の「屏風」垣びようぶの影響を受けたとされ、いわゆる邪鬼をはらう意味があるといわれる。石、竹、生垣をまとめるとカチ（垣）である。チニブには目の詰まった編み方と粗い編み方がある。細かい方をチニブ（またはチヌブ）、粗い網代をアンヌミという。

屋敷は南向きを基本とし、屋敷内での優位は東方であり、屋敷神は東に、畜舎は西に配置している。屋敷には望ましくない場所に位置することがある。T 字型道路の突き当たりにある屋敷では、魔物が侵入するおそれがあると考えられている。そこへ「石敢當」の文字を刻んだ石を立てる習わしがある。中国の古い習わしが伝わったもので、魔物を祓う力をもつ靈石とされている。

シーサー（獅子）

屋根にシーサー（獅子しし）を置く習俗も沖縄独特である。その淵源も中国に求められるが、王国では城門や宮殿の屋根に、あるいは王御殿（王家の墓陵ぼりよう）に置いているのは、魔除けであると同時に権威の象徴でもあった。

裕福な家は礎石に柱をのせ、柱と柱を貫木でさして丈夫にした家屋なので「貫木屋ぬきぎや」といい、一般の人の家は地面に穴を掘って柱を立てた穴屋であった。15 世紀の前半に来島した中国人柴山は、「巢居穴処」と記録している。巢居穴処とは、先史時代からつづく堅穴住居のような家、つまり穴屋ではなかったかと思われる。16 世紀前半の首里の都も瓦屋根

は少なく、王宮殿でさえ板屋根であった。

民家に瓦屋根が許されるようになったのは、1889（明治22）年であり、その後地方にも瓦屋根が普及した。民家の屋根型は寄棟造りが一般的で、入母屋造りは仏閣に多い。古くは切妻造りも多かったことだろうと思われるが、近年では住まいとしての事例はほとんど見られない。

母屋の間取りは、普通の民家では田の字型が多い。表東側を一番座、西側を二番座と呼ぶが、一番座は床の間すなわち客間であり、二番座は仏間である。裏座は寝室で、二番裏座にはジール（いりり）を設けており、妊産婦のいる家では産室となり、冬には老人の暖をとる部屋にもなった。

台所は別棟であったが、瓦葺きになって母屋と繋がるようになった。台所には竈^{かまど}があり、かつては三個の石を鼎^{かなえじょう}状に置いたものであったが、土竈になり、煉瓦の改良竈へ、さらに石油コンロ、ガスコンロへと進んだ。三個の竈石は、火の神の常在する場所であり、しかし竈の変化により、小さな三個の石で火の神を象徴するようになった。現在の都市生活の台所空間では、小さな香炉を置いて火の神の存在を表象している例が多い。

ショウジ（障子）

障子には、琉球竹を砕き、のべ板状にして網代編みしたもので、部屋の仕切りとした。一方貫屋（礎石に柱を立てた家）では紙張りのアカイ（明かり取り障子）がある。両方を一緒にして「ショウジ」とまとめることができる。

ユカ（床）とシダイ

家屋の床は、細い木を編んだものをインマヌユカといい、竹のある地方では竹床であった。その上に藁^{わら}・藁^{むしろ}・藁^{いぐさ}・藁^{むしろ}、畳を敷いた。鉄筋コンクリートの家になると窓にはカーテンが掛かるようになるが、以前の家屋ではスダレがよく用いられた。日よけ、風よけ、目隠し、ゴミ除けの役目をする。先島地方ではスダレというが、那覇でのシダイでまとめることができる。

カー（井戸）

水の問題は大きい。わき水の井戸を中心に集落が形成された。その井戸をカーという。泉カー、樋をかけたヒージャー、石灰岩の窪みへ下りて水汲みをするウリカー、筒井はチンガーなどいろいろの形態の井戸がある。水を汲み上げる容器がチー（つるべ）である。古くはクバ（葵^{ひらう}蒲）の葉で作ったものをクバヂーという。深井戸の滑車は木製であったが、それは単にクルマという。井戸の側に置いてサツマイモ洗いをする石^{いし}盥^{だら}のことをイシドーニという。トーニの語源は「田舟」であり、豚の餌桶もトーニである。

ハンドゥー

水^{みづ}甕^{がめ}をハンドゥーというのは、「半胴」から来ているという。単にミジガーミ（水甕）ともいう。共同井戸から水桶で

運んできて満たすが、立木から雨水を取り入れて甕や壺に溜めて飲み水にする地方もあった。

ハシ（梯子）

一本木に刻みをいれたもの、又木を利用したもの、二本の木に横木を付けたものなどがある。各地でハシ、パシ、パス、パチ、フウシ、ハチーなどというが「ハシ」でまとまる。

アシンマ（踏み台）

屋外でよく用いられた踏み台である。キンマ（木馬）、アシンマ（足馬）という。乗馬を連想させる名称である。

ニクブクとムシル

敷物は藁^{いぐさ}草や稲ワラ、アダン葉などで作った。稲わらだけで作るニクブクは、九州にも類似するものがあり、さらには朝鮮半島まで見ることができる。敷物であるとともに物干しにも利用する。ニクブー、ニンブー、ヌフフ、ニク、ニーブ、ニヌブグ、ミナブなど島々の呼称が多少異なるものの、「ニクブク」で統一できる。藁^{むしろ}草やアダン葉の^{むしろ}莖は、縦縄（糸）によって、骨の固い莖や敷莖にもなった。全体的に「ムシル」（莖の意）でまとまる。敷物の仲間で板の間で用いる円座は、インザ系とシキナ系に分かれるが、円座を意味する「インザ」でまとめられる。

ホーチ（簀^{ほうき}）

家の内外で使用する場所による違いがある。内簀と外簀である。内簀は稲わら、尾花を素材とする例が多いが、他にもクバの葉、クロツグの繊維などでも作る。外簀は竹や木の枝を素材とする。

名称は素材を冠してバランポーチ（尾花簀）、ブバナポーツ（同上）、ワラシンブーポーチ（藁^{むしろ}芯簀）などと呼ぶ。各地での呼称は、ホーチ、ホーキ、ハウツ、パウツ、ポーツ、ポーキ、ポーチ、ポッチ、フッティーなどあるが、那覇の「ホーチ」でまとまる。

オージ（扇・団扇）

風をおこす扇や団扇がある。祭りに用いる団扇については「ウチワ」の名称がある。しかし普段は扇も団扇も「オージ」である。素材としてクバ（葵^{ひらう}蒲）の葉を用いるので「クバオージ」という。

ヘークルサー（蠅^はたたき）

棕櫚の枝葉などの植物で作る。ヘークルサー（蠅^は殺し＝沖縄島）、パイクスボーチ（蠅^は殺し簀＝石垣島）、ハイウティムヌ（蠅^は打つもの＝与那国島）などの名が聞ける。ここでは沖縄島の呼び方を採用して「ヘークルサー」とした。

カキジャー（自在鉤）

家屋の内外において、物を吊り下げる鉤をカキジャーとい

う。他にガーチ、ガズ、ギャッキヤなどという地方もある。囲炉裏に吊るす自在鉤は、ガフ、ガフザー、ガークー、ガーチ、カックなどという。これらをまとめて「カキジャー」とした。

灯火用具

松の脂木を燃やす金網がある。これをアマラという。ブリキ製の石油ランプを「シジチ」というのは、中国語に由来する。その石油ランプを収める四角のガラス容器をカクランプという。総称して「ランプ」が標準名称になっている。

タンシとケー

室内の大型家具といえば、簞笥や箱型の櫃である。簞笥をタンシといい、櫃は大型の漆塗りをケー、小型をヒチという。タンシでは、上部にグリージン（御霊前）、下部を戸棚にしたものを穴屋構造の小規模の農家では置いていた。都市の名家ではケー、農村の裕福な家庭ではヒチが嫁入り道具であった。

茅製容器

マージ、マグは茅で円筒形に作った女性の肌着や布地入れ。地方の娘の嫁入り道具であった。

クサカチ（熊手）

薪は、山の少ない地方では、枯れススキや灌木、ソテツ葉などを日常的に燃やした。都市地区では北部の方からやってくる薪を購入した。松やシイ材は火持ちが良い。一定の大きさの竹の輪をつくり、その輪一杯に割り薪をさして束をつくる。都市近郊では、松の葉をかき集めて販売していた。手製の熊手状の用具をクサカチというのは「草掻き」の意である。

2) 食

稲作は島々にいたるまで広く行われていたが、多くの庶民は、雑穀や根菜類（山芋・里芋・田芋）を食用していた。十七世紀の初め、野国総管により中国から導入された甘藷が広く栽培され、主食の座を占めるようになった。台風や旱魃・流行病等による飢饉常襲地帯であった琉球にとって、甘藷は救世主的存在であった。甘藷はかつて「唐芋」と呼ばれた。日本本土へも琉球から伝わった「芋」なので「琉球イモ」というべきところ、「薩摩芋」と呼ばれて今日にいたっているのは、当時の国の枠を示している。

芋は煮て食するだけでなく、生の芋をおろし金に摺って澱粉を採り、ちょっとしたご馳走として、あるいは保存食として、利用価値の高い食品となった。

行事食として欠かせないのが豆腐である。水にひたした大豆を石臼で碾き、桶のなかから木綿袋で粕を取り除いて残った汁を大鍋で煮る。それにニガリを加えるというのが沖縄の豆腐製造の手順である。そうして凝固した状態の豆腐をユシドーフといい、少しの調味料を加えるだけで、手軽にとれる

蛋白源として広く親しまれた。箱に入れて固めた豆腐は、野菜を加えた炒め物（チャンプルーという）にした。沖縄の常番である「チャンプルー」は、豆腐を抜きにしては成り立たないという。またカラサカナの代表が揚げ豆腐である。揚げ豆腐は、行事料理の重箱詰めに欠かせない品である。煮物や炒め物、揚げ物と家庭料理に登場する比率は大きく、豆腐をしのぐ食品はない。

沖縄の料理は、基本的には煮物・蒸し物で占められた歴史が古い。いつの時代からか炒め物や揚げ物が多くなった。それは近世期のことと思われるが、今では食文化の一特色をなしている。チャンプルーやイリチーと呼ばれる炒め物は、たとえば「ゴーヤー チャンプルー」のように、今では県外にも知られるようになった調理法である。

重箱料理に欠かせないもう一つは、昆布である。北海道産の昆布をより多く食用しているのが沖縄県だといわれている。それは17、8世紀以後、中国への貿易品として取り扱った歴史に関係があるといわれている。昆布も煮物や刻み昆布の炒め物として家庭でもよく食されている。

肉食といえば、これも沖縄の食の特性である。王府では豚や山羊の飼育を奨励しており、特に養豚が盛んに行われた。しかしその歴史はそう古くはない。豚肉食が一般に普及するのは甘藷が豊富に生産された17、8世紀以後、食料の余剰分で養豚が可能になった後のことである。

ナービ（鍋）

ナビともいう。釜は白米を炊くハガマがあるが歴史が浅く、広く普及したのは鍋であった。鍋は円形の鋳物が多く、鉄鍋が古い。戦後は飛行機材などのジュラルミン製が普及した。また合成金属による取っ手付きの工業製品が広く流通するようになり、今日にいたっている。大鍋のサンメー（三枚）やシンメー（四枚）は、一定の鉄の大きさを表す単位といわれ、大鍋に属する。用途は芋煮用、あるいは多人数の炊き出し用鍋として使用された。普段の食事作りでは鉋付き鍋が普及した。ツル付きなのでチルナービまたはチルカキーといい、手や柄を意味するティーナービー、イーナービーともいう。深い鍋は雑炊や汁物に利用され、浅い鉋付き鍋は揚げ物用に使用されたのでアンダナービと呼ばれた。これらを総称して単に「ナービ」とした。

ヤックワン（薬缶）

鉄製（戦後はジュラルミン製）であるが、古くはホラ貝製があり、それをプラヤクン、プラヤックワンという。ホラ貝製の湯沸かしは、貝塚からの出土品もあり古い民具である。ここでは「ヤックワン」とした。

鍋のふた

ナビヌフタ（鍋のふた）が多いが、カマンタ（釜のふた）系の呼称も割合に聞かれる。藁や茅、板材で作っていることが多い。沖縄で海の動物エイをカマンタと呼ぶのは鍋ふたに似

ていることからきているという。

ナビトウイ（鍋取り）

鍋に付随する民具として、ナビトウイ、ナビシキがある。ナビトウイを八重山地方でナビトルフツというのは、クツすなわち海の磯用わらじに似ていることから付いた呼称である。

マルチャ（まな板）

マナチャ、マナツァ、ンマスタなど島により微妙に違うが、すべて「マナイタ」の転訛である。那覇を中心とする「マルチャ」でまとめられる。竹富島の「種子取り祭」に米や粟を蒸してつくるイバツ（飯初）をのせ、包丁で切り分ける板をイバツダーまたはイヤチダーというのは、「飯初板」の意で、マナイタに分類される。

杓子

お汁用と飯用がある。お汁用には沖縄本島では、ナビゲーまたはシルゲーが多いが、八重山地方でアッカイ、ヒャーニ、スーブエーなど島々による違いがあり、宮古ではキナという。「カイ」や「ケー」は貝殻のことと思われる。現に石垣島のアッカイは二枚貝を利用した杓子も含まれる。飯用杓子をイーゼーやミシゲーというのは「飯カイ」「めしカイ」で、長さ70～80cmのものをイビラというのは「飯ヘラ」である。汁杓子・飯杓子ともにカイは、「貝」ではなく「櫂」の可能性もある。櫂について沖縄では「ウエーク」「ユホ」「ヨー」というので、「カイ（櫂）」という呼称は外来とも思われる。イビラは、日本語の「篋^{へら}」とも考えられるし、沖縄独特の農耕用小型農具「ヘラ」とも思われる。大鍋での炊き出しに、または芋練り用に向いている。芋の握り飯は、芋の皮をむいて食べるよりも上品な食べ方である。

ニーブ（水酌み用柄杓）

瓢^{ひょうたん}箆を縦割りしたものが古くからあり、八重山諸島でベーラ、ヒシャフディラ、サイなどという。クバの葉製、竹製などがある。古い時代ムラの祭りに神酒を管掌する役職があり、その人を「ニーブとり」と呼んだ。

シルハチ（搦鉢）

シルハチという地方とデーファと呼ぶ地方に分かれる。シルハチが多く使われている。

クシチ（甑）

食料を蒸して食べ、あるいは加工する場合、鍋の上に載せる用具がある。蒸し器でくくられるが、その代表的なものが^{こしき}甑である。沖縄本島地方ではクシチ、クシチーといい、宮古地方でクスツ、八重山地方でクスキ、クシンキという。いずれもコシキ系の呼び名である。桶型があるがこれは箱型とともに都会的なもので、古くから島々に見られるものはクバ^{びろう}（葵蒲）やデイゴ、シイの木などの木の幹をくりぬいたタイ

プである。付随するハジ（簀の子）がある。ハジの語源は「波瀬^{はぜ}」と思われるが、他にアマダー（網）、シライ（すだれ）、アガラサー（カステラなどを蒸し上げるもの）などがある。奄美の徳之島でもハズまたはハジという。

ソーキ（丸箆）

台所で使う籠にソーキがある。これは西日本全体的にショウケと呼ばれる物で、中国の「筲箕^{そうき}」に由来すると思われる。韓国でもよく見受けられるもので、「ソクリ」という。沖縄の北部には、片口箕型の野菜洗い籠がある。これを現地でマドゥヒというのは、「真ソーキ」と思われるので、この「ソーキ」にくくりにすることにする。名護市辺りで芋洗いに用いた取っ手付きの籠で、現地ではマグと呼ぶが、茅容器との混同と思われる。この類の籠や^{ざる}箆類をまとめて一般的な「パーキ」でくくる。

ホーチャー（包丁）

料理用の包丁をホーチャーという。料理人を指す場合はホーチュウと呼ぶ。屠^と畜用の包丁はワーサー ポーチャーといい、煙草刻み用包丁はキザン ポーチャーという。カタナという地方もある。

イシウーシグラー（石臼）

小型の石臼は、出汁用小魚搗きや薬草搗きとしてよく見られるが、海の蟹搗きをする地方もある。ガイストツジャーは「蟹つき」のことである。

ンムシリー（芋摺り金）

サツマイモを摺り下ろして澱粉を採る器具をンムシリー（芋摺り）またはンムクジシリー（芋くず摺り）という。八重山地方でアッコンスーカニというのは「芋摺り金」の意である。宮古地方のネートツズカナは「芋とぎカナ」、ンムクジカナは「芋くずカナ」の意である。澱粉は料理の材料になり、保存食としても重宝であった。標準名は「ンムシリー」。

ヒチウーシ（碾臼）

家庭用の碾^{ひきうす}臼は、モチ米粉碾き、豆腐豆（大豆）碾き、雑穀碾きなどに使用される。近代に入って石臼の生産が増え、それにとまって豆腐食も増えたと考えられる。ヒチウーシ（碾臼）、イシウーシ（石臼）、トーフウーシ（豆腐臼）の三つの呼び方があるが、「ヒチウーシ」でまとまる。付随する物ではウーキ（桶）、アジマー（臼を置く十字型の木）がある。豆腐を四角に固める豆腐箱は、やはり「トーフバク」である。名称は各地でほとんど変化はないが、形は千差万別である。統制が無かったことを意味するものか。

醤油関係用具

スタティヤスタジは醤油のこと。スタティキニ（キニ＝攪拌するもの）、スタティヌファー（ファーとは子のこと。粕よけ

の籠)、ニープ(醤油を汲む柄杓)がある。家庭用醤油を製造していた八重山地方に見られる用具。スタティヌファーは、底のある筒状の籠であるが、沖縄には見られない菊底であり、外来の技術である。ニープは瓢箪を利用したもの。胴部に孔をあけており、そこから醤油をくみ取り、口から他の容器に移すもので、古くは首里の酒造所でも使用されたので、古くからの存在が認められる。

菓子型・飯型

食品の加工用の花型や飯型箱がある。落雁菓子をつくるための菓子型をクウシガタという。飯型をチチヌジというのは竹筒型から付けられた名称と思われるが、正方形の箱形もある。結婚式などに用いた。

かまぼこの型

長方形の箱形である。これは先島地方に見られる。カマブクイタ(かまぼこ板)という。これとセットになっている小型の木臼や小杵がある。木臼はカマブクウーシ(かまぼこ臼)の名で呼ばれている。

ターレー(タライ)

料理作りにタライをよく用いる。桶屋の作ったタライはターレーまたはハンジリという。地方にはくり物のタライもある。

アンダガーミ(油脂甕)

食生活の変化により現在の台所から消えた壺である。ラード(豚脂)を入れて台所に吊り下げたもの。製作地の那覇市壺屋ではアンダガーミ(脂甕)と呼んで用途を表し、これが主流の呼び方であり、形態からミニチブ(耳壺)と呼んでいる地方もある。

ウメーシ(箸)

箸をウメーシという丁寧語は、「お+み+はし」からきている。地方ではハシ、パチ、ハチとハシ系が多い。焼き物のはし立てはちゃぶ台の少ない地方には珍しく、竹を幾段にも削ったもので、台所の柱に縛り付けたものが一般的であった。名称は「ウメーシタティ」(箸立て)という。

ウジン(お膳)

平たい会席膳、高い老人用のタカウジンがあり、霊前用のお膳などがある。地方では芋を盛るヒラパーキー(平ざる)がお膳代用として用いられた。

サギゾーキー(提げソーキ)

煮物を一時保存する籠は、ふた付きに紐で吊るすようになっている。その改良型が同じ竹で柄を付けたものである。これをサギゾーキー(提げソーキ)と呼んでいる。他にサギデイル(提げティル)、ティーゾーキー(手ソーキ)、ユザウキ

(ふるいに似たソーキ)などの名がある。ソーキやティル(またはティール)は古くからの竹籠の名であり、この食物貯蔵用籠は新しい民具として誕生したことが分かる。

アシーウーキ(汁桶)

汁物を野良仕事のお昼に運ぶ際の用具に、アシーウーキがある。アシーとはかつて午後2時頃にとった昼食のこと。ウーキは「桶」のことで、桶状に作ってふたをかぶせた物である。また大竹の皮を削ったチチ(筒)も汁用に使われた。

ビントージュ(弁当重)

ムラでの酒肴持参の新年宴会などに、あるいは役人などの弁当箱として使用されたのがビントーまたは「ビントージュ」(弁当重箱)である。ジュウバク(重箱)は、6寸や8寸のものがあ、仏壇や墓前の供物に用いるが、用がすめば入れ物に収めて片付けられる。その入れ物を「重箱のシー」(筒)という。

チブル(瓢箪・夕顔)

飲み物に関する用具として、水入れの瓢箪容器を一般にチブル(頭の意)という。八重山地方ではカナバイと呼んでいる。チブルは、液体ばかりでなく、茶の葉や種子物などを貯蔵することにも用いられた。茶の湯は地方には普及していないが、那覇を中心にブクブク茶と称する茶を楽しむ風俗があり、くり物容器と大型の茶^{ちやせん}筥があった。

酒器

酒入れでは、焼き物の徳利や急須の他、カラカラと称する酒急須がある。カラカラは、九州のものと名称・形がよく類似している。また物見遊山に携帯する酒入れにダチビン(抱瓶)がある。その他に椰子の実を加工した酒入れがある。これをヤーシグワーという。沖縄で「グワー」は「小さい」とか「かわいい」という意味がある。

喫煙用具

煙草入れをフゾーという。フゾーに「宝蔵」の文字を当てるのは、もとは財布の役目もしたからであろうか。布、皮、木、竹、牛角などを素材とした。布製は婦人用が多かった。木製では枕兼用があり、それを海フゾーといい、糸満系の漁民が多く用いたことから糸満フゾーなどとも呼ばれた。これらをまとめて「フゾー」という。刻み煙草用のキセルをチシリという。古くは雁首に当たるところに石製・竹製・陶製などがあつた。のちに金属製もできた。キセルを収納するものをスップンという。スップンは身とふたからなる抜き差し型である。他に竹細工でできたものもあつた。

たばこ盆は、升型の中に火入れ(陶磁製)、吸い殻入れ(竹筒)の付属品を有している。たばこ盆がなまった形でタバクブンという。高めに作られたタカタバクブンは、来客用、または仏壇の備品(仏具の一種)になっている場合がある。

葉たばこを刻む板をチリバン（切り板）といい、刻み包丁のことをチリバンボーチャーと言った。八重山地方では、キザンボーチャー（刻み包丁）という。刻み包丁も台所の調理用とともに「ホーチャー」でまとめることもできる。

マッチのない時代、野外へ火を運んだのがヒーター（火縄）である。火種を運ぶ方法である。

ジーウーキ（丸木の桶）

丸木をくりぬいて底板をはめた桶をジーウーキという。木の髄が空洞になったものに手を加えて桶にしたものである。沖縄北部の山地で米櫃に使用した。

バーキ（米箒）

ユナバーキーは、「ヨネ（米）バーキ」の意で米を一時保管し、あるいは運搬する箒のことである。運搬用箒とともに「バーキ」でくられる。

マグ（茅容器）

先島諸島には、茅容器が多く見受けられるが、それは壺形のツツカサ、口の開いたマグ（またはマージ）、それに島によりガイズの呼び方がある。用途は麦や粟の保管用、近所での運搬用である。

ハンドゥー（水甕）

壺類には味噌入れ、漬け物用、穀類入れなどがある。口の開き具合や習慣的な呼び方で「カーミ」（甕）、「チブ」（壺）に分類している。一升徳利をチュワカシ（一沸し）といい、一斗壺をトゥワカシ（十沸し）という。

ハジ（竹編み）

物干しの竹の編み物をフワーザまたはハジ、ハズという。まとめて「ハジ」とした。蓆なども物干しにも用いる。その場合は敷物名のムシルである。

3) 衣

15世紀の半ば、琉球へ漂着した朝鮮漂流民の見た琉球の風俗は、「婦人は広袖衣の長袷（長い上着）の如きを着し、あるいは短襖及び裙を着す」というものであった。この服装は、服飾研究者のいう一部式と二部式の衣服である。長い上着を着た者と腰から上の胴衣（短襖）とスカート状の裙（沖縄のカカン＝裳）という上下二つからなる服装であったことが分かる。

この朝鮮漂流民よりおよそ80年後の1534年に来島した、中国の冊封使の使録によれば、「女子は頭上に帷のようなものをかぶり、人に会うとこれを下ろして面を蔽う」というのであった。上着と胴衣・裙のほか被衣の風俗があったことも分かる。ただし、彼ら外国人の見聞した場所は、都市地区に限られており、上層の子女が対象となっていたと考えられ、庶民レベルまでこの服装が浸透していたとは考えがた

い。琉球では、尚真王治世の十六世紀初め、貴賤による簪の制やハチマキ（冠）の五色による身分制度が確立した。およそ150年後の1670年には、諸士の系図編集の動きが進み、士農の分離が明確化し、服飾による身分制度もより細分化、複雑化した。

古くは権威の象徴でもあった服飾は、身分の確立がより進むにつれて、服飾の素材・色調・文様・織り方に制限が加えられた。苧麻は古くから栽培され、熱帯原産の糸芭蕉の糸で織った芭蕉布は身分の上下に関わりなく着用された。木綿は17世紀初め薩摩から伝えられて栽培されるようになった。胴衣と裙の服装は、近代に入ってから神女の着る神衣装と琉球舞踊の衣装にとどまり、長い上着が一般的になった。

下駄や足袋、草履などの履物、かぶり物の傘は上層のもので、庶民は履物がほとんどなく、かぶり物は労働に適した笠をかぶった。クバ（葵蒲）の葉で作ったクバガサがその代表である。晴天用としては、他にムンジュルガサ（麦わら笠）があった。蓑には棕櫚皮製を最上として、菅草製、クバ製などがあった。

沖縄の衣服の袖口に袂をもうけず、開いたつくりで風通し良い縫い方である。芭蕉着物は男女の区別なく、加えて老若も日常的に着用した。

フクター（防寒着）

ボロの意味とつぎはぎのおしゃれ着の両面の意味がある。ウンジョーはいわゆる「裂織り」である。沖縄北部と奄美地方に分布する作業着、あるいは防寒着である。

バサー（芭蕉着物）

沖縄ではバサー、またはバサージンという。奄美でバシャギンといい、一般的な素材であった。最も庶民的な着物の素材である。

ティサージ（手拭い）

日常使用するものと、アクセサリーとして織られたものがある。首里や読谷、与那国島にあったもので、それらの地方ではウムイスティサージ（思いのティサージ）とウミナイティサージ（姉妹のティサージ）があったという。前者は恋人への、後者は兄弟へ与える姉妹神としてのものである。

被り物・雨具

クバ笠とムンジュル笠がある。クバ（葵蒲）の葉で作った笠と麦わらの笠である。麦わらのほうは日笠用である。それ以外の素材はほとんど見ない。蓑は棕櫚皮を最上として、クバの葉製、菅草製がある。「ンヌ」でまとまることができる。

寝具

布団はウードゥまたはウールという。庶民の間では衣服のフクター同様に布を幾枚も重ねて補綴したフクターウードゥがよく用いられた。枕をマックワまたはナーファ、マッフア

などという。角材の切れ端が一般的であったが、板木を交差させて作ったアジマックワもあった。「マックワ」でくられる。

履物

下駄、草履、草鞋があった。下駄は支配層では、竹皮表の下駄があり、それをジタと呼んだ。しかし一般には足駄の訛ったアシジャと呼んだ。草履は、支配層でウジャレーといったのは「おぞうり」の意である。これも一般にはサバと呼んだ。サバの語源は不明。草鞋の形式を残すのが海用のワラグチ（わらぐつの意）である。草鞋は方言名がない。ワラグチは、単にフツとも言うが、宮古諸島でフダミといい、「踏む」ことを指す。

2. 生業・運搬

1) 農耕

古く稲作は一期作であり、立冬のころ苗代に播種をし、春の節に植付けをした。種おろしの日のことを「種子取り」と言うが、種子を「播く」という語をさけて「取る」と逆の表現がなされた。春の彼岸前後に田植えをし、陰暦六月には収穫する。夏から秋にかけて襲来する台風の時節までには、すべて収穫を終えなければならないからである。

五月は稲の出穂期である。稲の強敵である台風や大雨がこないように祈願する。六月は稲の刈り入れとともに「稲大祭」すなわち豊年祭が各地で行われる。新米のご飯を神仏に供え、村々においては、収穫したばかりの稲わらで大綱を作り、「綱引き」が行われる。

畑作は古くから行われた。水田の作れない島も多く、そのような島では雑穀を主体に生産した。タロイモ系の栽培がある。畑作の里芋と水を好む田芋であるが、田芋の茎も食用に供せられる。鈴なりの子沢山の繁盛ぶりを肴り、結婚式や出産時の祝い行事食の筆頭に数えられる。里芋をチンヌクと呼ぶのは、たくさんの子どもが「鶴の子」に似ているからだという。

サトウキビも中国から導入した。農業技術のなかでも最も進んだのが黒砂糖製造すなわち生産加工技術であった。明代の『天工開物』という本には、「二転子三鍋法」が紹介されている。「転子」とはサトウキビを圧搾して汁をとる車輪で、十七世紀の半ば、沖縄で三つ車の「砂糖車」が考案された。戦後、政策的に稲作からサトウキビ生産に転換することになり、サトウキビ生産は基幹産業となった。

ヤチバ（ハツ歯）・クルバシー

水田耕作用農具では、人力による農具の鋤が古く、のちに畜力を利用した大型農具の犁や馬鋤になる。田の碎土具である馬鋤をマーガというのはその転訛で、古くはヤチバ（ハツ歯）と言った。丸木に筋をつけて凹凸にして田の土を砕く農具で、クルバシーというのがある。八重山地方で使用されて

おり、台湾から入った農具である。台湾でラタック（碌碌）と呼ばれているものである。クルバシーは、「転がす」の意である。畑にも同名の農具があるが、しかし形態的にはヤチバ状のものである。

ターノースー（えぶり）

田の土均しに使用するのがマーカやターノースーである。マーカは八重山で使われた物で、牛馬に引かせるものである。ターノースーは「田なおし」の意で、スリイタとよぶ地方もある。スリイタは「代板」で、苗代均し板の意である。本土でいう「えぶり」で、のちにコテ状の苗代板のスリイタに形が変化する。

イザイとヤマ

牛馬に引かせる犁は、ほとんどの地方で四本の本組からなる長床犁の形式で、奄美・沖縄本島では、イザイ、ウザイ、ウダイ、ウィザイ、イーゼー、イダイなど「イザイ」系である。ところが宮古・八重山ではウシヌヤマ（牛のヤマ）、ブースクヤマ（地を耕すヤマ）、タースクヤマ（田を耕すヤマ）など「ヤマ」系である。「イザイ」系名称は「躰」からきているという。それに対して「ヤマ」系は仕掛けの意である。奄美・沖縄への伝播が古く、先島地方へは遅れて入ったということを表している名称の変化だと考えられる。田舟をフニ（舟）というが、西表島ではフモーリという。フモーリの語源は不明。

鋤

耕耘用の鋤には、水田用と畑用があり、また両用の鋤がある。普段フワグエーというのは「刃鋤」の意と思われる。他にトングエーまたはトゥングエーというのは「唐鋤」の意に解される。鋤そのものの来歴を表すと考えられる。八重山波照間島でこの鋤のことをウッサペー（沖縄鋤の意）というのは、自分の島で使っているスマペー（島鋤）に対して呼んでいるもので、のちの来歴を表している。畑ばかりでなく水田でも用いた。

又鋤の系統では、二又鋤、三又鋤がある。水田用では風呂鋤の系統のミングエー（またはマーグエー）があり、戦後はスコップの先を切り落として加工したスコップクエーがある。いずれも「クエー」でまとめることができる。

ウズンピーラ

水田を深耕する農具としてかつて存在したのがウズンピーラである。これは木製で稲株を掘り起こすことに用いられたが、労働がきついため、さほど普及しなかった。名称の「ウズン」は、「掘り起こす」または「目を覚ます」など諸説ある。「ピーラ」は、「へら」という耨耕具の仲間の意である。

ヒーラ（耨耕具）

畑用の小農具に耨耕具の一種としての「へら」がある。こ

れを古い記録では「金へん」に「平」の文字を当てている。琉球の国字であるらしく、辞書にはない。この小農具は狭い土地での農耕には向いていて腰を落として作業をする。サツマイモの苗植え、培土、除草や粟の間引きにも向いており、島々による形の変化がおもしろいほどである。名称は、フィーラ、ヒラ、ヒーラ、ヘーラ、ペラ、フィラなどの呼び方がある。「ヘラ」または「ヒーラ」でまとめることができる。

掘串

ヘラよりもさらに先端を尖らせた小農具（どうこうぐ）に「て手鉾ぼこ鉾ほりぐし」あるいは「掘串」でまとめられる系統がある。ティブク（手鉾）は、木製であるが、のちに先端部に金属刃をはめたティブクに変化する。それ以外のものは鉄串のまま、あるいは鉄串の後部に木の取っ手をつけた形は共通するが、島々による違いも顕著である。

イラナ（鎌）

収穫・脱穀調整用具では、草刈りや収穫用の鎌としてイラナ系、カマ（ハマ）系がある。粟刈り用の刃先の短い鎌を波照間島ではイララという。宮古島の粟刈り鎌もほぼ同型ながらイザラという。どちらもイラナ系である。

クーダ（竹管）

稲脱穀用の竹管は、クダ、クーダ、などが一般的であるが、イエービと呼ぶ地方もある。イエービは、芭蕉糸をすぐりとする竹鉾の名でもある。名称として「クダ」系が圧倒的であるので問題はないが、形態的に大きく違う分布に分かれる。お箸ほどの長さのクダと掌中に収まるほどの小さな物で、奄美・沖縄で複雑に分布している。

シンバ

クダのあとに普及したのがセンバである。近代に入ってからのもので、奄美ではカナクダ（金管）といい、竹管に対抗する民具とする認識があった。新しく入った道具なので、ニンシジヤーマ（稲を脱穀する仕掛け）、ティーヤーマ（手で扱う仕掛け）の他、ヒスグヤー（脱穀する動作）などそれぞれの地方で付けられた名称もある。「シンバ」でまとめられる。新しく道具類が伝播して普及する段階で、どういう名で呼ばれたか、参考になる民具の一つといえよう。

ユイ（篩）

脱穀調整具の一つに篩ふるいがある。篩は選ることからユイという。八重山地方でユラシ、与那国島でドゥラチという。与論島では舂通しをアラユイ、米通しをナーユイ（中ユイ）、粉通しをユンジャマという。ジャマはガマすなわち「小さい」ことである。全体を「ユイ」でくることができるといえる。

唐竿

豆類を脱穀する木槌はセージチ、回転する「唐竿」にはク

ルマボー（車棒）またはクルマンボー、フーマボーともいう。マミウチボー（豆打ち棒）ともいう。また宮古地方でヤマボーというのは、仕掛けのある棒の意である。

ソテツの実割り

ソテツの実割り用具は、南西諸島だけに見られるものである。角材に小さな穴をあけた台木を粟国島でタンナーワヤー（実割り）、押し切り型を奄美でソデツナイキリ（ソテツ実切り）、ヤンブイキリ（ソテツ実切り）などという。槌では幹を削ったものをたたく。これを粟国島ではユクティ（横手の意）またはサンジチャー（棧槌）という。

ウーシ（木臼）とアジン（杵）

穀物調整用具の筆頭といえば、ウーシ（木臼）である。他にウス、ウース、ウッチなどの呼びかたがある。穀物の調整から精白、製粉までこなすものであった。臼と共に使用する杵は、稲のノギ折り用のンニカチ、またはカチアジンがあり、精白、製粉用の杵とは区別した。杵のことを沖縄本島地方ではアジム、アジンなどといい、奄美でアディム、アドムといい、語源は「粟杵」であるとされる。これに対して先島地方ではイナツク、イナンキ、ナンティ、インツク、などといい、「稲搗き」であるという。「粟」と「稲」の両文化圏があり、ひとつにくくるのは困難である。標準的名称は南西地方内では見つからない。そこで「キネ」という日本語が必要となる事例である。なお、横杵はカキジチまたはユングイーという。縦杵に対して横杵は後に入った民具で、奄美で縦杵をシマアジンというのに対し、ヤマトアジンというのは、横杵が他所から入ったことを物語る。

シルシ（摺臼）

臼の仲間に「ね摺り臼」がある。ヒキウス系とスリウス系に分かれる。基本的な形は下臼に上臼を重ねたもので、紐を引いたり横の取っ手を握ったりして半回転して^ねを摺る。ただし、ウスの前に付けるのがメー（米＝ご飯）、フミ（クミ＝米）、ユニ（ヨネ＝米）、ンニ（イネ＝稲）などの相違がある。

ミーゾーキー（円形箕）

調整具で忘れてはいけなのがユイ・ミーゾーキーと併称される竹製品である。ユイはすでに説明したのであるが、竹の平^{ひら}_{ざる}に孔をつくって穀類をふるう用具である。ミーゾーキーは、「ミ＝箕」＋「ソーキ＝^{そうき}筭箕」という形の複合語である。ただし奄美地方では、サンバラという。九州以北の片口型の箕に対抗する円形の箕である。名称の後半部をあげるとバラ、ハラ系とソーキ系に大別できる。バラ、ハラ系は鹿児島の「バラ」の影響を受けて奄美から沖縄本島北部に分布し、沖縄本島中北部以南の先島までは「ソーキ」であり、名称の上で二つの文化圏を形成している。

2) 漁撈

海に囲まれた島嶼県の沖縄であるが、漁業に対する認識が弱く、そのため港湾の整備が遅れ、大型の漁船もなく漁業と呼べるほどのものはなかった。人々はイノーと呼ぶ珊瑚礁の岸の内、すなわち礁湖での伝統的な漁撈を続けてきた。イノーは貝塚時代から利用されつづけた漁場であり、魚類や貝類、海藻類がとれる場所で、「海の畑」ともいわれる。

漁撈には、釣り漁、潜水漁、突き漁、網漁などがある。沖での烏賊釣り、鰺釣りなども行われた。

イノーでは、数人で行う小規模の追い込み漁があった。浅瀬の海面を手でたたいて魚を網に追い込むもので「パンタターカー」という。これに対して深い海での追い込み漁は「アギヤー」といい、魚を深い海から浅い所に張った網へ追い上げることを意味している。

ティール漁

同じ籠漁でも「ティール漁」は釜の一種である。円形の籠の上部に入り口をもうけ、返しをつけたもので、餌を入れて海底に沈める。標識をおかず、サンアテ（山当て）の方法で籠の設置場所を確認して引き上げる。

珊瑚礁の上での魚介類の採捕には、初夏の昼間の干潮と秋から冬にかけての夜間の干潮時に行われる潮干狩りがある。とくに夜間の漁を「イザイ」という。それは「いさり」のことである。漁り火をともし、銚をもつてタコや魚を捕るのである。

貝殻の民具

貝類の種類が豊富である。タカラガイや二枚貝のシャコガイは漁網の錘、ホラガイは報知具や湯沸かし、二枚貝では汁杓子、タカセガイでは壺のふた、ヤコウガイは漆器の素材（螺鈿）、スイジガイやシャコガイは魔除けのしるしである。

サバニ

漁撈用の舟は、松やシイなどの大木をくり削ったいわゆる丸木舟で、マルキンニまたはマーキサバニと呼んだ。近代になって宮崎県の飢肥杉の厚い板が入り、それによって「糸満ハギ」が誕生した。糸満の船大工が作り出した舟なのでそう呼ばれ、軽くて速度の出る舟で、「本ハギ」ともいう。本ハギというのは、戦後「南洋ハギ」という板材節約型の舟が出たからである。これらの舟を総称して「サバニ」と呼ぶ。和船系のような鉄釘を用いず、フンドゥーという板楔と竹釘によって板と板を接合するところに本ハギすなわち糸満ハギの特徴がある。

サバニの付属品

まず櫂がある。櫂は舟の右舷・左舷から潮を掻き寄せ、舟を推進する用具である。帆を「フー」といい、櫂のことを沖縄本島地方ではウェークというが、宮古地方でイザク、ヤク、ザーク、ズザク、八重山地方でヤクー、イヤグ、ダグ

一、奄美地方でヤホー、ユホー、ヨーという。沖縄本島が中心というだけで「ウェーク」を標準名称とすることができるか疑問もある。南西諸島内で別の標準名が要求される。そこで「カイ」がとおりがよいということになる。

アカ取りをユートゥイという。ユーとは船底に溜まるアカのことである。舟の種類によって2～3種類があった。舟の碇のことをンブシ（おもり）というのが一般的である。帆を「フー」といい、綿布を使用して作る。

トウジャ

魚突きの三本銚をトウジャという。語源は「研ぎ矢」であるという。トウガ、トウダ、トウギヤと大方トウジャ系であるが、奄美地方ではイチギヤまたはイチユギヤと分かれる。サーラトウジャは、サーラウージという疑似餌とセットで用いる。三本銚であるが、銚の部分が抜けるようになっている点が異なる。一本銚をウジム、ウギンという地方とイグン、イギユミという地方に分かれる。『おもろさうし』には「いぎよも たこつく」とあり、イグン系がこれにより近いように思われる。古くは海中の自然の穴からタコを獲るのに用いた漁具である。

カキバリ

数本の針が柄の方向に鈎状に開いたもので、烏賊を掻き上げるもの。イカイユ（イカヂー）という疑似餌同様の鈎をもっている。

アミ（網）

網をアミという。一人で単独に用いるサディ（叉手網）や大型のヤンダー網、ウチアミ（投網）、四角に張ったパイアミ（張り網）、多人数で用いる追い込み用網（袋網とソデ網）、定置網などがある。獲れる魚の種類によってクスク網、イラブチ網、グルクン網、スク網などと呼ぶ。または小規模の追い込みに用いる場所を指してワリジケ（水路用）網などとも呼ぶが、まとめて「アミ」である。

ウミディール

魚籠に相当する籠をウミディールという。ティールとは「手籠」のことで、ピックも餌籠も弁当籠も用途は異なるものの、すべて「ティール」でくくられる。計量用のザルをキンパーキといい、「パーキ」である。

ミーカガン（水中眼鏡）

これは明治10年代、糸満の漁師により考案されたもので、現在では全国に普及している。これに対し桶眼鏡は箱型、樽型がある。それをタマウーキというのは、「玉（ガラス）桶」の意である。

ウミバク（海箱）

釣り針や釣り糸、縄その他の貴重品を収める箱をウミバク

(海箱)という。地方によってはチーバク(釣り針箱)とも呼ぶ。大型のものをウミビツというのは「海櫃」のことである。

ウケ

川用と海用がある。川用は片すばみのものであり、海用は円形の籠の上部に入り口を設けたもので、沖縄本島の北部でアニク、中南部でアイクという。北部でも海用をウミディール(海籠)、タマンバーキ(鯛ざる)と呼ぶことがある。奄美では主に川用に対してアディホ、アネク、アリョーという。

3) 山樵用具・狩猟用具・加工用具・職人用具

山樵用具では、ヤマカタナ(山刀)がある。山仕事で鉋の役割をする物で、ヤマナジともいう。「山薙」であろう。八重山諸島、沖縄本島の北部に多く見られる。八重山地方でヤマンガラシともいう。ここでは「ヤマナジ」でくりたい。山仕事でのもう一つの主人公と言えば、斧であろう。斧はウヌ、ウーヌ、ウーン、プーヌ、奄美ではウム、オンという。『おもろさうし』に「いしおうの」「かなおうの」とあり、古くから「オーノ」すなわち「ウーヌ」に近い発音をしていたことが分かる。鉄刃先に台木をつけたもので、山用と薪割り用を区別した。

狩猟用具の槍を沖縄本島北部ではヤイ、ヤマシシヤイ(山シシ槍)という。八重山地方ではフクまたはプクという。フクは「鉾」である。沖縄北部で槍といい、八重山は鉾である。

椿油搾り用具を単にアングシブヤー(油搾り)という。形の上からトゥイグチ(鳥口)ともいう。椿油は食用、または整髪用にした。

蕙製作用具をムシルバタまたはムシルヤーマという。蔺草をさすイーサシ(蔺差し)とフドゥチ(箴)が付属品として付いている。ここでも「機」系と「仕掛け」系に分かれる。

オーダー(もっこ)製作用具には又木を利用した石錘によるもの、正方形(または長方形)の木枠に釘を立てたものなどである。オーダーヤーマあるいはオーダーツクヤーと「ヤーマ(仕掛け)」「作るもの」などの名で呼ばれる。又木に石錘の道具は、刳俵や炭俵作りにも用いる。

漁網製作または修理用の針をアグイという。編み目の大きさをきめる板のことをアギタという。

屋根葺き用具には、ヤーサシパーイ(屋根葺き用針)、はさみ、鎌、カヤシミヤー(縄締め)、ユングキー(木槌)スリタ(板こて)などがある。

鍛冶用具には次のようなものがある。フーチ(ふいご)、カナカ(金床)、トーニ(石製水容器)、ヒパーシ(火箸)、ゲンノウ(ハンマー)、ウフジチ(大金槌)、シミカチ(炭掻き)、タガニ(たがね)、ミーチー(目打ち金槌)、シン(せん)などがある。

大工用の錐には、火起こし錐に似た回転錐のクルマイリ(車錐)と弓で回転するトーイリ(唐錐)がある。まとめて「イリ」でくることができる。

屋根瓦製作用具には、ミーガーラグルマ(女瓦用轆轤)と

ウーガーラグルマ(男瓦用轆轤)を筆頭に瓦型につけるカーラチン(瓦衣)、カーラバク(瓦桶)、クワーヒン(土きり弓)、ジョージ(定規)、ナディ(土なで板)などがある。中国式の造瓦法であり、道具もそれに由来すると思われるが、名称は沖縄風である。

製塩用具では、サシ(砂撒き用板)。海水を汲むものはターグ(おけ)、撒いた砂へ海水をかける容器はサラという。砂をかき混ぜる用具をクルバシー(大きな櫛型)、砂を集めるユシ(寄せ板)、集めた砂をオーダー(もっこ)または手押し車に取り込むゾーリン(鋤簾)がある。砂を集積する小さな施設をクミという。塩炊きの平鍋を単にナービという。

石工用具では、ヌミ(のみ)、イヤ(ヤ)、石ユーチ(石よき)、ハンマー(金槌)、ヒチ(刃のある鉄棒)などがある。

養蚕用具として、木製の蚕箱以前に用いられた竹や芦を編んで作ったものがあり、これをハジまたはハジャ、ハージャ、パジャなどという。語源は「波瀬」である。

製糸用具として、真綿から糸を紡ぐ器具がチーシー(ティーシーとも)がある。これは台木に小さな柱を立て、その頂部に十字に板を差したもので、後に竹柱に板製の円盤を載せたものになる。経糸を整形するカシギー(梓木)はH字形であるが、後に回転式のクイメーに変化する。

糸を入れておく容器は、糸の種類や島々により異なる。宮古・八重山ではカヤ容器のマグや板製(箱形)のサックイが用いられる。久米島紬では挽き物のケーローというものが用いられた。

芭蕉糸をすぐり出す竹割り鋏をイエービという。その芭蕉糸を収める籠をウーバーラーまたはウンゾーキーという。ウー、ウンは、苧麻や糸芭蕉を指し、ハーラやソーキは竹籠の名称である。

糸車はハタ(機)系、ヤマ(仕掛け)系の名称に分かれる。糸巻きは、ワクという。

4) 畜産用具

農家で家畜を飼養する風景は、戦後も長い間残っていた。家畜も人と同じ屋敷内に飼養した。馬はンムゲー(おもがい)・手綱をつけて馬小屋に立て、草を餌にする。牛は鼻に孔をあけて手綱を通し、先端に木の輪をつける。それを単に「牛のハナ」という。牛小屋に餌台を置いて草で飼う。山羊は首を縄でくくって柱に繋ぎ、木の葉の餌で飼う。豚は石積みや木柵の囲いの中で飼う。餌は汁物が多いので、餌入れのトーニを用いる。トーニは木のくり物、焼き物などがある。鶏は、稲の収穫後は放し飼いが多く、自由に餌あさりさせられたものであるが、タウチャー(軍鶏)を飼う場合に用いたのが六ツ目編み籠である。これをロッカクミーといい、また目が大きく開いていることからミーバーラーとも呼んだ。

5) 交易用具

枡

一般にチョーバン（京判）という。地方によりマーシ（枡）ともいう。しかし、一合枡をナカムイといい、一斗枡をトーと呼び分ける。枡に盛った穀類を平らに均す短い棒をトーカチ（斗掻き）という。

ハカイ（竿秤）

竿秤を一般にハカイという。大秤のことをチンドーという。銭函はジンバクという。魚売りが用いた銭籠はジンディールという。

6) 運搬具

運搬とは、ある物のある地点から他の地点へ移動することをいう。人体で持って移動するほかに畜力を利用することもある。そして現在最も発達したのが「運ぶ」という部門かも知れない。

畜力利用からみて、馬車がある。バシヤは近代に入って普及した。牛そりを八重山地方では使用した。それをマータというのは、又木を利用したからである。舟では、漁撈具として紹介したサバニも一種の運搬具である。大型船では山原船（マーラン）がある。

クラ（鞍）

牛馬の背中を利用する運搬では、曲がり木のクラがあり、その下に敷くシチャンラ（下鞍）がある。そのニグラ（荷鞍）に対して馬車にはバシヤグラがある。

棒

人力では、男子の担い棒がある。沖縄本島地方ではボーであるが、先島地方ではパウ、アウク、アグ、アーフ、奄美地方でボーまたはオホ、テギョーという。パウが多数を占める。アウク系とパウ系に分類される。

カブシ

女性の運搬は奄美から以南で二大別される。頭上での運搬法と額から背負う運搬法である。頭上では荷と頭の間にクッションとなる輪を載せる。沖縄本島ではそれをガンシナという地方が多い。しかし先島地方の多くはカブシ系名称である。カウス、カプスといい、沖縄本島の離島でもカブシリ、カブシナといい、奄美でもハシ、カシリ、ハブシリーという。八重山の一部地方ではツケー、シチキなどもある。分布の広がりでは、種子島のカーブシに通ずるカブシ系であるが、沖縄では「ガンシナ」系が標準的と思われる。

頭上運搬の尻では、背の低いパーキ系の竹製品が多くを占める。

ティール

額背負いの運搬法では、背の高い籠がよく使われる。奄美地方ではテル、ティルの名称が多く、沖縄北部でもティルまたはティールという。また一部の地域でイビラフともいい、奄美では海用の籠をイビロクまたはイビラクと呼び分けている。全体を「ティル」または「ティール」でまとまる。

アンツクとアンディル

縄を編んだ袋状のものが種々ある。箱形に作った八重山地方のアンツク（アンック）、宮古地方の袋状のアンディラ、沖縄島周辺離島の粟国島のアンディルなどがある。これらは腰に付けて弁当や小物（小農具）などを入れる物である。「アンツク」または「アンディル」でまとめられる。

ターラ

籾俵はすでに消えて、吠へ移る。俵編みの技法は、粟国島の運搬具で麦わら製ターラや宮古島のクバの葉製のターラグー、同島の綱を俵編みしたツンダーラなどに見ることができる。名称では「ターラ」でまとまるが、用途の上では次の「もっこ」の部類にも加わる要素をもっている。

オーダー（もっこ）

運搬具の代表的なものの一つにオーダーがある。オーダーは、九州の「負駄」が語源と思われる。アウダ、アオダと呼ぶ地方があり、これに近い。奄美から八重山まで「オーダー」系である。似たものにシーブというものがある。牛馬の背鞍に合わせた棒や木杵に取り付けた二枚の袋状のものである。名称の由来は、地方から首里王府へ歳暮を献上する際物入れとして用いたことによるという。「セイボ」→「シーブ」である。

旅行に関する民具

小櫃がある。一般にヒチグワーという。米や着替え、書類などを収納した。また、カジバタ（風旗）というものがあり、旅行者の家で旅行中の安全祈願をした印し旗である。かつて旅行をすることができたのは役人層であり、公用であった。

報知具

プラ（ほら）、カニ（鐘）などがある。

3. 団体

フダ

集団の共同生活に必要な制約は種々ある。それを表すものの中にフダがある。地方では農事に関するフダが出始めている。農産物を荒らした者や他人の畑に家畜をつないで荒らした者、などである。その他に有名な「方言札」というものがあった。標準語一本化を標榜する運動のひずみと現在では認

識されている。

サン

地方に残るワラザンは、文字記録に匹敵するもう一つの「記録」である。それは個人の備忘として数字を留め置いたものがほとんどである。その中に多人数を記録するサイまたはサンがある。家普請や祭りの米徴収などにも使用された。中央には残らない民具の一つである。

ヌキ

国頭地方にのこるヌキと称する、ムラの全戸の名を記述した板も祭りの前に米徴収を一時的に記録するものである。

4. 信仰

御嶽は沖縄諸島でウタキ、ムイ（森・盛）やウガン、八重山地方でオン、奄美諸島でオボツヤマまたは神山と呼ばれる聖地の総称である。ムラには一つ以上の御嶽があり、ムラを守護する神の常在する場所と考えられている。

御嶽の位置は必ずしも一定しないが、典型的な例として、背後に御嶽があつて近い麓にムラの旧家（根所または根屋という）があり、ムラは前方へ広がる。そのような御嶽は「腰当て」とたとえられる。

御嶽の奥深く中核をなす場所がある。そこをイビという。イビは神の鎮座する所であり、ノロやツカサと呼ばれる神職の女性（神女）しか近づけない。御嶽にはクバ（葵蒲）やマーニ（クログ）などの木が密生し普段は近づくことさえためられる所である。このような御嶽は、琉球諸島全域に存在する。沖縄では、鳥居や神殿をもつ神社になった一部の事例は、戦前・戦中の皇民化教育と連動した結果によるものである。

ヒヌカン（火の神）

ヒヌカン（フィヌカン）と一般に呼ぶが、ウカマガミ（御かまど神）、ウミチムン（御三物）の呼称がある竈の神すなわち台所にまつられている三個の石を依代よりしろとする神である。元来煮炊き場である竈の守護神であるが、のちに家の守護神と考えようになった。旧暦十二月二十四日を「御願解き」といい、その年の正月に願掛けしたことに対するお礼、すなわち「結願けつがん」である。この日、火の神は昇天し、翌年の正月初めに降臨するというのも道教との習合が考えられる。毎月の朔日と十五日にはお茶湯をあげ、結婚式や赤子の名付けにも火の神の神意を仰ぐのである。近年シンボルとしての三個の石は見られなくなっているが、都市生活者の間では、小さな香炉を置くことによって、火の神を表している例が多い。いづれにせよ、古い火の信仰と道教の思想が習合したものである。

仏教の影響が希薄のため、偶像の類がきわめて少ない。屋敷や家屋にあるものを置いて魔除けにする事例は多く見られ

る。一種のアニミズムの世界である。

ムンヌキムン

一連の「魔物よけ」「邪鬼はらい」の物がある。貝殻を利用した物が多い。二枚貝のシャコガイは、方音ではアジケーという。アジは交差することである。祭具に用いるポチョウジ（琉球青木）をアザカと呼ぶのと同様で、十字型や×型は「締め」の意味が含まれている。スイジガイ（水字貝）やクモガイ（蜘蛛貝）の角も魔除けを意味する。また貝のもつ女陰形も一種の駆邪の霊力をもつと信じられている。

ススキのサン

ススキの葉を結んだサンは、ゲーンともいう。古い書物にゲーンは「ススキのこと」とある。ススキは邪鬼を祓う霊力のある植物と考えられている。年中行事のなかで、あるいは吉凶の祓いの場で使用される。「サン」は「算」に通じ、呪術的なモノからワラザン（藁算）のような数の記録までを指す、古い習俗に根ざしている。

シーサー（獅子像）

ムラの入り口や屋根において邪鬼を寄せ付けない役目をするものと考えられている。また、動的なモノでは獅子舞のシーサーもある。いずれもシーサーであり、「魔除け」や「祓い」の要素をもっている。

神酒容器

祭事での神酒注ぎ器には、いろいろなタイプがある。神酒を樽のなかで醸し、それを柄杓ひしやくですくい、杯にそそぐ。その際、急須形の容器を先島地方で用いている。それをバタスという。この容器は沖縄本島地方には見られない。神酒をいれる大椀をユノーシというのは「世直し」の意であろうか。先島地方ではサラという。名称のうえでワンとサラの文化圏に分けられそうである。

線香

自宅の霊前でも戸外の神拝みにも用いるのがクルウコウ（黒線香）である。6本を横に並べたやや波状の平面になるところから、ヒラウコウともいう。現在、お盆行事などでは、日本線香や台湾製の竹芯線香もよく用いられている。しかし、家庭での法事や戸外での神拝みには欠かせないようで、沖縄全域で見ることができる。

仮面

沖縄本島には少なく、先島地方に多い。宮古のパーントゥ、八重山のアカマタ・クロマタ、アンガマ、フサマラ、ダドゥーダ、ミルクなどはよく知られている。

綱引きの綱

団体生活・娯楽の分野であるが、ここにおいたのは、綱引

きには、年占や雨乞い、神行事と不離一体の部分が多いうえ、綱引き後の特殊な儀礼があり、ここにおいた。綱はチナといい、綱引きはチナヒチである。

5. 葬制

琉球諸島の葬法は、現在では火葬が一般的であり、古い葬法は一種の風葬である。風葬はもともと崖下や藪の中に遺骸をおいて風に晒し白骨化をまつのである。亀甲墓や類似の墓室をもつ墓に遺骸を置くのも一種の風葬と考えることができる。

葬送から数年後、遺骨を棺箱からとりだし、きれいに水で洗い、骨をジーシガーミ（厨子甕）に納め、墓内奥の石段に安置する。この死者儀礼のことをシンクチ（洗骨）という。二次葬であり、洗うことや二度にわたる儀礼により、死者の魂も清められるという思想に基づくのである。

葬送具

大きな用具といえば、棺箱を納めて運ぶガン（龕）がある。朱塗りの屋根のある輿形で、数人の男性が担いで墓地まで運んだ。ガンが一般的な呼び方であるが、コウまたはガンゴウという地方もある。ガンゴウは「龕講」すなわち、葬送組織からきていると考えられる。共通名称として「ガン」が適当である。

ジーシガーミ（厨子甕）

火葬以前の骨甕は、古くからの厨子甕である。一体とは限らず夫婦二体を納めることができるほどの大きな甕である。素材は石、木、焼き物がある。形は甕形が多く、他に家形がある。名称としてジーシガーミ（厨子甕）といい、石製にはイシジーシ（石厨子）という。板製は古いがさほど普及していなかったため、名称は定かでない。

沖縄民具の共通名について

上江洲 均

沖縄の民具は、島ごとに違う名前では呼ばれているといえるほど、地方名が多い。そこで、まず沖縄のそれぞれの民具をひとくりにできる名称はないか検討を行った。沖縄の言語は日本語の中では特異なものに思われるが、日本語の五つの母音が三つの母音に置き換わっているため、例えば「箒（ほうき）」は「ホーチ」と発音される。今回は首里で使われていた名称を基本とし、地方名と比較しながらまとめていったが、道具によっては数多くの地方名を持ち、一つの名称だけでまとめるのは難しいものも少なくなかった。また、中身を意味する名称がいいのか、それとも形状がわかる名称がいいのか、使われ方を意味するもののほうがいいのかなど、今後の検討課題も多数見つかった。

表 1 島による呼称共通性と違い

①全島ほぼ共通		下駄	アシザ・アチダ・アスザ
三本鍬	ミツマタ・ミマタ・ミマター・ミツバ・ミチバ	枕	マックワ・マッフア
二本鍬	フタマタ・タマター・タチマター	俎	マナタ・マヌタ・マナチャ・マルチャ
馬鍬	マーカ・マーガ・ヤチバ	②与那国島だけ異質であとはほぼ共通	
一本歯鋸	イグン・ウギン	餌箱	ワースタライ（与） トーニ・トネー（その他）
三本歯鋸	トゥンダ・トゥンギヤ・トゥジャ・トゥギヤー	③奄美だけ異質であとはほぼ共通	
疑似餌	イカウウ・イカジー	蓑	ミノ・ニヨ・ニヨー（美） シヌー・ンヌ・インヌ（その他）
釣鉤	カキダー・カキジャー・カキヤー	鉞	ユキ・ドゥマー・ウングワー（美） ウヌ・ウヌ・ブヌ（その他）
車錐	クルマイリ・フルマイリ	④奄美および沖縄本島共通・先島（除与那国）で差異	
船	サバニ	山刀	カタナ・ヤマカラス・ヤマンガラス（先島） カタナ・ヤマナジ・ヤーナギ（美・本）
馬車	バシヤ・バサ	投網	フッチャン・ウチャーン・ウッティアン（先島）
もっこ	オーダ・オーラ・オーダー・オーラー・アウダアブダ	チチョー・チチアミ（美・本）	
鍋とり	ナビトゥイ・ナビウチムヌ	杓子	イビラ（先島） ナビゲー・シルゲー・ミシゲー（美・本）
船アカとり	ユートウイ	⑤奄美・沖縄本島および先島・与那国で差異	
鉦	ヘラ・ビラ・ヒラ・フィラ	ムシロ機	ムスウイダーマ（与） ヤマ・ヤーマ・ムッスヤーマ（本・先） ジバタ（美）
壺（耳付）	ミンチブ・ミニチブ・ミニガーミ	釣瓶	ンブル（与） チー・クバズー（本・先） ツリウイ（美）
甕	カミ・カーミ	煙草入	イスカブドゥ（与） ブゾー・フゾー（本・先） チチ・ハンズツ（美）
杓	ソーキ・パーキ		
臼	ウス・ウチ・ウーシ		
蒸器	クシキ・クシンキ・クシチー		
豆腐箱	トーフバク		
箒	ホーキ・ホーギ・ホーチ		
ランプ	ランプ		
水中眼鏡	イスミーカガン・ミーカガン・イショメガネ・メガネ		
笠	クバガサ		
ぞうり	サバ		

下げ鉤	カギダ (与) ガク・ガフ (本・先) ケーマ・ズゼ (美)	⑧奄美・沖縄本島・先島・与那国で差異 (稀)
火縄	チントゥー (与) ヒナー・ビナー・フィナー (本・先)	⑨奄美・沖縄本島・宮古・八重山および与那国で差異
火吹竹	チーティームン (与) ピーフキ・ヒーフキ・ヒーフチャー (本・先) シューグシ (美)	吊籠 サギディル・サギディール (八・与= サギゾーキ・エーゾーキ (宮) ティーゾーキ・サギゾーキ (本) マゴ・ミゴ (美)
団扇	クバーウン (与) オンギ・オーグ・オージ (本・先)	茶碗籠 サバンウスバシムヌ・サバンウスフキムヌ (八・与) ザル (宮) チャワンバーキ・ワラビジョーキ (本) ワラビカゴ・ワラビマーグ (美)
天秤棒	スー (与) ボウ・ボー・パウ (本・先) テギョー (美)	⑩奄美・沖縄本島および宮古・八重山・与那国で差異 (稀)
箕	スギティ (与) ミーゾーキ・ムイゾーキ (本・先) ハラ・ハーラ・ファラ (美)	⑪奄美および沖縄本島・宮古・八重山・与那国で差異
糲摺臼	ヒカシウッチ (与) ヒキウス・ピキウス (本・先) スルス・スリシ (美)	芋盛籠 イムヤー (与) スーフタ (八) ソーキ・バーキ (宮) セーマー・セーマグ・バーキ (本・美)
⑥奄美および沖縄本島・先島・与那国で差異		⑫奄美および沖縄本島北部・南部・宮古・八重山および与那国で差異
犁	ターカシダマ (与) ウシヌヤマ・ズースクヤマ (先) ウザイ・ウダイ・イザリ・イザイ (本・美)	鋸 ヌキル・ヌクディ (与・八) ノカズー・ノコズー (宮) カガイ (本南) ノコ (本北・美)
竖杵	ナンティ (与) イナシキ・イナツク・イナズツ (先) アジム・アドム・アズン (本・美)	⑬奄美・沖縄本島・宮古・八重山・与那国で差異
糸車	ダマ (与) ヤマ (先) ハタ・バタ (本・美)	平鋤 カニパンガイ・ヒラハンガイ (与) カニバイ・カニパー (八) ファツ (宮) ファーグエー (本) ケー・トーゲ (美)
碾臼	トウブウッチ (与) イシウス (先) ヒキウス・トーフウシ (本・美)	榊 ング (与) シナ・サー (八) ツガ (宮) マシ・チョーバン (本) ツガ・ティガ (美)
わらじ	チー (与) フダミ・フツ (先) ワラグチ (本・美)	カイ ダクー (与) ヤク・ヤクー (八) イザク・ズザク (宮) エーク・ウェーク (本) ヤク・ヨホ・ヨー (美)
篩	ドゥラチ (与) ユラシ・ユラス (先) ユイ (本・美) ゴ・ワラビマーグ (美)	蕤 ニヌブグ (与) ハダムス・パームス (八) ニク・ムツス (宮) ニクブク・ヌクブク (本) ムツシユ・ハジャ (美)
⑦全島で異なる		千齒扱 ンニンダイダマ (与) アーファ・スンパ・アーバ (八) シンバ・ティヤマ (本南) シンバ・メーシザー・メーシグムン (本北) カネクダ・センバ (美)
田均板	クルバサー (与) ハラ・ハラブ (八) 無 (宮) スルイタ・スーチャ (本南) タノーサ・タノシムヌ (本北) スル・ウリシャ (美)	